

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第222集

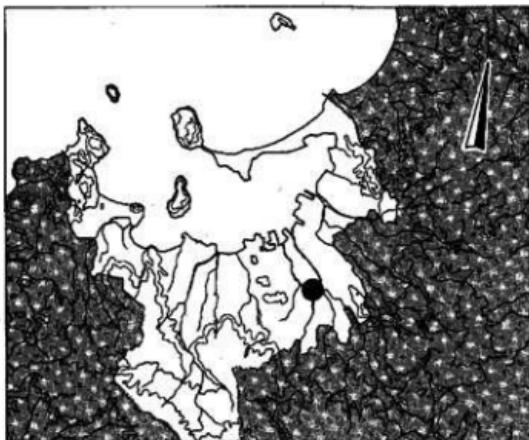
那 珂 2

1990

福岡市教育委員会

那珂 2

— 那珂遺跡群第13次調査報告 —



1990

福岡市教育委員会



図1 調査区全景（東から）



図2 那珂13次地点遺跡出土遺物
(堅穴住居 215)

序 文

福岡市域内には数多くの埋蔵文化財が包蔵されております。

福岡市教育委員会では、やむを得ず消滅する遺跡については、各種の開発事業に先行して記録保存のための発掘調査を実施しております。

那珂遺跡は福岡平野のなかでもかつての奴国を中心地ともいわれる地域に位置しており、最近の発掘調査によって重要な発見が相次いでいるところでもあります。

このたび、都市計画道路竹下駅前線の建設工事にともない路線内の遺跡の調査が必要となり、本書はその調査結果を報告するものです。

発掘調査に際して、ご協力いただいた工事関係者、周辺住民の方々に感謝申し上げるとともに、本書によって、文化財の保護と活用というわれわれに課せられた責務をいくらかでも果たすこととなれば、幸いです。

平成2年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

は じ め に

1. 本報告書は、昭和62年度に福岡市教育委員会がおこなった、那珂遺跡第13次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した実測図の作成は、調査担当者がおこなった他に田崎博之氏、須原久美子氏の協力を得た。記して感謝申し上げる。
3. 本書の執筆は、調査担当者のほかに、田崎がおこなった。
4. 本書の編集は、調査担当者がおこなった。
5. 発掘調査・整理報告は杉山富雄・小畠弘己が担当した。
6. 今回報告した資料は、すべて福岡市埋蔵文化財センターで、収蔵管理する予定である。

遺跡調査番号	8736	遺跡略号	NAK. 13
調査地地籍	博多区那珂二丁目地内		
工事面積	2,000m ²	調査対象面積	1,600m ²
調査期間	1987年11月4日～1988年3月30日 事前審査番号		

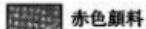
凡　　例

1. 方位は真北を示す。
2. 掲載図中、トーンは下記のものを示す。

遺構実測図



遺物実測図



本文目次

I	那珂遺跡群とその調査	1
1	那珂遺跡群の位置	1
2	那珂遺跡群の発掘調査(図4, 表)	1
II	那珂第13次地点遺跡の発掘調査	3
1	調査の経過	3
a	都市計画道路竹下駅前線に係る発掘調査	3
b	試掘調査	3
c	発掘調査の組織	3
d	発掘調査の実施	3
2	発掘調査の方法	3
a	遺構の検出	3
b	記録のための基準について	4
c	記録について	4
III	発掘調査の成果	7
1	那珂第13次地点遺跡の遺構と遺物	7
2	弥生時代の遺構と遺物	7
a	竪穴住居	8
	竪穴住居 121 (図 7・8・10)	9
	竪穴住居 141 (図 9・11・12)	9
	竪穴住居 152 (図 9・12)	9
	竪穴住居 240 (図 13・15・17・82)	10
	竪穴住居 280 (図 16・18~20・82)	11
	竪穴住居 290 (図 21・22・25)	12
	竪穴住居 300 (図 23・24・26)	13
	竪穴住居 460 (図 27~33)	15
	竪穴住居 790 (図 34・35・38)	17
	竪穴住居 860 (図 36・37・39)	19
	竪穴住居 1 (図 40~45・82)	23
	竪穴住居 51 (図 46~48・52・53・82)	29
	竪穴住居 73 (図 49~51・54~56)	30
	竪穴住居 250 (図 57~59)	35
	竪穴住居 780 (図 60~63・66~68・82)	35
	竪穴住居 800 (図 64・65・69・76・77)	39

a	堅穴住居	810 (図64・70・71・78・79)	42
a	堅穴住居	820 (図72・73・80)	44
a	堅穴住居	840 (図74・75・81・82)	44
a	堅穴住居	930 (図83-89・90・153)	45
b	掘立柱建物	54
b	掘立柱建物	1040 (図91・92)	54
b	掘立柱建物	295 (図93・96)	54
b	掘立柱建物	310 (図94)	55
b	掘立柱建物	400 (図95)	55
b	掘立柱建物	600 (図99)	57
b	掘立柱建物	610 (図97・100)	57
b	掘立柱建物	620 (図98・101)	58
b	掘立柱建物	630 (図102・105)	58
b	掘立柱建物	640 (図103・106)	59
b	掘立柱建物	641 (図104・107)	59
b	掘立柱建物	642 (図104・107)	60
b	掘立柱建物	750 (図108・115)	60
b	掘立柱建物	755 (図108)	60
b	掘立柱建物	870 (図109)	62
b	掘立柱建物	1090 (図110)	63
b	掘立柱建物	1100 (図111・116)	63
b	掘立柱建物	1110 (図112)	64
b	掘立柱建物	305 (図113)	64
b	掘立柱建物	850 (図114・118)	65
b	掘立柱建物	625 (図117・119)	65
b	掘立柱建物	1120 (図120)	67
c	袋状堅穴	68
c	袋状堅穴	805 (図121・122)	68
d	井戸	68
d	井戸	228 (図123・125・126)	68
d	井戸	255 (図124・127・128・135)	71
d	井戸	465 (図129・130・134・135)	74
d	井戸	1080 (図131・132・135)	76
e	小穴 (図133・135)	77
3	古墳時代前期の遺構と遺物	79
a	堅穴住居	79
a	堅穴住居	55 (図136-138・141・142・144)	79

竖穴住居	900 (図139・140・143・145)	81
竖穴住居	910 (図144・146～148)	84
竖穴住居	920 (図144・149～153)	85
b その他の遺構	88
	石棺墓 422 (図154～156)	88
4 古墳時代後期の遺構と遺物	90
a 竖穴住居	90
	竖穴住居 215 (図157～165)	100
	竖穴住居 480 (図157・158・164・168)	100
	竖穴住居 490 (図166)	100
	竖穴住居 500 (図167)	100
	竖穴住居 510 (図173)	101
	竖穴住居 370 (図170・174～176)	101
b 掘立柱建物	103
	掘立柱建物 320 (図177)	103
	掘立柱建物 470 (図178)	104
	掘立柱建物 570 (図179・181)	104
	掘立柱建物 720 (図180)	105
	掘立柱建物 770 (図182・183・185)	105
c 溝	108
	溝 52 (図186)	108
	溝 785 (図186・187)	108
	溝 795 (図186)	109
	溝 940 (図186)	109
d 井戸	110
	井戸 53 (図184・190～197)	110
5 中世の遺構と遺物	120
a 溝	120
	溝 245 (図198・199)	120
	溝 413 (図198・200)	121
b 木棺墓	121
	木棺墓 555 (図201～205)	122
c 小穴出土遺物 (図203・206)	124
6 その他の遺物 (図207)	124
IVまとめ	126
1 各遺構の時期別変遷とその問題点 (図208～210)	126
2 瓦について	129

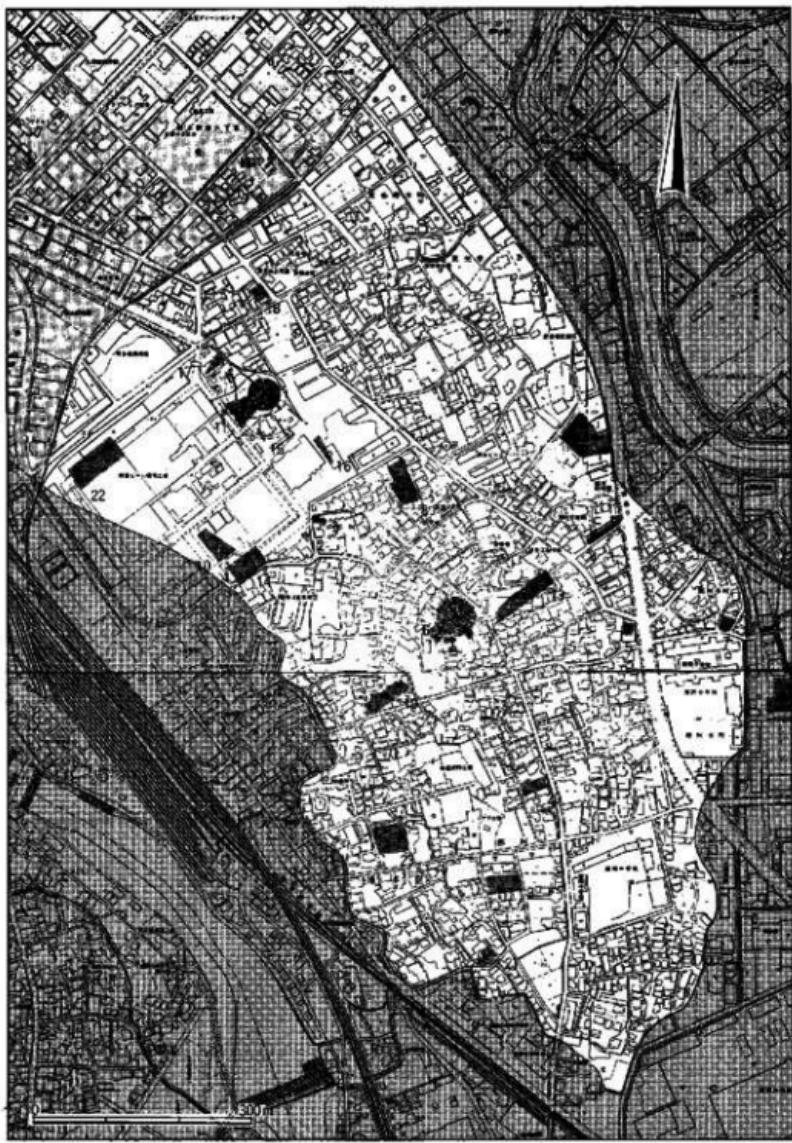


図3 那珂道路群全体図 (1:10,000)

番号は調査地点を示す

I. 那珂遺跡群とその調査

I-1 那珂遺跡の位置

那珂川と御笠川の中流域に、その2河川に挟まれて春日丘陵からのびる中位或いは低位の段丘が形成されている。それは著しく開析され、南東から北西方向に向かって断続的に配列した高まりとなって残り、それぞれの高まりが遺跡であることが知られている。また、その間の低地部には水田をはじめとする遺構の埋没していることも知られている。これら断続する段丘の北端部に立地する。つまり一連の遺跡群の北端を占めるものとして、那珂および比恵遺跡群が位置している。これより北には、博多湾奥に発達した砂丘上に立地する遺跡が、後背湿地を隔てて対面している。那珂・比恵両遺跡群は、地形のうえでは明確に分離できるものでなく、ともに開析が著しく、台地と低湿地とが入り組んで起伏のある地形を形作っている。台地上の平坦面は、原面の傾斜を反映したものか、那珂遺跡群で標高10m、比恵遺跡群では8~6mの値をとることが、地形図からみてとれる。



図 4 那珂遺跡群の位置

I-2 那珂遺跡群の発掘調査

那珂遺跡群における発掘調査は、1989年12月末の時点では23次にわたっている。以下に調査一覧を示す。ここに掲げるうち、1・6次および、15次の各調査は、前者が那珂八幡古墳の、後者が剣塚古墳のそれぞれ発掘調査である。

那珂遺跡群 調査一覧

次数	調査番号	所在地	調査面積m ²	調査年	調査原因	調査者	報告書ほか
1	7109	博多区那珂一丁目44番	24	1971	学術調査	那珂八幡古墳調査会	「福岡市那珂八幡古墳」「九州考古学」33号、1978
2	7414	那珂一丁目237-1 外	231	1974	仓库建設		「福岡平野の歴史」市歴史資料編図2集
3	7705	那珂一丁目680番	2	1977	住宅建設	福岡市教育委員会	
4	8036	那珂一丁目277番 外	300	1980	道路建設	福岡市教育委員会	「那珂沼口遺跡」市報告82集、1982
5	8328	那珂一丁目377-2,3	100	1983	ビル建設	福岡市教育委員会	
6	8505	那珂一丁目44番	534	1985	重要道路確認緊急調査	福岡市教育委員会	「那珂八幡古墳」市報告141集、1986
7	8530	那珂三丁目8番	495	1985	公民館建設	福岡市教育委員会	「博多区那珂遺跡群第7次」市報告162集、1987
8	8609	那珂一丁目601 外	1,350	1986	共同住宅建設	福岡市教育委員会	「那珂遺跡」市報告153集
9	8703	竹下五丁目463	1,030	1987	共同住宅建設	福岡市教育委員会	
10	8727	竹下三丁目1-1	862	1987	倉庫建設	福岡市教育委員会	
11	8732	竹下二丁目1-1	5	1987	倉庫建設	福岡市教育委員会	
12	8733	竹下三丁目1-1	20	1987	倉庫建設	福岡市教育委員会	
13	8736	那珂二丁目	1,536	1987	道路建設	福岡市教育委員会	今回報告
14	8832	竹下三丁目1-1	1,200	1988	倉庫建設	福岡市教育委員会	
15		竹下三丁目1-1		1988	倉庫建設	福岡市教育委員会	
16	8849	竹下二丁目1-1	240	1989	工場建設	福岡市教育委員会	
17	8850	竹下二丁目1-1	177	1989	変電所建設	福岡市教育委員会	
18	8855	東光寺一丁目23-5	463	1989	ビル建設	福岡市教育委員会	
19	8848	竹下五丁目	1,600	1989	道路建設	福岡市教育委員会	
20	8906	那珂二丁目257 外	1,406	1989	共同住宅建設	福岡市教育委員会	
21	8923	竹下三丁目1-1	1,988	1989	工場建設	福岡市教育委員会	
22	8935	竹下五丁目420	776	1989	共同住宅建設	福岡市教育委員会	
23	8936	竹下五丁目270-1 外	1,428	1989	保育所建設	福岡市教育委員会	

※市報告：福岡市埋蔵文化財調査報告書

II. 那珂第13次地点遺跡の発掘調査

II-1 調査の経過

II-1-a 都市計画道路竹下駅前線に係る発掘調査

本次調査は、都市計画道路竹下駅前線の工事が計画されたことにより、その工事予定地について実施したものである。これは、那珂遺跡群推定範囲のはば中央部を、北東から南西の方向で直線状に横断する幅20mの道路である。このうち、遺跡群の東辺部にあたる地点は、第4次調査（那珂沿口遺跡）として歩道部分の発掘調査を行っている。さらに1989年になって、遺跡群西辺部にあたる地点を、第19次調査として発掘調査を行うこととなった。

今回報告をおこなう地点は、博多区那珂二丁目地内に位置し、幅20m、全長100m程の範囲であった。那珂第4次地点遺跡から50m南西に離れて1mほど高い位置にある。

II-1-b 試掘調査

工事担当である土木局街路課との協議を経て、1987年1月1日に対象地内の試掘調査をおこなった。試掘調査は、埋蔵文化財課事前審査班が担当した。試掘溝は、障害物等を避けた計画道路中心線に沿う方向に断続的に設定し、幅1mを機力により掘削した。

結果として、以下のように判断された。

工事予定地東端部の段落ちは、過去に地下げされており、表土下はすぐに、八女粘土となっている。そのことと、由に隣接する宅地での試掘結果を併せ考えて、埋蔵文化財は遺存しないものとして調査区から除外する。

西端部の段落ち部は、西隣する那珂八幡古墳の周濠との関係を考えて調査区に含める。ただし、この部分は調査の結果、後世の地下げにより、形成されたものと判断された。

上記以外の区域には、かなりの密度をもって造構が分布することが、予想される。

II - 1 - c 発掘調査の組織

試掘調査の結果を得て協議を進め、記録保存のための発掘調査を埋蔵文化財課埋蔵文化財第一係でおこなうこととなった。

II - 1 - d 発掘調査の実施

発掘調査については、表土剥ぎを1987年11月4日に開始した。廃土については、工事出来高との関係で搬出が可能となったため、以後の調査にとって好都合なものとなった。調査にあたっては、現地が隣接する住宅、工場への通路として使用されており、その部分の確保が必要であったことおよび、除去が間に合わなかった障害物のあったことで、西半部分を最初に着手し(Ⅰ区と仮称)、つづいて東半部の南部分(Ⅱ区)、最後に障害物の除去が終わった同北部分(Ⅲ区)の順に表土剥ぎ、調査をすすめた。調査区内は、遺構と遺構検出面の養生のため極力シートで覆うようにした。このため、調査区内の通行に配慮が必要となったが、雨水等の処理は容易になった。また、周囲の交通の安全を考え、調査区の全周をフェンスで囲うこととした。

調査を終了し、埋め戻しと整地、周囲の構工事を終わり、現地から撤収したのは1988年3月30日であった。

II - 2 発掘調査の方法

II - 2 - a 遺構の検出

先述したとおり、調査区を3分割して調査の作業を進めた。表土剥ぎは機力によって地山の鳥栖ローム面まで掘り下げた。遺構面が重複して遺存する可能性を考えたが、確認できた部分はない。遺構はすべて地山面で検出した。

遺構の覆土は、腐植、或いは有機物の混じった部分と、掘りあげた地山ロームブロックの部分とに大きく分けられる。今回報告では、表示する図の大きさの制限もあり、上層についてはこの区別のみを示すこととした。覆土については、色調、硬さなどが、大まかな時間的な変化を示すものとみえるが、表示することはできなかった。

II - 2 - b 記録のための基準について

実測の基準は以下のように設定した。

高さの基準点は、道路工事のベンチマークを利用した。

平面実測の基準については、路線の延長での発掘調査が予想されたので、調査地点間の位置関係を精確に記録するために、工事にのために設定された座標系を利用した。各調査地点内だけに終わらず、調査地点間あるいはもっと広い範囲における相互の正確な位置関係を記録するための基準を設定することが必要であろうが、今回はそこまでは到らなかった。ともあれ、利用する可能性のある範囲は、座標上の800m四方の範囲内であり、路線の幅も限定されていることから、座標原点から始まる100m単位の大格子を考え、このうちの計画路線のかかる格子にアルファベットの記号A～Mを付した。さらに各格子をX軸方向、Y軸方向の各10mを単位として分割した小格子を設定し、それにY軸方向の順番号を付した。結果として、大格子ごとに1～100の小格子にわかれる。以上の区分を用いて調査区内のおおよその位置を表示するようにした。

また、調査区が方位に対して斜交しているので、記述上使用する方位は、実際のそれとはずれたものとなっている。記述上は、調査区の長軸方向を東西方向とし、左右の壁方向を南北という。真北は、座標北から、N 0°20' E の方向にある。

II - 2 - c 記録について

遺構の記録については、20分の1の縮尺で全体遺構図を作成した。測高の基準高さは、原則として標高10.00mである。また、主要な遺構については個別の遺構実測図を作成した。縮尺は20分の1または、10分の1である。

遺構については、本次調査地点内の通し番号を付し、遺構台帳に順次記録した。遺構を構成する部分についても必要に応じて遺構番号を付した。記録時、遺構を現す記号Mを用いているが、報告の記述では原則として使用せず、番号のみを利用する。

遺物についても、本次調査地点内の通し番号を付し、遺物台帳に順次記録した。遺物番号は、取り上げ時の判断、あるいは作業上の単位に従って付したので、個体資料とするものにも混じり込みがあった。また、接合により複数の遺物番号を持つことになる資料、分類の結果複数に分離される資料等がある。これらも順次台帳に記入し、遺物番号を与えた。今回報告分では、遺物番号3001以上の資料がそれに該当する。記録時、遺物をあらわす記号Rを用いたが、原則として報告の記述では使用せず、番号のみを利用する。



図5 II区（東から）

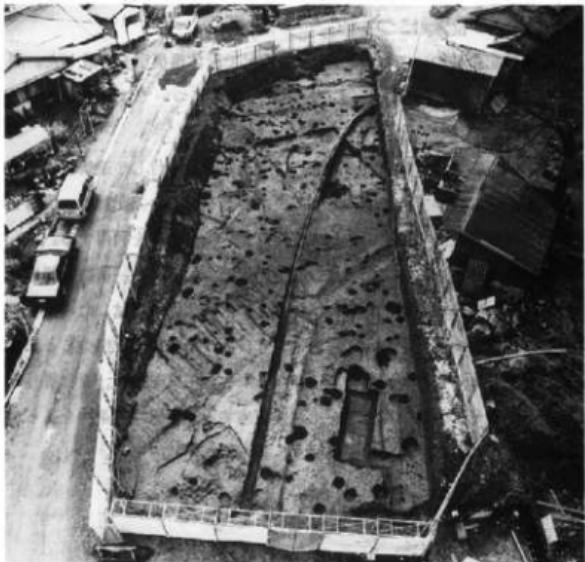


図6 III区（東から）

III 発掘調査の成果

III-1 那珂第13次地点遺跡の遺構と遺物

今回発掘調査によって出土した遺物量は、27点入りのコンテナにして50箱を数える。遺構については東西端の段落ち部を除いて全体に分布していた。

那珂第13次地点遺跡における人間活動はナイフ形石器の出土により先土器時代に始まることが分かる。先土器時代については、本次地点中程に調査区を設定し、地山ローム層を掘り下げたが、遺物の出土はなかった。諸岡B遺跡等では、表上である腐植土下の粘土化したローム部分がその包含層となっており、ここではそれが認められなかったことから、その包含層は後世に削除されるかまたは流失してしまったと考えられる。以後、弥生時代中期に至るまでの時期の遺構、遺物の出土は無かった。弥生時代中期以降の時期については、遺構、遺物の出土があった。但し連続した各時期について、みられるのではなく、断続したいくつかの時期のまとまりがあるようである。

以下、そのまとまりに沿って、調査の成果を述べてみたい。

III-2 弥生時代の遺構と遺物

明らかに弥生時代と考えられる遺構は、竪穴住居、袋状竪穴、井戸があり、掘立柱建物の一部のものも、この時期に含めることができる。ただし、更に細分した時期を考えることができる前3者に対し、掘立柱建物は、それ以上の細分をなしえなかった。そういう理由で、弥生時代の遺構、遺物については一括して述べることにする。

今回報告の時点で竪穴住居23棟、袋状竪穴1基、井戸4基、掘立柱建物21棟を確認している。

弥生時代の遺物は、遺物の出土があった遺構の殆どから多少なりとも出土している。多くは、弥生土器の繰片であり、井戸、竪穴住居内の小穴などから、完存する、あるいは全体を復元できる資料が多く出土した。

III-2-a 竪穴住居

竪穴住居は、円形または長方形の弥生時代中期とできるものと、長方形で後期に属すると考えられるものとがある。以下、中期としたもの、次いで後期としたものの順に各遺構別に報告する。それ以上の細別については別記する。

竪穴住居 121 (図7・10)

I-13区に位置する。竪穴住居51と重複して古い。平面形はいびつな方形を呈す。覆土はローム粒を顯著に含む暗赤褐色土で、東西の壁際ではレンズ状の堆積がみられる。壁の高さは床面から0.2mを測る。壁際には小溝が断続する。中央より東に寄った床面に炉426がある。長さ0.8m、幅0.6mで、断面は浅い皿状を呈し、深さ0.2mを測る。底面に沿って灰層かと思われる黒褐色土があり、焼土粒を含む。東壁に接して土壤429がある。底面は二段になっており、土層断面からして、2つの小穴が重複した結果である可能性もある。竪穴住居床面からの深さ0.6mを測る。



図7 竪穴住居121 実測図 (1:80)

遺物は、竪穴住居覆土中から散漫に出土した。

柱穴と考えられる遺構は、確認できなかった。

竪穴住居 121 出土遺物 (図8)

出土した遺物は多量であるが、弥生式土器の胸部片ばかりで固化できるものは少ない。この中には丹塗り土器の破片も多量に混じっている。

3151と3152は、いずれも壺形上器の口縁部片である。3151は逆L字形を呈する。3152は鶴先状の口縁をもつ。いずれも小片である。3153は、丹塗り磨研の壺形土器の口縁部片である。小型壺で、両面に丹彩が施されている。小破片である。3154は壺形土器の底部で、約1/3ほどの破片である。外間に縦方向の刷毛目を残している。径7.8cmを測る。

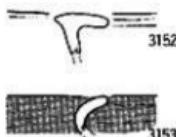


図8 竪穴住居121出土遺物
実測図 (1:4)

これにより、住居の時期は弥生時代中期末である。

竪穴住居 141

(図9・11・12)

I-13区に位置する。竪穴住居152と重複する。一部が調査区外にあるが、現況からすると平面形が長方形状を呈する竪穴住居である。長さ4.6m以上、幅は現状で4.2mを測る。覆土は、上部が暗赤褐色土、床面近くでは黒褐色の粘質土である。壁の高さは0.1mを測る。壁溝は0.1m以上の幅をもち、その隅部と長辺との対向する位置に小穴がある。

柱痕跡その他を確認す

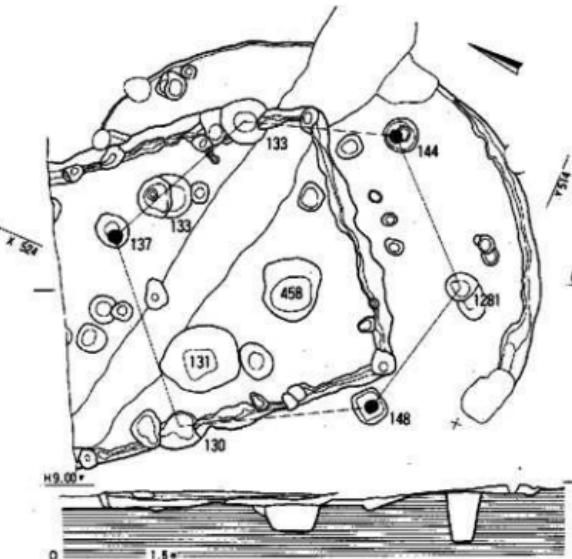


図9 竪穴住居141・152 実測図 (1:80)

ることは出来なかった。いずれも、平面形は不整である。土壤131、小穴133が短軸上の対向する位置にある。土壤131は平面形が橢円形状を呈し、長さ1.1m、幅0.9mを測る。深さは0.5mで、覆土中に焼土粒、炭化物を含んでいる。覆土中から、遺物が多数出土した。竪穴住居には貼床がされており、それを除去した堀型の底面は小さな凹凸が著しい。遺物は竪穴住居覆土中から散漫に出土した。

竪穴住居 152 (図9・12)

竪穴住居152は、円形の竪穴竪穴住居である。炉458を中心とする半径6.9mの円に壁の位置が一致する。西半部は地山面の傾斜、擾乱等で壁を確認することはできなかった。覆土はぶい赤褐色で、壁は0.1m程の高さ残る部分がある。南半部で幅0.2mほどの壁溝を検出した。炉458は位置関係からして、この住居のものであるとした。平面形は径0.9mほどの不整な円形状を呈し、断面逆台形状で深さ0.3mを測る。覆土中ほどに灰あるいは木炭の層を含んでいる。遺物は覆土中から散漫に出土した。竪穴住居141と同152の前後関係は、152の貼床と考えられるロームブロックが、141の確認面に残っていたこと、152の柱穴が141と重複して後のものであることから、152が新しいと考えられる。

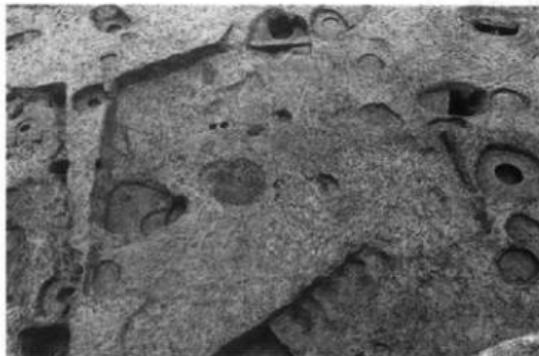


図 10 壁穴住居121
(西から)

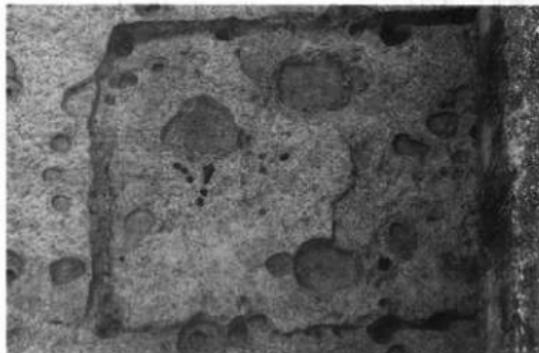


図 11 壁穴住居141
(東から)



図 12 壁穴住居141
-152 摺型
(南から)

竪穴住居 240 (図13-17)

1-15区に位置する円形の竪穴住居である。竪穴住居215、480、490、510と重複しそれらのいずれよりも古い。南半部は調査区外に位置する。覆土は上部が黒褐色土、下部が暗茶褐色土である。壁の高さは0.3mを測る。床面には、壁に沿わない2条の溝が検出された。予想される規模は壁が、径10.4m、同様にして外側の周溝が10.0m、内側のそれが7.7mのそれぞれ円周上に位置している。またそれぞれの想定される中心点は、1mほどの範囲の中に含まれる。そのうち特に外壁際と、最外側の溝のそれとはごく近くの位置にある。柱穴として可能性があるのは、472、478、483である。いずれも底面が標高7.8mを前後する位置にあり、住居平面上の中心線に対して内外方向に重複しているという共通性をもつ。ただ、柱間の距離が小さすぎたり、対応する位置に柱穴がないといった、疑問点が残る。

遺物は覆土中から散漫に出土したばかりに、床面近くの覆土中から、土器の大破片が数点出土している。

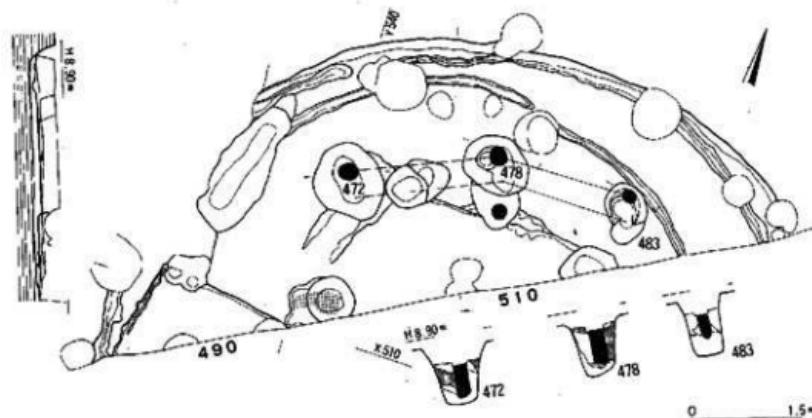


図 13 竪穴住居240・490・510実測図 (1:80)

竪穴住居240 出土遺物 (図14-15・82)

本造構から出土した遺物は、丹塗り土器の壺形土器や高壺土器の他、壺形土器、不明鉄製品がある。

3157は鋸先状口縁をもつ壺形土器の頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部外縁には刻み目、口唇と頸部には暗文が施されている。丹塗り磨研である。頸部の暗文は幅1mmほどの細線が4~7本で一単位をなす。暗文間の間隔は1cm前後である。口唇の暗文は25本以上が一単位で、8箇所に施文されたと考えられる。肩部に一条の断面三角形の複線凸帯がめぐらされ

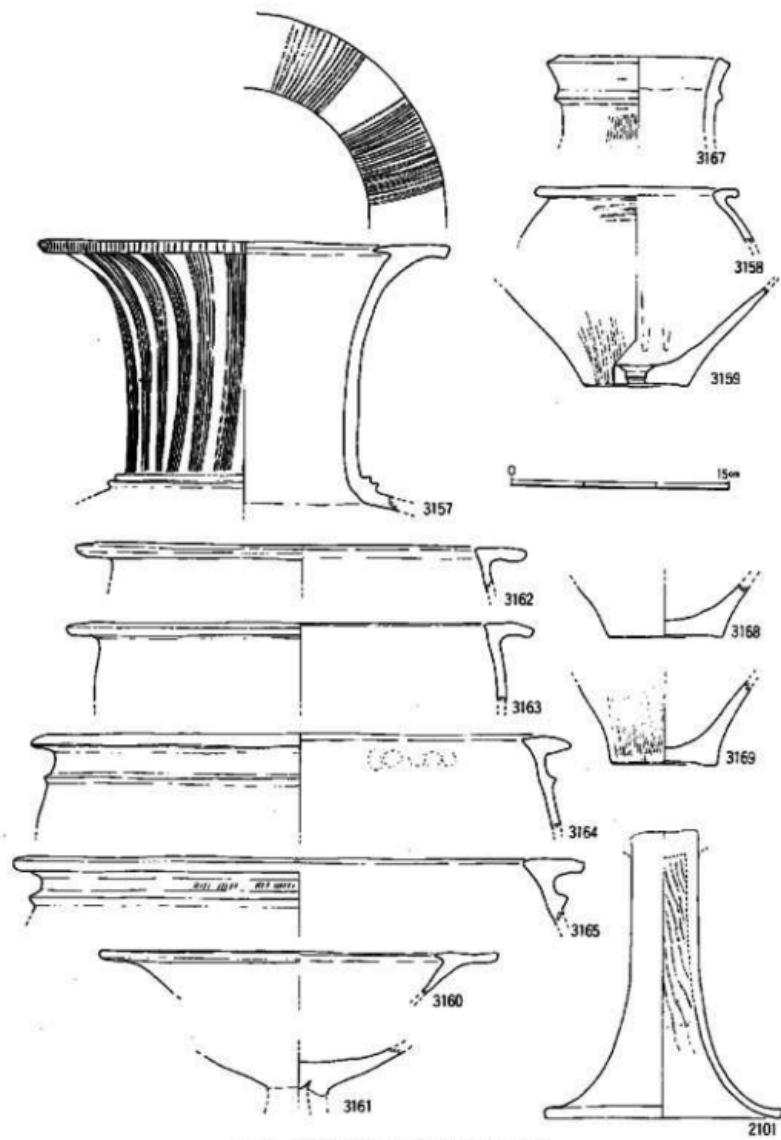


図 14 烈穴住居240出土遺物実測図 (1:4)

る。約1/2残存している。3158は丹塗り磨研の無類の小型壺形土器である。口縁部分の小片である。3159と3168は同じく丹塗り磨研の壺形土器の底部である。底部を除いた外面に丹彩を施す。底はわずかに上げ底である。3159の底中央に焼成後の穿孔がある。3158は約1/2、3168は約1/4の破片である。3160、3161、2101は丹塗りの高坏である。3160は全面に丹彩を施す。約1/4の破片である。3161は高坏の坏部の底の部分のみ残る。脚部へはソケットを差し込み、接合する。2101は脚部のみ完存する。3162~3165は壺形土器の口縁部片である。3162と3163は口縁下に三角凸帯をもたない中型の製品で、いずれも全周の1/4ほどの破片である。3164と3165は逆L字形の口縁下に断面三角形の凸帯を貼付した大型の壺形土器である。1/6ほどの破片である。3169は壺形土器の底部である。3167は丹塗りの長頸の壺形土器の口縁と考えられる。三角凸帯を1条巡らす。遠賀川地域の系統をひく土器であろう。

600は二等辺三角形の鉄器であるが、錆による膨らみで旧状は不明である。現状で長さ5.7cm、幅2.9cm、厚さ1.2cmを測る。

本住居出土の遺物には、弥生時代終末の高坏、壺形土器や古墳時代の須恵器の壺形土器の破片なども含まれている。しかし最も多量に出土したのは丹塗り土器を中心とした中期後葉の土器である。これは、本遺構が多く他の時代の遺構に破壊されているためである。住居の形態や床面上で潰れた状態で出土した3157や2101などの丹塗り土器の型式から弥生時代中期後葉に位置づけられよう



図 15 壘穴住居240出土遺物

壘穴住居 280 (図16-18~20)

I-36区に位置する。掘立柱建物750と重複して、それよりも古い。平面形は隅丸方形の住居で、東西方向に3.2m、南北方向に3.3mを測る。覆土は黒褐色の粘質土で、下部にはローム粒を多量に含む。壁溝から壁に沿い立ち上がる極暗赤褐色の粘質土が観察され、あるいは壁などの施設の痕跡かとも考えられるが、それ以上の観察はできなかった。住居床面の壁際には南辺の一部を除いて壁溝が巡っている。本住居に属するとみなせる柱穴は、確認できていない。床は全体がロームを用いた貼床となっている。貼床を除去した面で南西部分に土壤615を検出した。不整な梢円形の平面形を示し、長さ1.5m、幅1.2mで断面形は逆台形状を呈す。掘型底面からの深さ0.8mを測る。その覆土は暗褐色、黒褐色土、下部は褐色ローム、黑色土、暗灰色土の薄層が互層をなしている。全体にごく柔らかい。また、土壤壁から四方に木の根状の小横穴が延びていることから、あるいは、樹木痕跡かとも考えられるが、貼床下にあったこと、他に同様なものが検出されなかったことから、人為的に作り付けられたものの可能性を残している。

遺物は住居覆土中から散漫に出土した。また、土壤615覆土中からも出土している。

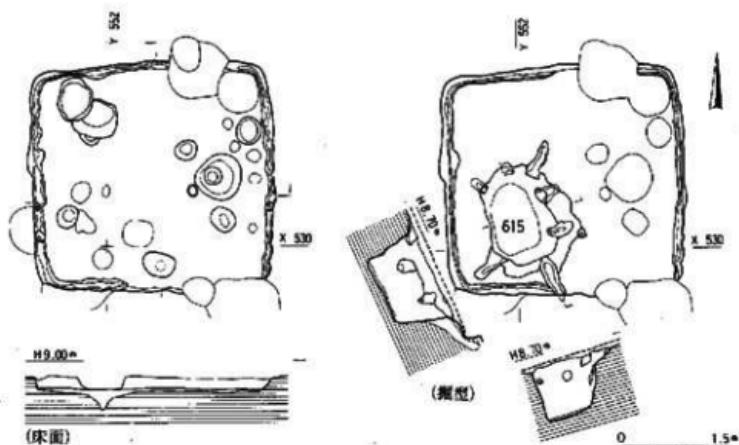


図 16 肄穴住居280実測図 (1:80)

肆穴住居280 出土遺物 (图20-82)

本遺構から出土した遺物には、各種の弥生土器、砥石がある。

3170～3172は逆L字形を呈する壺形土器の口縁部である。いずれも小片である。3171は口縁上部がやや丸味を帯びる。外面縦方向の刷毛目を施す。3173は壺形土器の底部である。約1/4の破片である。3176は壺形土器の底部であろう。底部のみ残存する。黒斑が認められる。外面は縦方向の刷毛目による調整。3174・3175は丹波り磨研土器である。3174は高環形土器の口縁部の小片で、先端を呈する。3175は小型の壺形土器の底部で、径2.7cmの小さな平坦な底である。外面は縦方向の研磨で、内面は丁寧な撫による仕上げである。工具の端部と思われる細い線状の压痕が同心円状に残る。3177は同形の口縁部の破片である。

792は白色の砂岩製の砥石である。長軸方向の側面と正面に使用的痕跡が認められる。特に正面はその中央を中心として大きく窪んでおり、顕著に使用されたと考えられる。長さ19.3cm、幅9.2cm、厚さ4.1cmを測る。

本遺構の遺物の中心をなすものは、弥生中期の土器であるが、若干の須恵器、土師器も含んでいる。その主体をなす土器よりみて、本遺構の時期は弥生時代中期後葉～末が考えられる。そのなかでも後葉の可能性が高い。

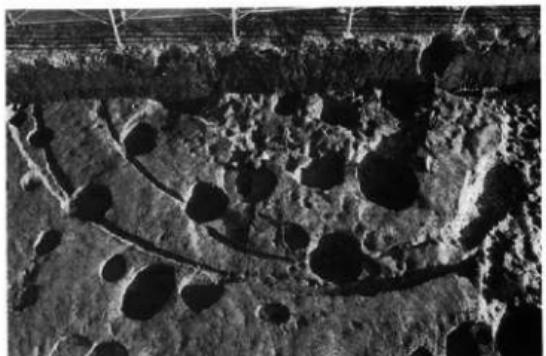


図 17 壁穴住居240
(北から)

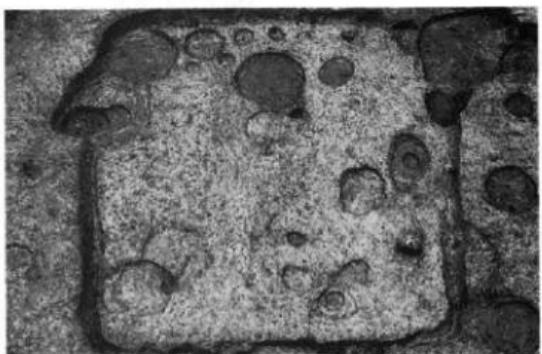


図 18 壁穴住居280
(西から)

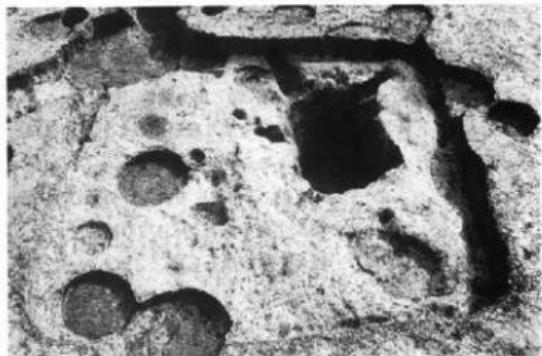


図 19 壁穴住居280
掘型(北から)

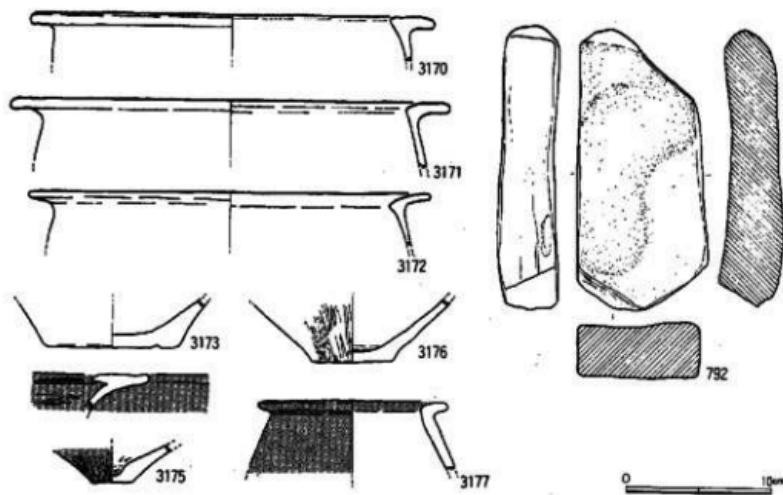


図 20 壁穴住居280出土遺物実測図 (1:4)

壁穴住居 290 (図21-25)

1-26区に位置する。平面形が兩丸の長方形状を呈する壁穴住居である。長さ2.5m、幅2.2mを測る。覆土は黒褐色粘質土中に暗赤褐色粘質土が、斜めのレンズ状に挟まれている。壁の高さは0.1mを測る。覆土の堆積は住居東辺中央の柱穴405に向かって落ち込んで行くような状態を示す。これを本住居の柱穴としてみても他に対応する柱穴は見当たらない。

遺物は覆土中から散漫に出土した。

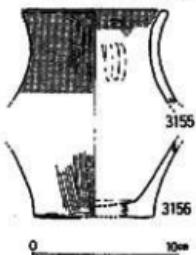


図 22 壁穴住居290出土遺物
実測図 (1:4)

壁穴住居290 出土遺物 (図22)

3155は丹塗り磨研の壺形土器の口縁部である。平坦なやや外反する口縁部で、約1/3の破片である。外面は継方向の器面調整を施す。3156は壺形土器の底部の約1/2の破片である。外面には継方向の刷毛目が残る。本遺構からは、これらの土器以外に二重口縁の壺形土器の小片も含まれていた。しかし、その量的な比較から、本遺構の年代は弥生時代中期末と考えられる。

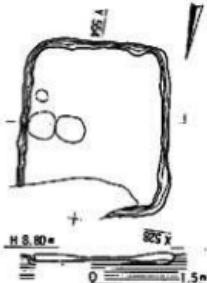


図 21 壁穴住居290実測図
(1:80)

豊穴住居 300 (図23-26)

I-26区に位置して、溝533、550、掘立柱建物720より古い。平面形が不整な円形状を呈す豊穴住居である。炉703を中心にして、径4.8mを測る。覆土は暗茶褐色土で、壁際の下部は黒褐色を呈す。壁は高さ0.2mを測る。柱穴は、ほぼ正方形に配列する4基である。いずれも平面形が不整な梢円形状を呈し、長径が0.6~0.7mを測る。その底面は標高7.5~7.8m、床面からの深さ0.6~0.9mの位置にある。ほぼ中央の床面に地床炉703がある。不整な平面形が梢円形状で長さ0.7m、幅0.6mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ0.2m程で、炭化物が多く含まれるが、掘型壁面は焼けてはいない。両側に不整な形状で、深さ0.1~0.2mの小穴がある。その一方には柱痕跡らしいものが観察される。柱穴、炉の位置とは関係を持たず、北側に寄って断続して長方形状につながる小溝がある。その住居壁側の隅には平面形が隅丸方形状を呈する土構がある。その断面形は深い皿状を呈し、住居床面からの深さ0.2mを測る。覆土はロームブロックであり、人為的に埋められたものとみえる。遺物は覆土中から散漫に出上した。

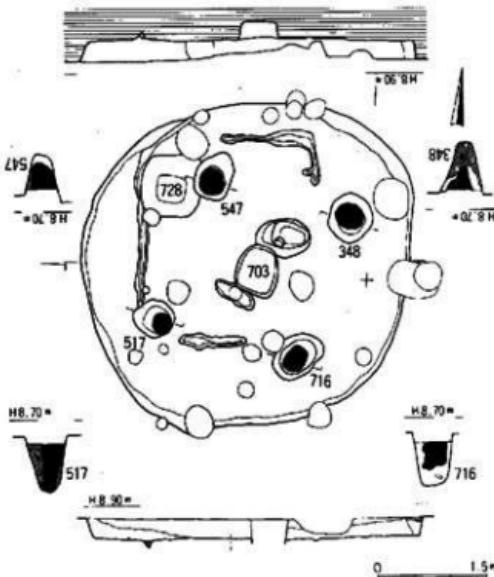


図 23 豊穴住居300実測図 (1:80)

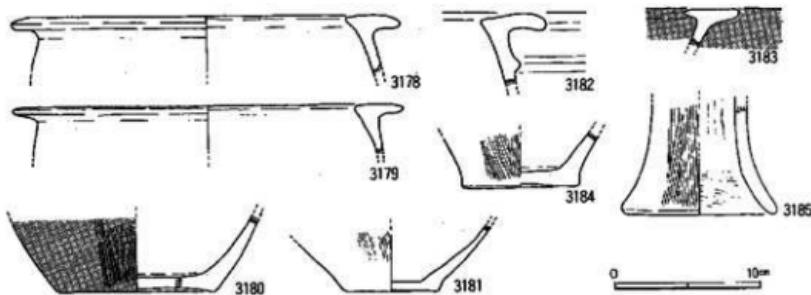


図 24 豊穴住居300出土遺物実測図 (1:4)

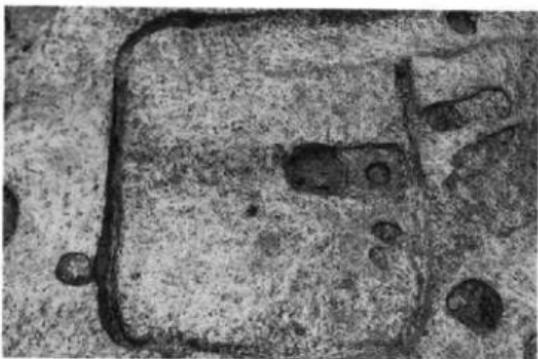


図 25 整穴住居290
(南から)



図 26 整穴住居300
(南から)



図 27 整穴住居460
内柱穴655
(東から)



図 28 壁穴住居460
(北から)



図 29 壁穴住居460掘型
(南から)

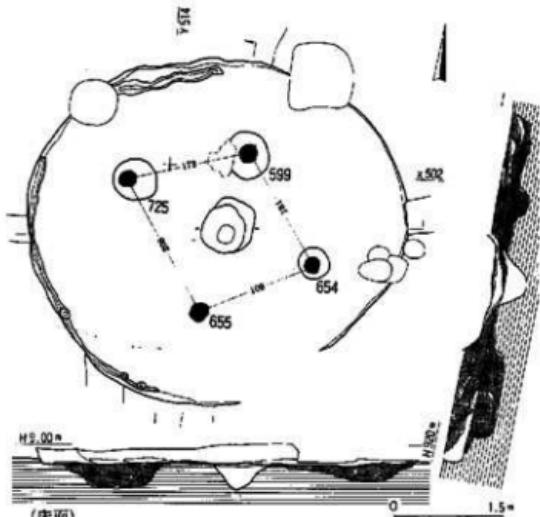


図 30 壁穴住居460内
炉495(東から)

竪穴住居300 出土遺物 (図24)

3178、3179、3182は逆し字口縁をもつ壺形土器の細片である。3182には1条の三角凸帯が貼付される。3183は高壺の口縁部の小片である。3180、3184は壺形土器、3181は壺形土器の底部3180と3184は約1/2の破片で、3181は底部のみ残る。いずれも外面に刷毛目による器面の調整痕を留めている。3185は筒形の器台形土器の裾部の破片で、全体の約1/4を残す。外面は縱方向の、内面裾部は横方向の刷毛目調整である。

弥生時代中期後葉に属する。



竪穴住居 460 (図27~31)

I-2区に位置して、溝412、造構422と重複してそのいすれより古い。平面形が円形状を呈する竪穴住居である。炉495を中心にして、径5.4mを測る。覆土は暗赤褐色の粘質土で、ロームブロック・粒を含んだ部分が住居中央に向かった傾斜をもってレンズ状に挿まれている。炉の部分ではその落ち込みに沿って堆積している。床はロームを使った貼床である。壁の高さは0.2mを測り、一部の壁は内側に向かい迫り出している。炉は床面の中心に位置する。平面形は不整な橢円形状で、長さ0.8m、幅0.7mを測る。断面形は、鉢状を呈し、底面の中央がさらに一段盛む。深さ

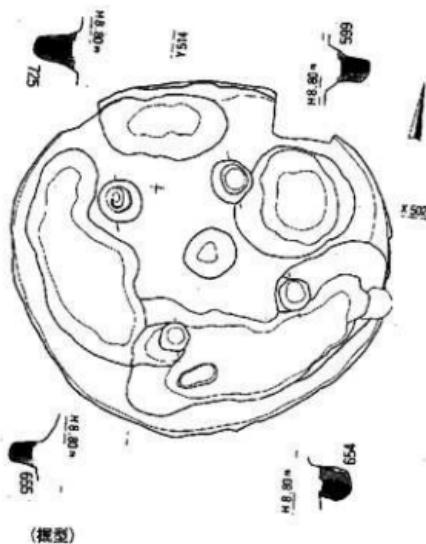


図 31 竪穴住居460実測図 (1:80)

は0.3mを測る。覆土は上半部には住居の覆土が落ち込んでおり、その下に焼土と灰のような

にぶい赤褐色をした粘質土が皿状にみられる。その下は硬く結まった細粒状のロームブロックが詰まっている。焼土の面を炉の使用時を示すものと考えるべきであろうか。柱穴は炉の周囲に4本配されているが、その配列はいびつな四辺形を呈す。柱穴855は、床面では柱痕跡のみが検出されたが、これと土壙断面の観察からして、他の柱穴も貼床のロームに覆われていたことが考えられる。柱穴は、掘型まで掘り上げた段階で調査した。平面形は重な円形状で、径0.4~0.6mを測る。その底面は床面からの深さ0.6~0.8mを測る。いずれも柱痕跡が明瞭で、その断面からの観察からすれば、柱穴599の柱痕跡が直立するほかは、平面上で左巻き方向にねじれているように見える。

貼床下の掘型は柱穴と住居壁との間を深く掘り窪めている。それは断続する4つの不整形の土壤状となっている。これらはいずれもロームブロックで埋められている。調査中あるいは地山の変化を掘り下げている可能性を考えたが、一部に黒褐色軟質の灰層かと思われる薄層を含むこと、僅かではあるが土器の細片を出土したことから、掘型がここまでいたるものと判断した。掘型の最も深い部分は床面から0.4m下の位置にある。

遺物は、覆土中から弥生土器の小破片が出土した。

豊穴住居460 出土遺物 (図32-33)

本遺構からは、壺形土器、壺形土器などの弥生式土器と用途不明の鉄製品が出土した。

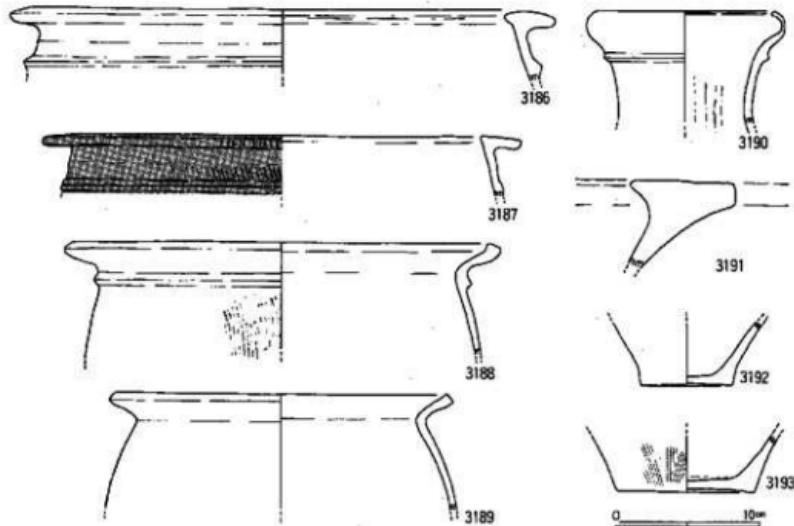


図 32 豊穴住居460出土遺物実測図 (1:4)

3186は大型の壺形土器の口縁部片である。全周の約1/4の破片。口縁部下4cmのところに断面三角形の凸帯を1条貼付している。3187は丹塗りの壺形土器の小片である。平坦な端部に刻み目を施す。口縁部下約4cmのところに低い複線の凸帯を貼付している。3188は跳ね上げ口縁をもつ壺形土器で、口縁部から胴部にかけての約1/3の破片である。肥厚した口縁の端部を内側につまみ上げるのが特徴である。口縁外面は僅かに湾曲し、その直下にシャープな断面三角形の凸帯を1条貼付している。胴部外面は、粗い刷毛目調整である。3189は3188と同じく口縁の内端をつまみ上げた壺形土器の約1/2の破片である。口縁外面はわずかに湾曲しながら外反する。口縁部端部および頸部の屈曲部の処理はシャープに仕上げている。色調が暗黒色で、他とは異なる。これらの土器は遠賀川以東の系統を引く壺形土器であろう。3190は袋状の口縁部をもつ壺形土器の小片である。口縁下3cmのところに断面三角形の凸帯を貼付している。色調は橙色を呈し、胎土が軟質であるので丹塗り土器の可能性がある。3192は大型の壺形土器の口縁部の破片である。口径は40cm以上あると思われる。砂粒を多量に含み、重厚である。3192と3193は壺形土器の底部である。やや上げ底味である。3192は約1/2の、3193は2/3の破片である。932は方形の板状の鉄製品である。錆による膨らみのため旧状は不明である。現状で長さ3.1cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmを測る。

これにより住居の時期は弥生時代中期末と考えられる。

竪穴住居 790 (図34・38)

I-38区に位置し、平面形が隅丸の長方形状を呈する竪穴住居である。小穴の密集して分布する部分であり、それらとの重複がある。前後関係については、確認面で明確に捉えることができたものは少ない。覆土は黒褐色の粘質土である。南壁側では、壁側から住居床面中央に向かって傾斜する堆積がみてとれる。壁の高さ0.1mを測る。柱穴は明らかでない。

遺物としては、弥生土器の大破片を含む土器類が床面近くの覆土中から出土している。

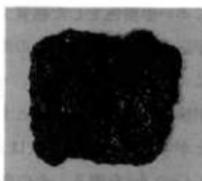


図 33 竪穴住居460
出土遺物

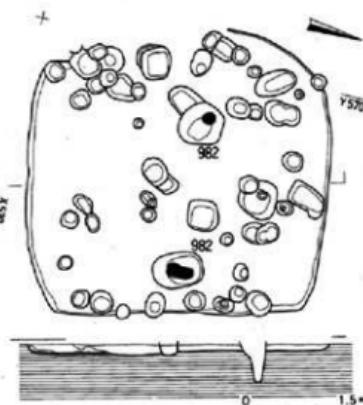


図 34 竪穴住居790実測図 (1:80)

堅穴住居790 出土遺物 (図35)

本遺構からは、丹塗り土器を含む各種の弥生土器が出土した。

3194は逆L字形の口縁部をもつ壺形土器の約1/6の破片である。平坦な口縁の下3cmのところにおおぶりの三角凸帯を貼付している。外面は刷毛目調整。3195は同じく壺形土器の1/2ほどの破片である。内帶は口縁下4.5cmのところにある。3196と3197は逆L字形の口縁部をもつ小型の壺形土器である。3197は3196に比べて口縁の平坦部が短く、厚い。どちらも小破片である。3198は口部の肩曲が明瞭な棱線を形成せずに屈曲する壺形土器である。破片。外面に縱方向の粗い刷毛目調整を施す。3199は鋸先状の口縁部をもつ壺形土器である。橙色を呈する小破片である。3200は底半の壺形土器の底部である。外面に縱方向の刷毛目を残す。約1/4の破片。3201は壺形土器の底部である。底はわずかに上げ底である。約1/4の破片。3202は丹塗りの高坏の脚部据の破片である。外面に丹彩を施し、内面は丁寧な撫で仕上げである。端部はやや肥厚し、撫でによってわずかに窪む。3203は器台の脚部の破片であろう。内面には指による押さえや撫でなどの痕跡がある。

弥生時代中期後葉に属する。

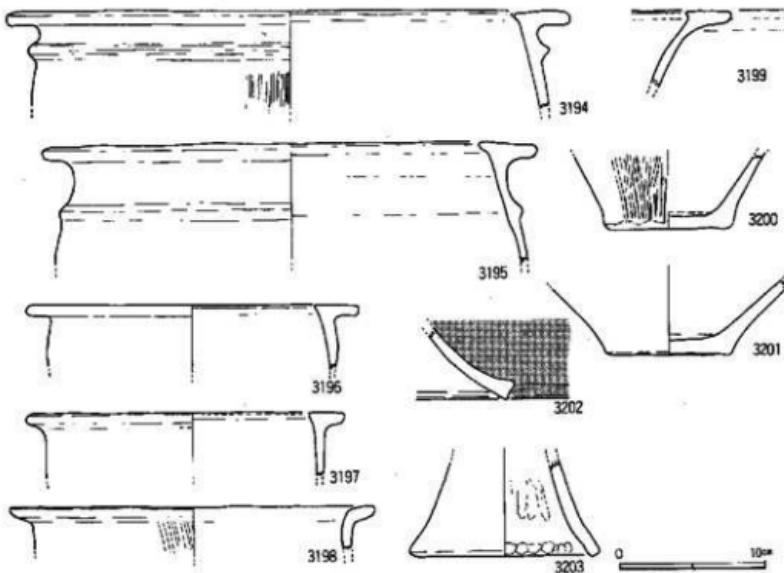
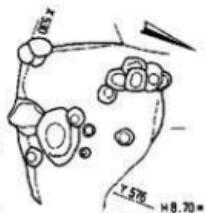


図 35 堅穴住居790出土遺物実測図 (1:4)

豊穴住居 860 (図36)

I-28区に位置する。豊穴住居790と重複するが、前後関係は明らかにできなかった。東への形斜面にあたるので、造構東半部は、遺存していなかった。覆土は黒褐色土で、下半部にはロームをまじえる。柱穴を確定することはできなかった。床面近くの覆土中から、弥生土器の大破片が出土している。



豊穴住居860 出土遺物 (図37)

出土した遺物はわずかで、図36 豊穴住居860実測図 (1:80) 図化できたものは1点であつた。

1599は丹塗りの壺形土器である。肩部から上部を欠いているが、頭の短い外反する口部をもつと考えられる。胴部内面には擦での、底部には放射状の工具の端部痕跡が残る。

これにより本造構の時期は弥生時代中期後葉～末が考えられるが、造構の配置から中期末の可能性が高い。

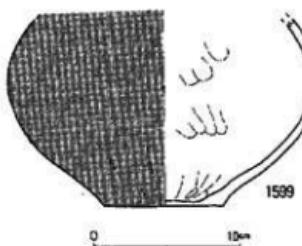


図37 豊穴住居860出土遺物
実測図 (1:4)

豊穴住居1 (図40～44)

I-3区に位置する。掘立柱建物470と重複し、それより古い。平面形が長方形の豊穴住居である。南半部の一部が調査区外に位置する。長さ6.1m、幅5.1mをそれぞれ測る。覆土は茶褐色土である。東辺部では、壁近くの隅部に地山ローム粒を多く含む土層が堆積している。また、壁溝から壁に沿って立ち上がる土の変化があるが、これが住居の壁に関係した施設の痕跡かどうか明確にはできなかった。住居の短辺に沿い、幅0.9～1.0mほどのいわゆる「ベッド状造構」が造り付けられている。床面との段差は0.1mをやや越える。壁に沿った四周と北側のベッド状造構に沿った部分で豊溝が検出された。住居中央の床面に地床炉が設けられている。不整な梢円形状で長さ0.7m、幅0.5mを測る。掘型等は認められず、床面から厚さ5cm程の部分が熱の為にか硬く締まり、他の床面と異なり亀裂が集中してみられる。

住居長軸線とベッド状造構肩部の交点に柱穴がある。柱穴は径が0.9m前後で、底面は標高8.0mあるいは8.1mの位置にある。住居北辺両隅部にはそれぞれ、柱穴と同規模の小穴186、194がある。確認面では柱痕跡とみえる変化を確認したので柱穴と出来るかもしれない。底面の高さも柱穴に近似する。共に底部近くの覆土中から完形あるいは大破片の七器が出土している。東辺中央壁際に土壤がある。平面形が不整な梢円形状で、底面が一段窪んでいる。

床面は貼床によっている。図示しないが両柱穴の間が浅い溝状に一段深く掘り窪められている。



図 38 壴穴住居790
(東から)

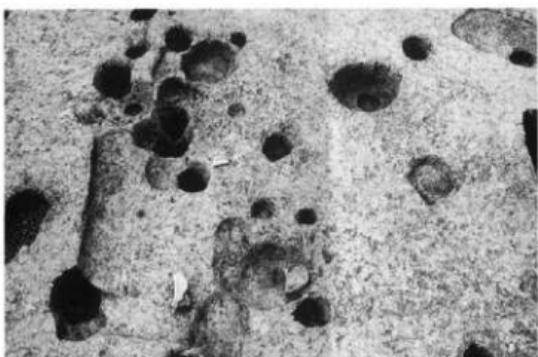


図 39 壴穴住居860
(南から)



図 40 壴穴住居1
(北から)



図 41 壁穴住居 1
模型（東から）



図 42 壁穴住居 1
模型（北から）



図 43 壁穴住居 1
内土壤（東から）

遺物は、覆土中から散漫に出土したほかに、壁際のベッド状遺構面上で完形の資料が完存して、或いは潰れた状態で出土した。

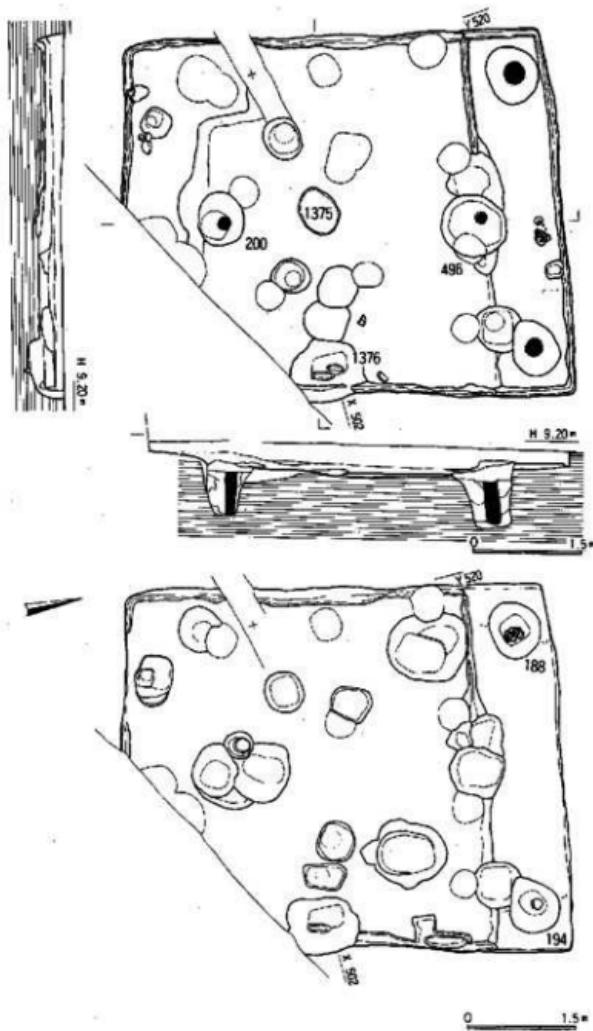


図 44 壁穴住居 I 実測図 (1:80)

豊穴住居1 出土遺物 (図45-82)

鉢形土器・壺形土器・壺形土器のほか石器・鐵器が出土した。

2099は小型の壺形土器である。ほぼ完形。口縁部は中ほどでやや膨らみ、端部は丸く仕上げられている。胴部の最大径は中位よりやや上にある。底部は丸底である。口縁部外面は刷毛目調整の後に横方向の撫で調整を施す。胴部外面は横方向に刷毛目調整を施すが、部分的に横方向の撫で調整を行う。内面の胴部下半以下には炭化物が付着する。618・667は小型の鉢形土器である。ともに直口縁で、丸底をもつ。618は内外面ともに刷毛目調整した後に、撫で調整を施す。内底面には指頭圧痕が残る。淡褐色を呈する。667は内面に範状工具痕が残る。橙褐色を呈する。2097・3049は、「く」字形口縁の壺形土器である。2097は胴部の一部を欠くが、ほぼ完形に復元できた。胴部の最大径は中位にあり丸みをおびた形状で、大きめの凸レンズ状の不安定な平底がつく。外面は口縁部まで平行叩き調整が施された後に、かるく撫で調整を行う。内面は刷毛目調整の後に撫で調整で仕上げる。淡黄褐色を呈し、胴部中位の外側の2カ所に、対称的な位置に黒変部がみられる。2049も同様な器形をもつと考えられるが、器壁は非常に薄く仕上げられる。淡黄褐色を呈する。3048・3047は凸レンズ状の底部破片である。3048は3049と同一個体と考えられる。器面の荒れが著しく、調整手法の仔細はまったく不明。3047は外面を刷毛目調整、内面を撫で調整する。色調はやや暗い淡褐色である。

5は石包丁である。灰緑色を呈する石材を使っているが、石材名は不明。刃は両面研ぎ出しがあるが、研ぎ減りで左右不对称である。上縁の右半分には摩耗痕があり、使用によるものであろう。長さ111.5mm、幅35.7mm、厚さ6.1mmを測る。粗孔は両面からの回転錐による穿孔である。孔の径は2.9mm、孔間は約3cmである。

2100は二等辺三角形を呈する鐵鎌である。わずかに歪み、先端と基部を欠く。現存で、長さ50.5mm、幅30.1mm、厚さ2.7mmを測る。

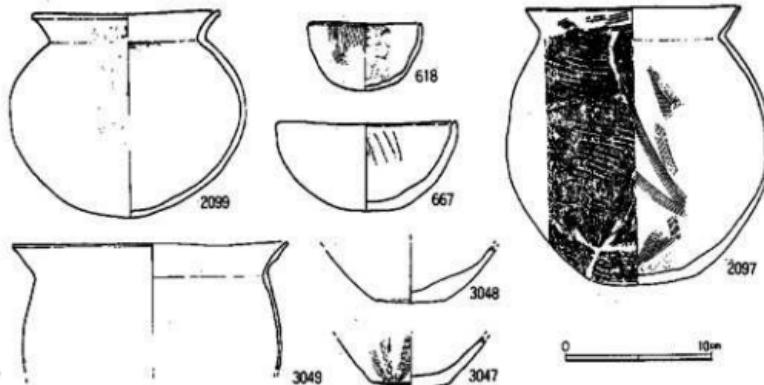


図45 豊穴住居1出土遺物実測図 (1:4)

豊穴住居 51

(図46・47・52・53)

I-13区に位置する。溝102、豊穴住居121と重複し、前者より古く、後者より新しい。東西部を後世の搅乱で破壊されて、全体の形状が不明確であるが、平面形状が長方形あるいは方形と考えられる豊穴住居である。南辺にはベッド状遺構と思われる高まりが部分的に残っている。全体を地山から削り出し、床面との比高0.1m前後をもつ。覆土は上部が明茶褐色土、下部が黒茶褐色土である。覆土の深さ0.2mを測る。住居の位置するこの区も小穴あるいは柱穴の分布が密であり、かつ本住居との前後関係も不明確なものが多いが、炉113を住居の施設と考えるならば、それとの関係により、柱穴118、449

が住居の柱穴である可能性が高い。共に平面形が梢円形状で二段の掘型をもち、底面の高さが標高8.1mを前後して、周囲の他の柱穴より深い。柱穴449では完形の、118では火破片の土器が、それぞれ覆土の上部から出土している。

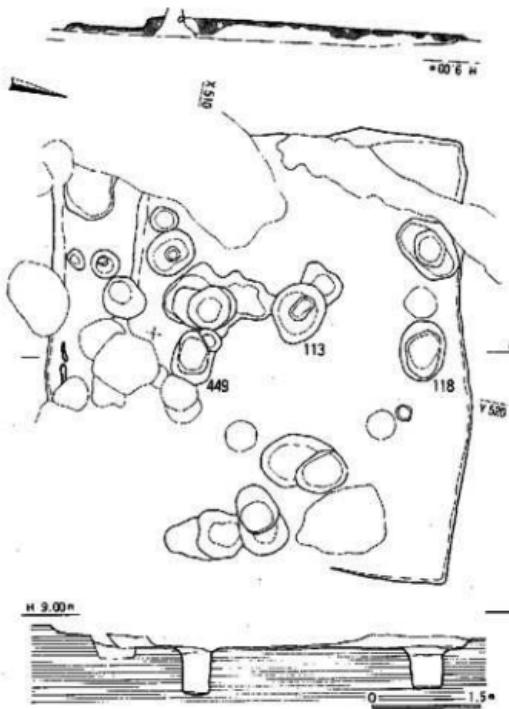


図 46 豊穴住居51実測図 (1:80)

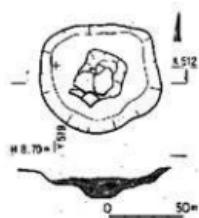


図 47 か113実測図
(1:40)

地床炉113は平面形が径0.8mほどの不整な円形状を呈し、断面形は皿状で底面の中央を一段深く掘り窪める。その部分での深さは床面から0.2mを測る。中程の深さの部分に焼土のブロックがある。それ以下はロームブロックである。床面の高さに近い覆土中から土器片が集中して出土している。

豊穴住居51 出土遺物

(図48・82)

出土土器には、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・支脚形土器などがある。

3241は短く「く」字形に折れる口縁部に、張りの強い胴部がつく壺形土器である。口縁部付近の4/5ほどの破片。内外面にきめの細かい刷毛目調整痕が残る。457は小型の鉢形土器である。内外面ともに指頭による撫で調整、口縁部は横方向の撫で調整で仕上げる。外面の一部と内面にかけて黒変部がみられる。747は無頸の壺形土器で、ほぼ完形に復原できた。

なで肩の偏球形の胴部に、短く「く」字形に折れる口縁部がつき、小さな平底をもつ。口縁部周辺は刷毛目調整の後に横方向の撫で調整、胴部上半は刷毛目調整、下半は刷毛目調整を施した後に横あるいは斜方向の範磨き調整を行う。内底面は指頭による撫で調整で仕上げる。胴部下半には不整形の黒変部がみられる。3242は杏形の支脚形土器上部の破片である。内外面ともに、指頭による撫で調整が施され、胴部外面には工具端部による傷と思われる数本の細線がみられる。2153は上端部を欠くが、杏形の支脚形土器と考えられる。内外面ともに刷毛目調整の後に指頭による撫で調整で仕上げる。焼成前に斜め上方から小孔が穿孔される。

出土土器の中で、541は古墳時代前期まで下る可能性もあるが、他は弥生時代後期後葉ものである。本造構の時期を示すものと考えられる。

豊穴住居 73 (図49・50・54-56)

I-2区に位置し、豊穴住居460と重複してそれより新しい。平面形が長方形の豊穴住居である。北西部分が調査区外に位置する。長さ7.5m、幅5.5mを測る。覆土は暗茶褐色土である。床面からの壁の高さ0.1mを測る。確認面が西へ傾斜しており、西部では壁は殆ど遺存しない。住居の短辺に沿いベッド状造構が造り付けられている。その床面からの高さ0.1mを測る。周囲の壁とベッド状造構に沿い、小溝が断続して巡る。

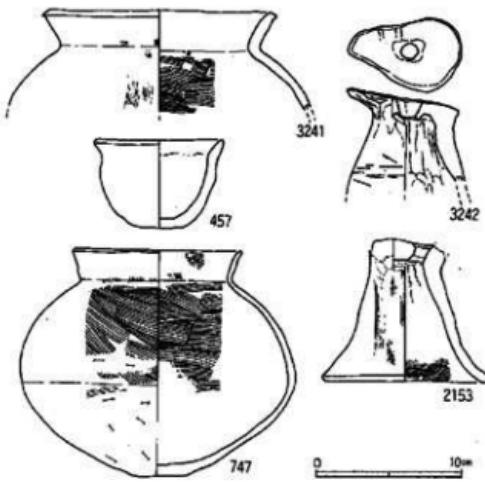


図 48 豊穴住居51出土遺物実測図 (1:4)

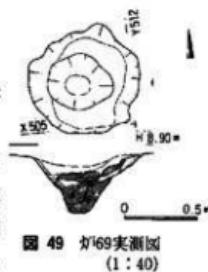


図 49 勘定実測図 (1:40)

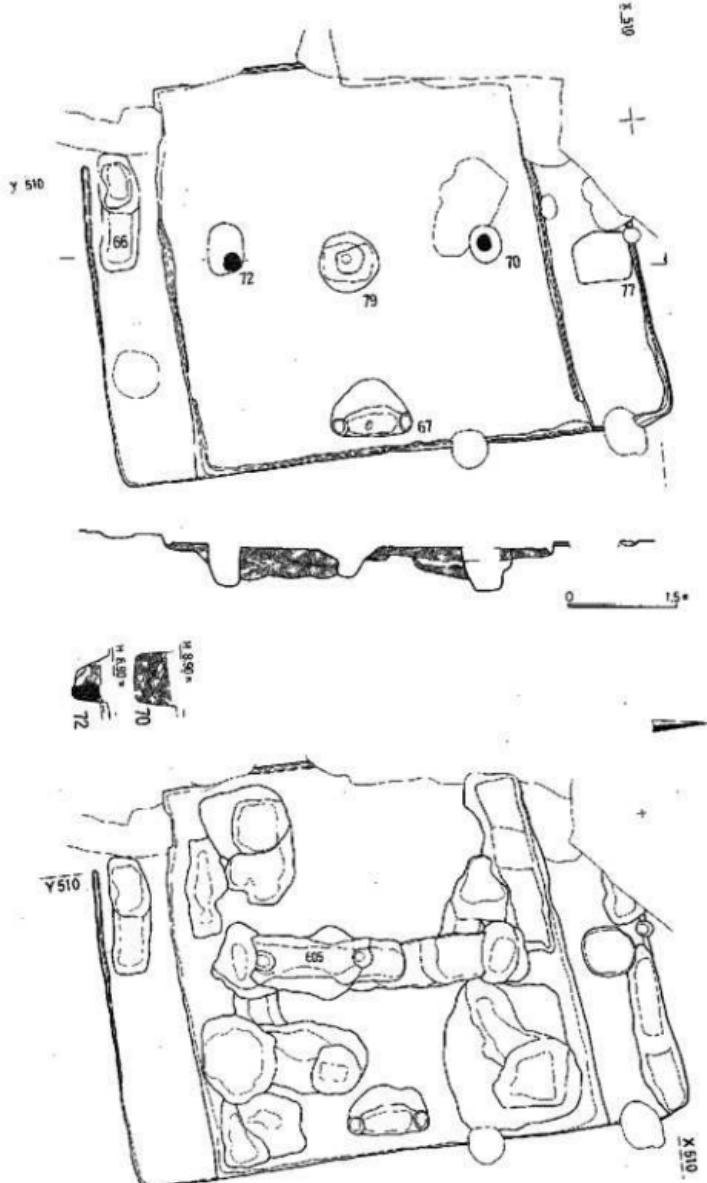


図 50 壁穴住居73実測図 (1:80)

床面では炉79と、それを中心に長軸方向に配置された柱穴70、72のほかに土壤状の落ち込みを検出したが、その幾つかは床面下の遺構のようである。炉79は平面形が径0.8m程の不整な円形状を呈す。断面では漏斗状を呈し、その中位に焼土が広がる。それより上位は住居覆土が落ち込み、下位は灰層かと思われる暗褐色粘土質の薄層、以下は軟質のロームブロックとなっている。

柱穴の平面形はともに不整な橢円形状、断面形は箱状を呈す。柱穴70の長さ0.9m、幅0.6m、柱穴72は同様にして0.7m、0.5mを測る。底面はともに標高8.3m付近にある。柱穴72での観察から、その掘型は貼床下に埋め込まれていたことが考えられる。

床面と北側のベッド状遺構では貼床が残っていた。貼床除去後の掘型は、住居北壁に沿って溝状の掘り込み、床面部の四方に溝状あるいは、不整な土壤状の掘り込みが検出された。また、両柱穴を結ぶように溝状の掘り込みが行われている。それらは殆どロームブロックを用いて埋められているが、柱穴間にある遺構605は間に灰層かと思われる極暗赤褐色の粘土質を挟んでいる。その部分の床面からの深度0.4mを測る。

遺物は覆土中から散漫に出土したほかに、柱穴を結ぶ線の延長線上にある土壤77の覆土中から全形を復元できる資料が出土している。

豊穴住居73 出土遺物（図51）

出土遺物には、壺形土器と大型の壺形土器と考えられる胴部破片がある。

2282はほぼ完形に復原された無頸の壺形土器である。器体のビズミが著しい。緩やかに外側しながら反転する「く」字形の口縁部をもち、偏球形の胴部は最大径が中位にある。小さな凸レンズ状の平底がつく。淡黄褐色を呈する。3245は壺形土器の胴部の小破片である。器壁の厚さ、カーブから考えると、かなりの大型品と考えられる。断面台形の凸帯が貼付され、凸帯上には斜めの刻み目が入れられる。3246は凸レンズ状の平底の破片である。胴部下半のひらき具合から壺形土器と考えた。器面の荒れが進み、内面に崩毛目調整を施した以外、調整手法の仔細は明かでない。約1/2の破片である。

2282や3246は壺形土器の凸レンズ状底から、弥生時代後期後葉に比定できる。遺構の時期も当該期と考えられる。

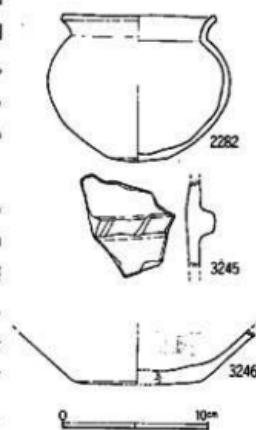


図 51 豊穴住居73出土七遺物
実測図 (1:4)



図 52 壺穴住居51
(東から)

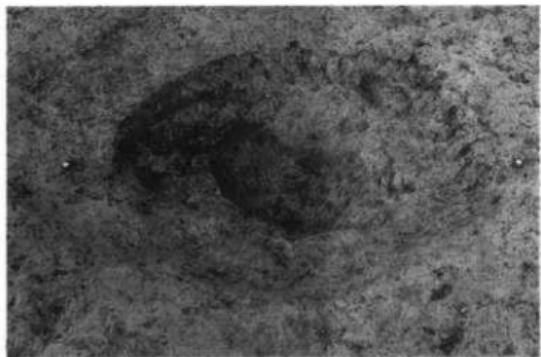


図 53 炉113(南から)



図 54 壺穴住居73
(東から)



図 55 整穴住居73
掘型（東から）

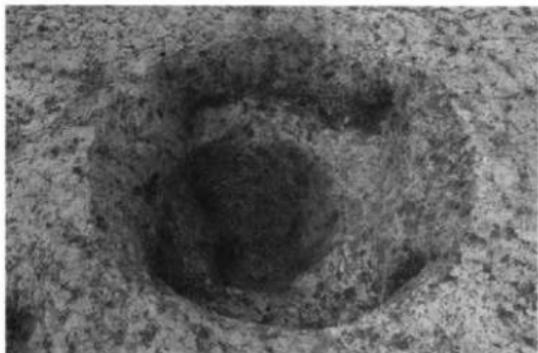


図 56 火79(南から)



図 57 整穴住居250
(東から)

豊穴住居 250 (図57・58)

1-24区に位置する。現状では、平面形が歪な長方形状を呈する豊穴住居である。南北3.4m、東西3.9mを測る。南北の中心線上に住居の壁を越えて溝状の落ち込みがそして、その両端部に浅い柱穴がある。これが本来住居に伴うものであるかどうかという疑問が残るが、そうであるとすれば、住居の平面形は拡大し、形の違うものとなる。調査時それを念頭において精査したが、その痕跡は確認することができなかった。

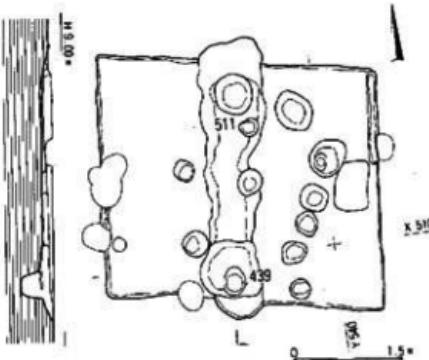


図 58 豊穴住居250実測図 (1:80)

本住居覆土は淡茶褐色土であり、床面からの壁高0.1mをはかる。遺物は、覆土中から極わずか出土した。

豊穴住居250 出土遺物 (図59)

312は硬砂岩製の砥石である。両面とも平滑で、瘤みはない。長さ10.2cm、幅9.5cm、厚さ1.8cmを測る。

本遺構中からは、弥生時代中期の甕形土器や高壇などが出土しているが、住居の構造からみて終末の時期に属すると考えられる。

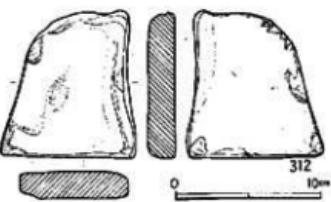


図 59 豊穴住居250出土遺物
実測図 (1:4)

豊穴住居 780 (図60-66-68)

1-27区に位置する。平面形が長方形の豊穴住居で、南半の一部が調査区外に位置する。長さ8.2m、幅5.9mを測る。溝795、94、掘立柱建物720と重複しているよりも古い。覆土は暗茶褐色土で、壁の高さは床面から0.4mを測る。四周の壁際に壁溝が巡る。住居短辺側の壁に沿い幅1.0m程度で、床からの高さ0.1~0.2mほどのベッド状遺構が造り付けられる。床中央部に炉がある。炉の平面形は、不整な隅丸長方形形状を呈し長さ0.6m、幅は推定0.4mを測る。断面形は皿状を呈し床面からの深さ0.1mを測る。焼土は床面に近い高さで検出され、それ以下は極暗赤褐色を呈するロームブロックとなっている。柱穴は住居長軸線上で、溝795下位となる位置で検出した。形状は不明であるが、その底部は標高7.8mの位置にある。

床面は貼床によっており、それを除去後の模型は、ベッド状遺構上の住居壁短辺に沿う部分と床面の周囲を断続して溝状に掘り窪めている。遺物は覆土中位から、一括投棄されたような状態で多量に出土した。また、床面から鉄斧が出土している。

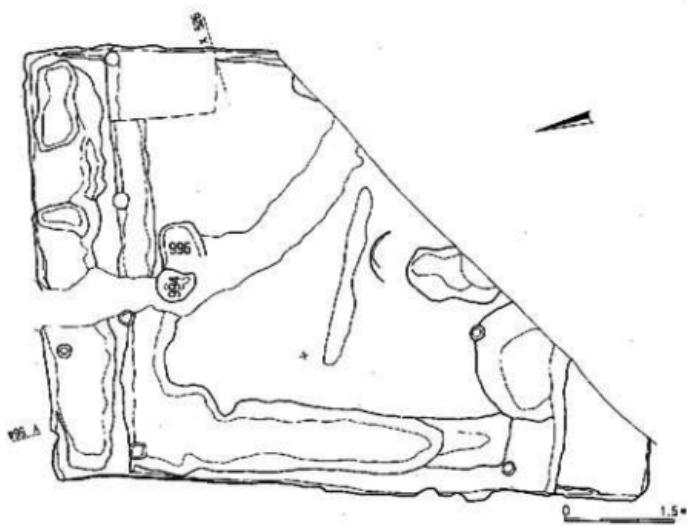
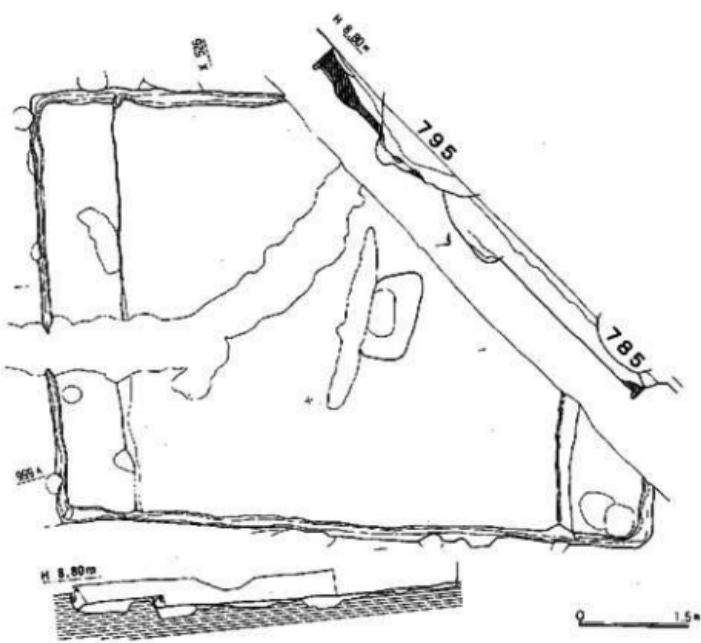


圖 60 整穴住居780実測図 (1:80)

堅穴住居780 出土遺物 (図61~63・82)

本遺構からは、各種弥生土器の他、石庵丁や玉などの石器、鐵斧が出土している。

3204は頸部が長く、ラッパ状に聞く壺形土器である。頸部には波状で低い、断面台形を呈する凸帯を貼付している。全体を丁寧なナデで消しているが、凸帯上と内面に刷毛目を残している。約1/2の破片である。3205は口径の大きな壺形土器である。頸部の凸帯上には沈線による「X」字文をつける。凸帯の断面は低い台形である。頸部はゆるやかに立ち上がり、屈曲はない。全面刷毛目を丁寧に施して消している。約1/5の破片である。3206は口径49.4cm(復元)の大型の壺形土器である。口はラッパ状に外反する。頸部には二条の低い三角凸帯を貼付している。器壁の厚さは頸部で1.6cmと厚重なつくりである。約1/8の破片。器表面が荒れて、調整は不明。3207は円形の竹管文を押圧した二重口縁の壺形土器である。器表面が荒れて、調整不明。3208は底部に穿孔した鉢形土器の胴部から底部にかけての部分である。孔は焼成以前に穿たれています。3209は円形の偏平な土製品である。直径は約5.6cmである。成形は手づくねによる。両面とも二次的な火をうけており、赤変し表面がひび割れている。

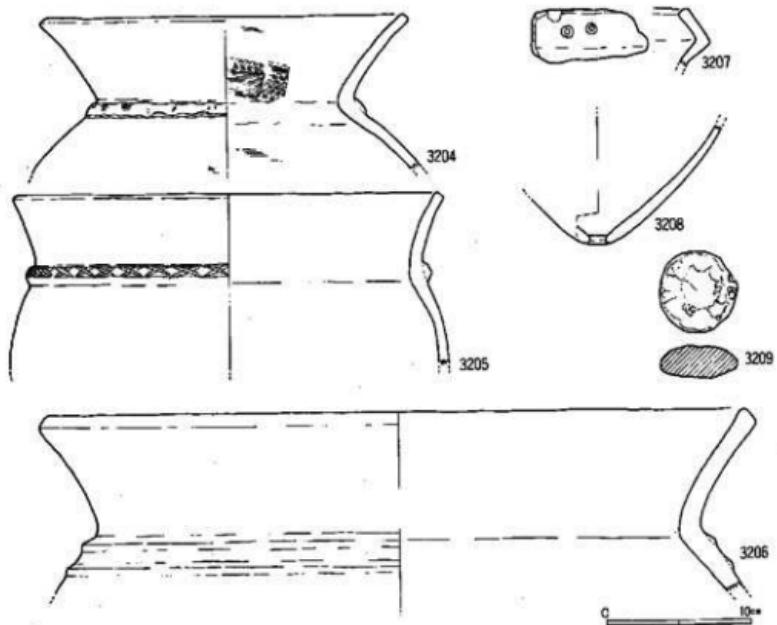


図 61 堅穴住居780出土遺物実測図 1 (1:4)

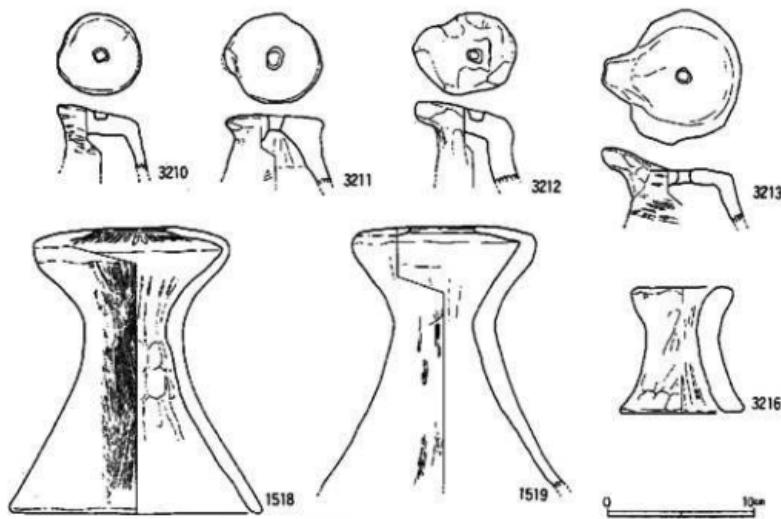


図 62 堪穴住居780出土遺物実測図 2 (1:4)

3210～3213は沓形の支脚形土器の受け部の破片である。すべて脚部を欠損している。3210と3212は方形の孔で、貫通していない。3210と3213の外面にはタタキの痕跡が認められる。1518と1519は袋状の受け部をもつ器台である。近接した位置から出土した。1518は脚据の一部を失くもののほぼ完存している。外面は縦方向の刷毛による調整で、受け部は丁寧にナデ消している。受け部の中央孔は $5.5 \times 4.5\text{cm}$ である。1519は1518とほぼ同大であるが、脚据を失っている。外面刷毛目調整。受け部は撫で消す。受け部の孔は $4.7 \times 4.1\text{cm}$ である。3216は小型の筒形器台で、完形品である。器壁が 1.5cm と厚い。全面撫でや指押さえによって仕上げられている。

1499は輝緑凝灰岩製の石庖丁の未製品である。灰紫色を呈する。研磨が充分でないため器表面には粗削離の段階の剥離痕跡が残る。縫孔は両面から回転錐によって穿孔されているが、途上のままで、貫通していない。この二つの孔以外に、穿孔を試みた痕跡が認められる。右肩の欠損部は研磨後のものである。現存で、長さ 113.7mm 、幅 57.9mm 、厚さ 9.7mm を測る。1454は袋状鉄斧である。刃部から中位にかけては断面長方形の板状で、上半部を折り曲げる。袋部と刃部の一部を欠損する。長さ 85.5mm 、刃部の幅 33.8mm 、刃部の厚さ 9.0mm を測る。1473はガラス製のビーズである。 $5.5 \times 5.3 \times 2.9\text{mm}$ 、青色を呈する。

これにより、住居の時期は弥生時代後期末である。

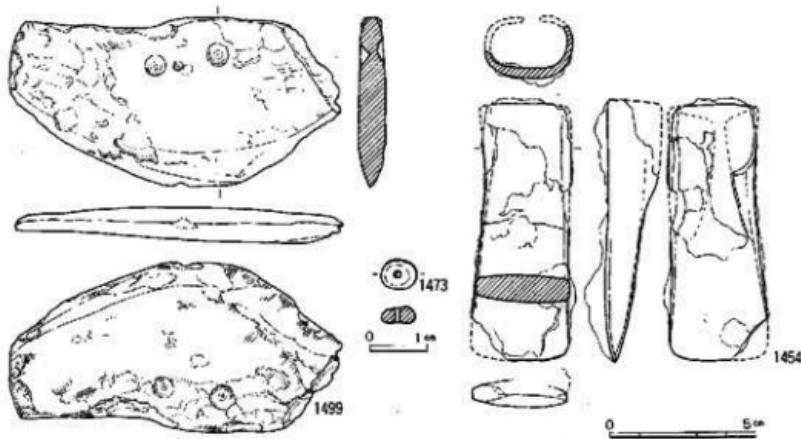


図 63 壁穴住居780出土遺物実測図 3 (1:4)

壁穴住居 800 (図64-65-76-77)

I-39区に位置する。壁穴住居810、840と重複しそれらより新しい。平面形が長方形の壁穴住居で、南半の一部が調査区外となる。長さ5.7m、幅4.6mを測る。覆土の上部は暗茶褐色土で硬く締まり、下部の床面に近い部位は黒茶褐色土で木炭を多く含む。中位からは焼土の集中して堆積する部分が2箇所検出された。壁は床面からの高さ0.5mを測る。住居短辺側に幅1.0~1.1m程のベッド状造構がある。南辺側のそれは調査時掘りすぎた結果の状態をあらわしている。床面からの高さ0.1mを前後する。床面には炭化した木材と焼土が残っていたことから、火災にあったものと考えられる。炭化した木材は、住居長辺側の壁際に残り、全体の遺存の状況は、壁に直角方向を向いている。同じ面から、完形の土器が出土した。

床中央からやや南に偏って、炉が設置されている。炉は、平面形が径0.7m程の不整な円形を呈し、断面形は皿状で深さ0.1m程を測る。柱穴とみられる造構はこの炉を通る長軸線と、

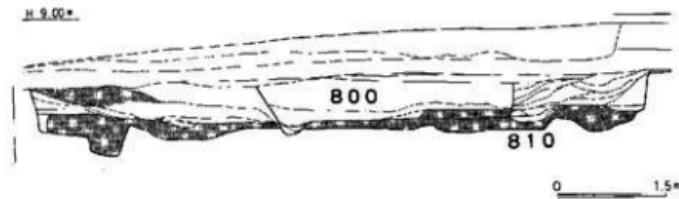


図 64 壁穴住居800・810土層断面実測図 (1:80)

ベッド状遺構との交点部分に設けられている。柱穴915は、平面形が不整な椭円形状を呈し、長さ0.5m、幅0.4mを測る。柱痕跡と思われる変化を検出できた。底面の標高7.2mを測る。柱穴1371は同様にして、不整な円形状で、径0.5m、底面の標高7.7mとなる。後者の極く浅い点、他の例とは異なる。

住居内の全体に貼床が行われている。貼床に使用した土は他区での例とは異なり、ロームに黒色土が混じっている。さきに設けられた堅穴住居を掘り込んで建てられたことによるものであろうか。貼床部分の除去後の掘型は壁際とベッド状遺構に沿った床面部分をそれぞれ溝状に掘り進められた部分があるほかに、壁際の隅部、床部分の隅部を土壤状に掘り進めている。

遺物は覆土中から出土したほかに、上述のとおり床面から完形資料の出土があった。

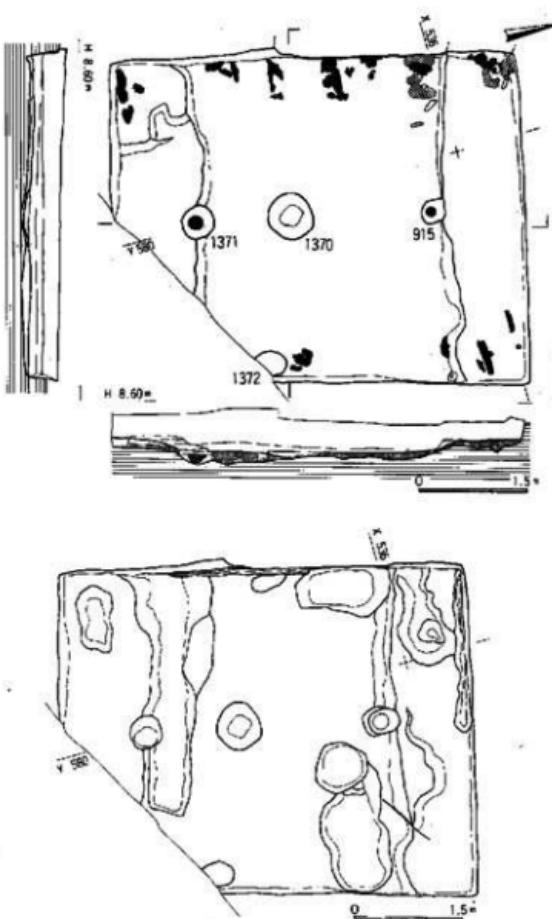


図 65 堅穴住居800実測図 (1:80)



図 66 壁穴住居780
(西から)



図 67 壁穴住居780
掘型 (西から)



図 68 壁穴住居780
土層断面 (北から)

堅穴住居800 出土遺物（図69）

出土遺物には、小型の壺形土器と鉢形土器がある。1496はほぼ完形の短頸の壺形土器である。肩が張った胴部には直立する口頭部がつき、底部は丸底である。外面は器面の荒れが著しい。頸部の付け根に刷毛目調整の痕跡がわずかに残る。内面は基本的には擦で調整が施され、内底面には笠状工具痕が残る。胎土には粗・細砂粒を多く含み、暗黄褐色ないし淡茶褐色を呈する。肩部には不整棱円形の黒変部がみられる。1550は丸底をもつ直口縁の鉢形土器である。つくりは粗雑で、器壁も厚く、内外面に施される刷毛目調整も乱雑である。胎土には粗・細砂粒が多く含まれ、淡茶褐色を呈し、外底部から胴部下半にかけた広い範囲が黒変する。

こうしたタイプの壺形土器や鉢形土器は、弥生時代後期末～古墳時代前期前葉によくみられるもので、ここでは1496が肩が張った胴部をもつことから、弥生時代後期末と考えておきたい。本住居の時期も当該期に求められよう。

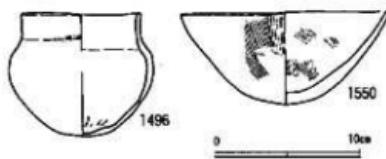


図 69 堅穴住居800出土遺物実測図（1:4）

堅穴住居 810（図64-70-78-79）

I-39に位置する。堅穴住居800、840と重複し、前者より古く、後者より新しい。南半部は調査区外にあり、全形は復元できないが、長方形の堅穴住居とできる。長さは調査部分で8.4m、幅は炉、柱穴が中軸線に位置するものと仮定すれば、調査部分にはそれが無いくことから、5.0m以上はあったものと推定する。住居周辺に幅1.0～1.1mのベッド状遺構がある。覆土は遺構中央部に向かって流れ込むような堆積を示す、レンズ状の薄層からなっている。全体の色調は暗茶褐色を呈す。壁は床面からの高さ0.5mを測る。壁際の床面、ベッド状遺構の床面では、小溝が検出された。他の施設は、調査区内の部分では検出されなかった。住居内の全体に貼床が行われており、それを除去した掘型は、ベッド状遺構の一方は壁に沿った部分を、他方は床近くの位置を掘り窪めて溝状にしている。床部分はその隅部を中心に不整な土壙状に掘り窪めている。断面からすると、ベッド状遺構は、床附近に土堤状に地山を削り残している。堅穴住居800と同様、貼床材に黒色土を混ぜて用いる。

堅穴住居810、800は周囲の他の堅穴住居と比べ格段に深い位置に床面を設けている。

遺物は覆土中から散漫に出土した。

堅穴住居810 出土遺物（図71）

本遺構からは少量の弥生土器と石器が出土した。

3217は二重口縁壺の口縁部の破片である。約1/4残る。内外面にわずかに細かい刷毛目が残る。

3218は口径34.5cmを測る大型の壺形土器である。約1/5残る。胴部の内外面に刷毛目が残る。

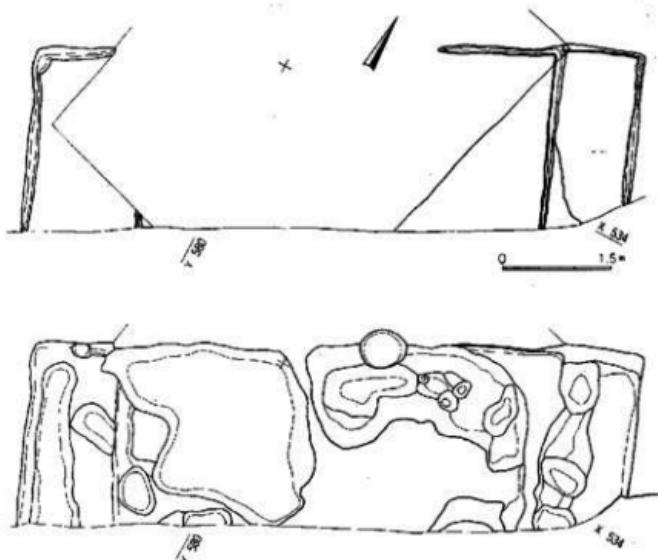


図 70 壁穴住居810実測図 (1:80)

1613は頁岩製の磨製石斧である。片刃で、正面左肩にわずかな瘤みがある。あら割りの際の剥離痕であろうか。長さ12.3mm、幅12.8mm、厚さ5.7mmを測る。表面が風化して白色に変色している。

よって本住居の年代は弥生時代後期後葉と考えられる。

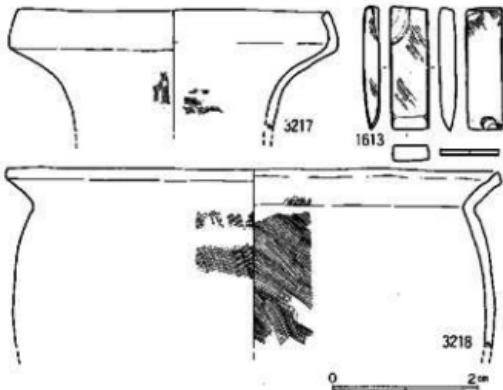


図 71 壁穴住居810出土遺物実測図 (1:4)

竪穴住居 820 (図72-80)

I-38区に位置する。竪穴住居800、溝795と重複して、それより古い。平面形は、遺構の遺存状態が悪いため判然としないが、長方形となるものかと思われる。おおよその長さ5.3m、幅4.2mが考えられる。覆土は暗茶褐色土で、床面からの壁の高さは0.1mに満たない。中央部の床面が焼けで硬くなっている。がであろうか。これを挟んで短軸方向に小穴が向かい合う。柱穴と考えるべきだろうか。ともに標高7.9mの位置に底面がある。掘型南西隅部に土壤状の掘り込みがある。

遺物は、西辺部で集中した出土がみられた。

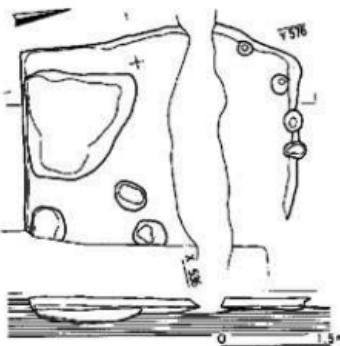


図 72 竪穴住居820実測図 (1:80)

竪穴住居820 出土遺物 (図73)

3219は二重口縁の壺形土器で約1/2の破片である。肩部分の破片もあるが、接点がない。頸部の付け根に一条の三角凸帯がある。頸部は内面に横方向の、外面に縱方向の粗い刷毛目を留める。3220は壺形土器の頸から胴部にかけての破片である。凸帯は蒲鉾形で、右下がりの刻み目をつける。内面の肩部には細かい斜め方向の刷毛目を残す。それより以下は指による押さえである。

これより、本住居の時期は弥生時代後期中頃が考えられる。

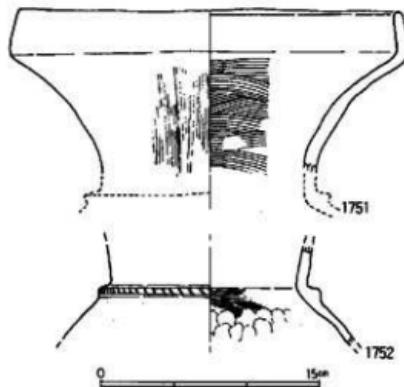


図 73 竪穴住居820出土遺物実測図 (1:4)

竪穴住居 840 (図75-81)

I-39区に位置する。竪穴住居800と重複してそれより古い。南半の一部が調査区外になる。平面形は遺存する部分からするかぎり長方形の竪穴住居である。幅は5.5m、長さは炉が遺構中央にあるものとして、そこから折り返して7.6mを得る。覆土はなく床面もある程度削られているものと思われる。壁の位置は、壁際の小溝によって知られるのみである。小溝はベッド状遺構と床との境でも検出された。床の中央に炉955がある。平面形が不整な梢円形状を呈し、

長さ0.9m、幅0.8mを測る。断面形は皿状で、底面は赤化していた。

貼床部除去後の掘型は、炉と推定柱穴を結ぶ線から外れて溝状に掘り窪めている。ベッド状遺構部分の壁に沿う溝状の掘り込み、床隅部の土壠状の掘り込みがみられる。

竪穴住居840 出土遺物 (図75・82)

3247は粘板岩製の砥石の側面部分の破片である。側面にはノミ状工具の刃跡が顕著に認められる。正面は平滑である。暗灰緑色を呈する。現存部で、長さ18.7cm、幅4.2cm、厚さ2.0cmを測る。1569はガラス製のビーズである。青色を呈する。4.7×4.4×2.9mmである。

本住居からはあまり遺物が出土していない。細片ながら二重口縁の器曲部がタガ状になる終末期の土器が出土しており、住居の形態も考えあわせて弥生時代後期後葉の時期があてられよう。



図 74 竪穴住居840出土
遺物実測図(1:4)

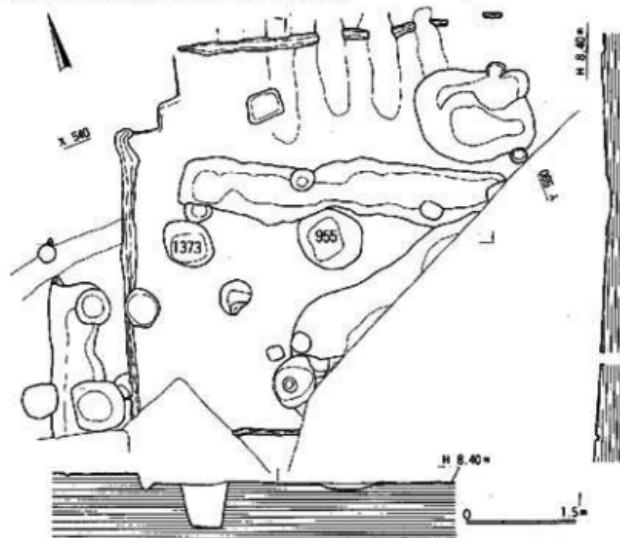


図 75 竪穴住居840実測図 (1:80)

竪穴住居 930 (図83~87)

I-37区に位置する。溝960、竪穴住居920と重複し、いずれよりも古い。平面形が長方形となる竪穴住居である。長さ7.8m、幅5.8mをそれぞれ測る。覆土は黒褐色土で、床面からの壁の



図 76 堅穴住居800
(東から)



図 77 堅穴住居800
(東から)



図 78 堅穴住居810
(北から)

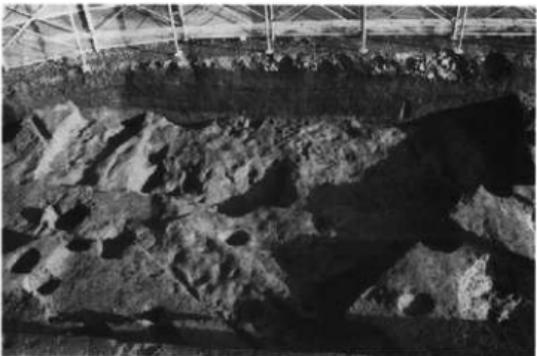


図 79 壁穴住居810
掘型（北から）



図 80 壁穴住居820
(東から)



図 81 壁穴住居840
掘型（北から）

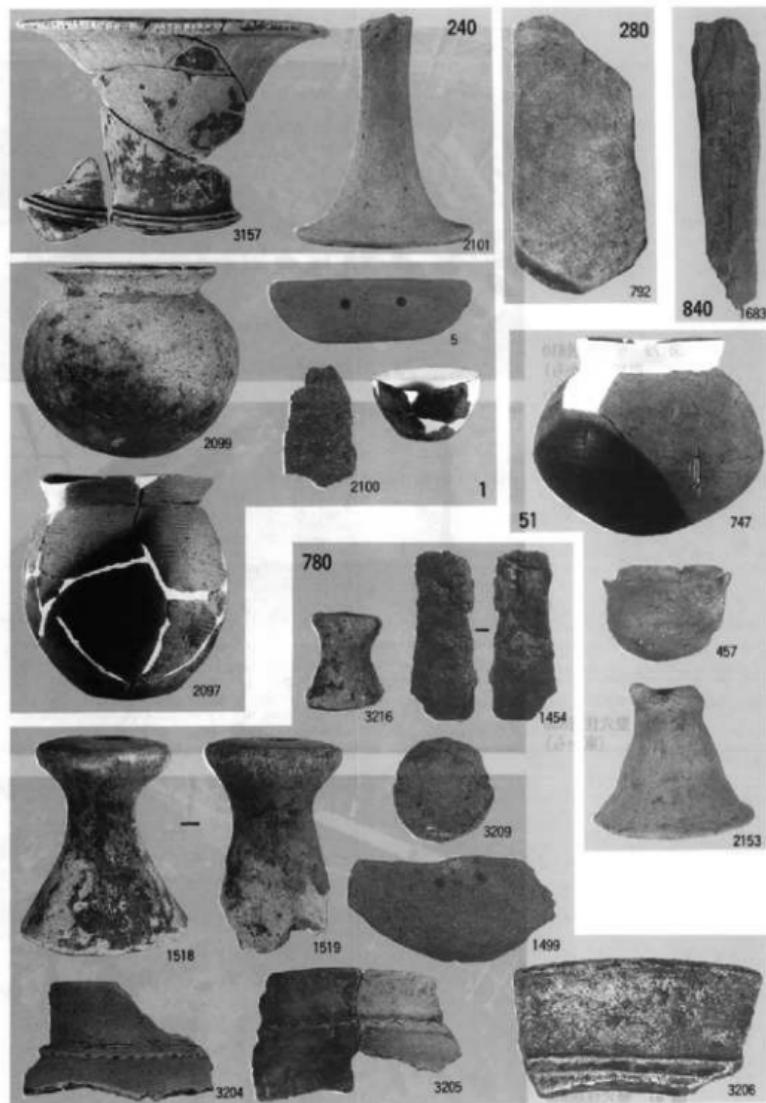


图 82 坚穴住居(240·280·1·51·780·840)出土遗物

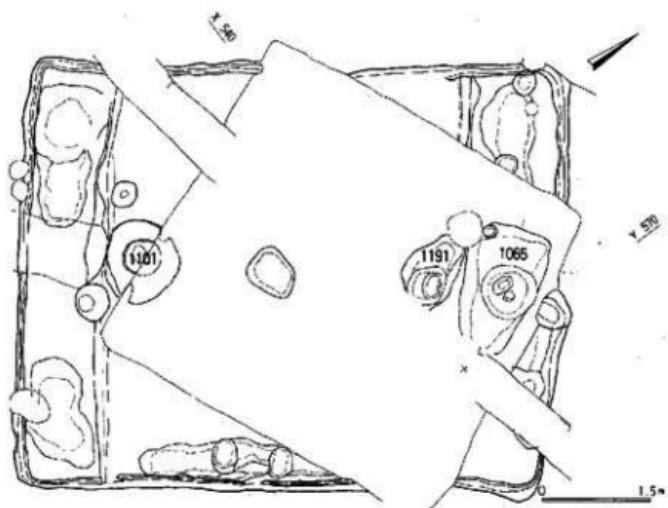


図 83 壁穴住居930実測図 (1:80)

高さ0.4mを測る。短辺側の壁に沿い幅1.0~1.3mのベッド状造構を造り付ける。その床からの高さは0.1mかそれ以下である。住居壁の全周とベッド状造構際の一部で小溝を検出した。

本住居中央部を壁穴住居920によって切り込まれているが、その掘型下から炉、柱穴などを検出した。がは住居長軸上の中央よりやや偏った位置にある。平面形が不整な梢円形状で長さ0.7m、幅0.6mを測る。断面形は皿状を呈し、床面からの深さ0.2mを測る。炉を挟んで住居長軸線上のベッド状造構の間にあたる位置に柱穴が配置される。柱穴1101は平面形が径1.0mを測る不整な円形を呈す。柱穴1191は、不整な梢円形状で、長さ1.1m、幅0.7mとなる。その底部は東に寄って一段深くなる。柱穴の底面は標高7.4mを前後する位置にある。

住居内は貼床によっており、それを除去した掘型は、ベッド状造構ではその各隅部に住居短辺に沿う不整な長方形状の掘り込みがおこなわれている。更に柱穴を結ぶ線の延長線上に土壤1065があり、その中央の掘り込み部から、土器が完形で出土している。また、南面する住居長辺の中程には壁に接して不整な長方形の掘り込みが検出された。その両端には更に小穴を掘り込んだような状態を示し、住居73内土壤67に形状がよく似る。長さ1.1m、幅0.6mを測る。

遺物は、覆土中から比較的顕著に出土し、住居壁に沿い流れ込んだような様態を示す資料もあった。また、図示する資料中、奈良時代の遺物があ

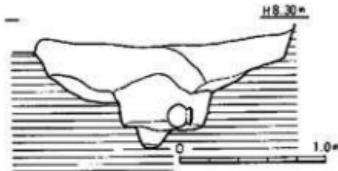


図 84 土壌1065実測図 (1:40)



図 85 壁穴住居930
(北から)



図 86 壁穴住居930
(東から)

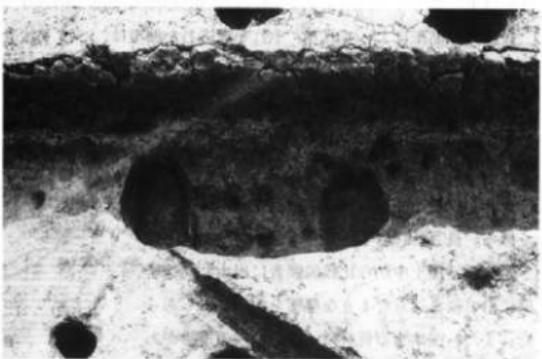


図 87 土壌(西から)

るが、これは本住居に殆ど重なった別の、おそらく平面形が長方形状をなす遺構に含まれていたものであろう。

豊穴住居930 出土遺物 (図88・89・90)

出土土器には壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高壺形土器・支脚形土器・器台形土器などがある。

3196はほぼ光形の短頸の壺形土器である。口頭部および胴部外面は器面の荒れが著しく調整手法は不明。胴部内面は丁寧に施で調整で仕上げる。やや白っぽい淡褐色ないし淡茶黄色を呈する。

2072は甕形土器で、口縁部の1/6ほどの小破片である。裁頭卵形あるいはラグビーボール状

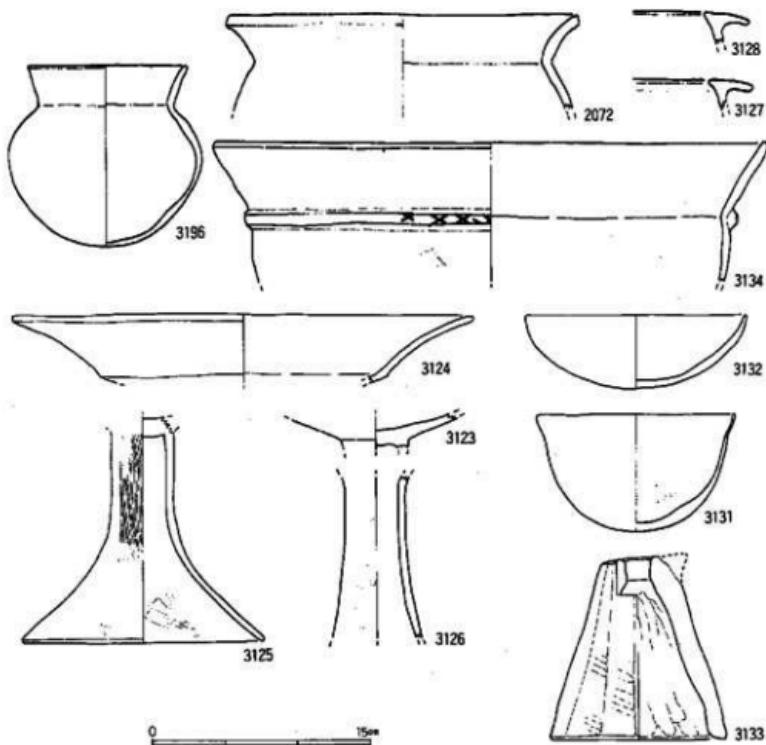


図 88 豊穴住居930出土遺物実測図1 (1:4)

の脚部がつくと考えられる。器面は荒れ、口縁部内面に部分的に刷毛目調整の痕跡を認めるにすぎない。色調は淡茶灰色である。

3134は口縁部の1/8ほどの破片で、口径は不確実であるが、かなり大型の鉢形土器と考えた。口縁部は「く」字形に屈折させ、断面台形の突帯を1条めぐらす。突帯には板状工具の小口部を押捺して刻み目を施す。口縁部周辺は横方向の撫で調整で、胴部内面には撫で調整、外面は刷毛目調整するが、器面が荒れ、部分的にしか調整痕は認められない。淡黄褐色を呈する。

3132と3131は小型の鉢形土器である。3132は浅い直口縁の鉢形土器で、外底面を中心として二次的な火を受けたと考えられ、器面の荒れが著しく調整手法はまったく不明である。色調は淡黄茶色を呈する。3131はわずかに内凹する直口縁をもつ。口縁部は横方向の撫で調整、胴部～底部外面は丁寧な撫で調整、内面は刷毛目調整の後に不定方向の撫で調整で仕上げる。淡茶赤色を呈する。

3123・3124・3125・3126は高環形土器である。3123は环部と脚部の接合部の破片である。环部内面を丁寧に荒磨き調整するほか、器面が荒れているために調整手法は観察できない。胎土は微細砂粒を少量含む程度で、精選されている。色調は淡茶赤色である。3124は环部の破片である。器面の荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。淡茶灰色を呈する。3125は脚部の破片で、中空の脚柱部にわずかに膨らみをもつ脚部がつく。器面はかなり荒れているが、部分的に刷毛目調整の痕跡が残る。刷毛目には精粗があり、最低2種類の板状工具で刷毛目調整を行ったことが考えられる。淡黄褐色を呈し、外面の各所に黒変部がみられる。3126は脚柱部の破片である。外面は刷毛目調整の後に撫で調整で仕上げる。内面は撫で調整。茶赤色を呈する。

3133は沓形の支脚形土器で、沓の先端にあたる部分と、裾部の一部を欠く。外面は撫で調整の後に面取りをするように平行叩き調整を施す。内面は指頭による撫で調整を行い、指頭圧痕が残る。淡黄褐色を呈する。

以上の土器のほかに、3127・3128は弥生時代中期の錐形口縁をもつ壺形土器の小破片である。口径は小破片であるため明かでない。竪穴住居跡の埋没時に周辺から混入した可能性が考えら

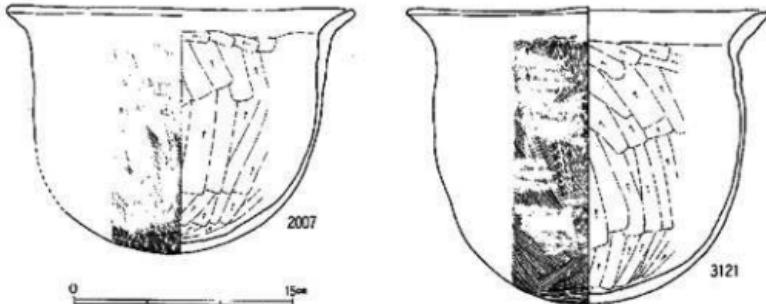


図 89 竪穴住居930出土物実測図 2 (1:4)

れる。これらを除くと、1065・2027・3124は弥生時代後期末に比定でき、他も後期後葉～末のものばかりである。造形の時期は弥生時代後期末に求めることができよう。

また、住居跡の東北隅のベット状造構上から、2007と3122が出土した。出土時には細片となっていたが、ほぼ完形に近い形に復原できた。ともに、肩がほとんど張らず、深めのボウルに似た胴部をもつ。口縁部は「く」字形に折り曲げられ、丸底がつく。口縁部付近は横方向の撫で調整、外面は刷毛目調整、内面は乱雑な上方に向かう窓削り調整が施される。3122の口縁部の屈曲部には、部分的に叩き調整の痕跡がみられ、刷毛目調整に先行して叩き調整が行われらしい。茶赤色を呈する。2007は胴部上半の2カ所、3122は胴部下半と口縁部～胴部上半の2カ所の対称的な位置に不整形の黒変部がみられる。ともに8世紀前半に比定できる。住居の埋土を切り込んで該期の小穴があった可能性がある。

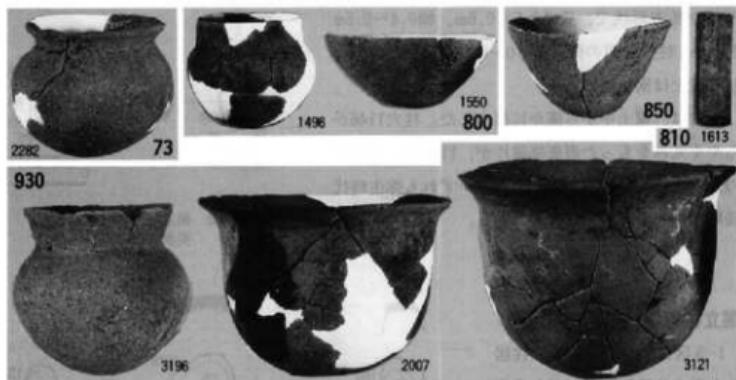


図 90 堪穴住居・掘立柱建物出土遺物



図 91 掘立柱建物
1040(北から)

III-2-b 掘立柱建物

1間×1間の建物1棟、1間×2間の建物棟を復原した。柱穴からの出土遺物は総じて少ないことから、先述のように時期の決定に不明確なところが多い。以下、個々について報告する。柱間計測値については、各実測図に付す（単位はcm）。

掘立柱建物 1040 (図91・92)

I-49区に位置する。歎の痕跡かと思われる溝と重複し、それより古い。1間×1間の掘立柱建物で、長軸が東西方向をとる。柱穴はいずれも、平面形が不整な長方形状で、長さ0.5~0.6m、幅0.4~0.5mを測る。柱穴底面の標高は8.0~8.9mの位置にある。柱穴覆土は褐色土である。

遺物は、覆土中から僅かに出土した。柱穴1146からやや丸みをもった壺底部破片が、1147からは突尖のある壺頸部小破片が出土した。いずれも弥生時代後期末かと考えられる資料である。

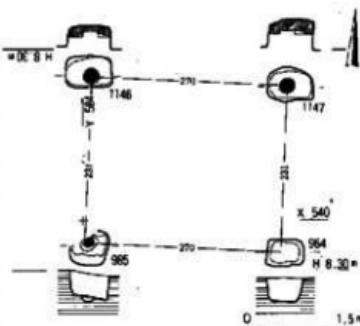


図92 掘立柱建物1040
実測図(1:80)

掘立柱建物 295 (図93・96)

I-3区に位置する。竪穴住居1と掘立柱建物310、470と重複する。1間×2間の建物である。調査区外に延びる。他との比較からこれ以上の規模になる可能性は少ないものと考える。建物の平面形は長方形となり、長軸をほぼ東西からやや北向きにとる。建物長軸長5.2m、短軸長3.0mを測る。柱穴の平面形は不整な円形もしくは長椭円形である。径は大きいもので0.8~

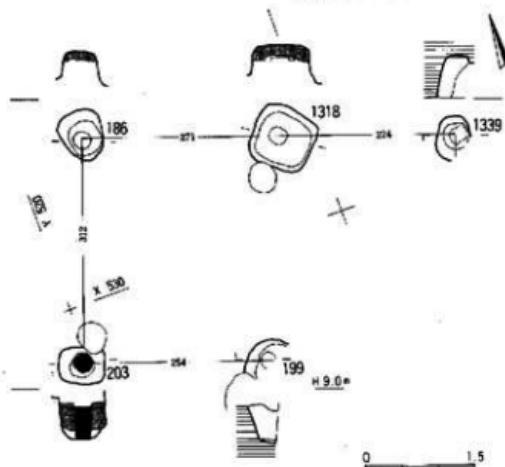


図93 掘立柱建物295実測図 (1:80)

1m、小さいもので0.6mほどである。柱穴底面は、標高8.4~8.6mの位置にあり、1基を除いてほぼ同じ高さにある。柱穴覆土は黒褐色が主である。

遺物は、柱穴覆土から弥生時代中期の土器の破片がわずかに出土した

掘立柱建物 310 (図94)

1-3区に位置する。豊穴住居1、掘立柱建物470と重複し、前者より新しく後者より古い。半ば以上が調査区外に位置し、調査では隅柱からの1間分を確認したのみである。他遺構との比較からいえば、桁方向を西南方向にとる1間×2間の建物の可能性がある。柱穴の平面形は隅丸の長方形状を呈し、その長さ0.4~0.6mを測る。その覆土は暗茶褐色土で、いずれにも土層断面で柱痕跡が観察された。柱穴底面の標高は、8.1~8.4mを測り、上下の変化が大きい。

遺物は柱穴覆土から散漫に出土した。弥生土器細片である。

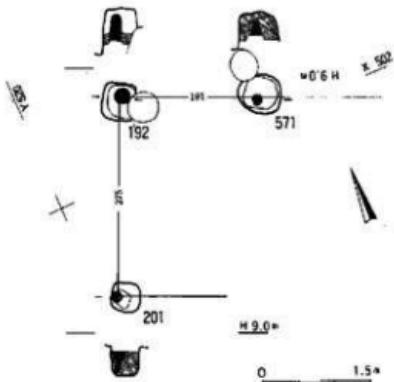


図 94 掘立柱建物310
実測図 (1:80)

掘立柱建物 400 (図95)

1-14区に位置する。掘立柱建物305と重複し、それより新しい。1間×2間の建物である。桁行はほぼ東西方向に沿う。柱穴の平面形は不整な円形状でその径0.5~0.6mを測る。その覆土は黒褐色土を主とする。柱痕跡が半数以上の柱穴で観察された。柱穴底面の標高は、8.2~8.4mの位置にある。

建物の方向規模は、上述の建物320と方向、柱の構成が一致する。

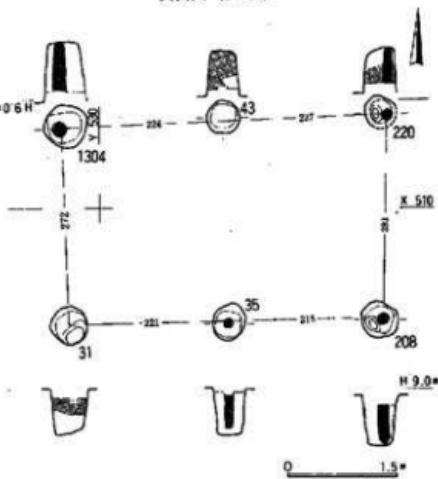


図 95 掘立柱建物400実測図 (1:80)



図 96 挖立柱建物295
(北から)



図 97 挖立柱建物610
(東から)

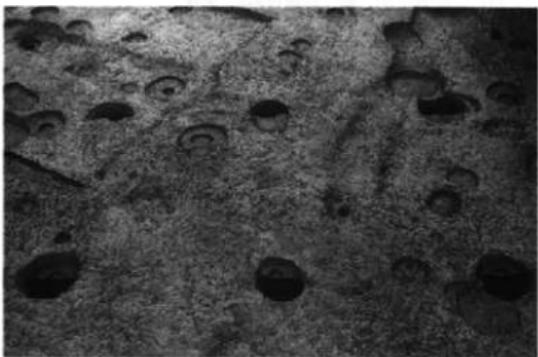
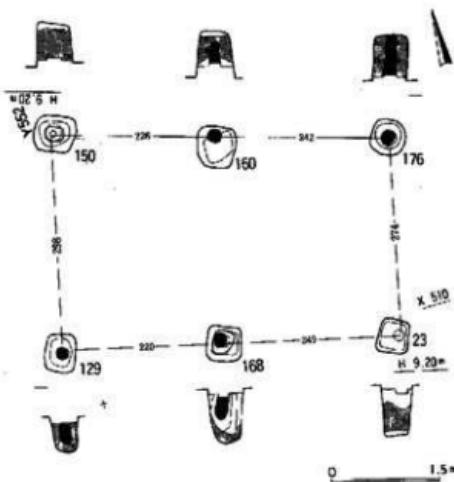


図 98 挖立柱建物620
(東から)

掘立柱建物 600 (図99)

I-13区に位置し、竪穴住居152と重複して、それよりも古い。1間×2間の掘立柱建物で、桁行を西よりやや北に振っている建物である。柱穴は、平面形が不整な隅丸の長方形状、方形状または、不整な円形状を呈す。柱穴150が最も大きく、長さ0.6m、幅0.5mの隅丸長方形状を呈す。柱穴166は、別に1基の柱穴167と重複しており、これが本建物の柱穴である可能性も残されている。柱穴底面は、標高8.3mを前後する。柱穴覆土は黒褐色土が主で、半分以上に柱痕跡が残る。



掘立柱建物 610 (図97・100)

I-24区に位置する。1間×2間の掘立柱建物で、柱穴の1基はほとんど調査区外にある。桁行を東西方向とする建物である。柱穴は、平面形が不整な隅丸の長方形状、方形状または、不整な円形状を呈す。柱穴594が最も大きく、長さ0.6m、幅0.5mの不整な梢円形状を呈す。柱穴底面は、標高8.5～8.7mの位置にある。確認面からの深さは、浅いものでは0.1mほどである。遺物は、中期の弥生土器片が出土している。

図 99 掘立柱建物600実測図 (1:80)

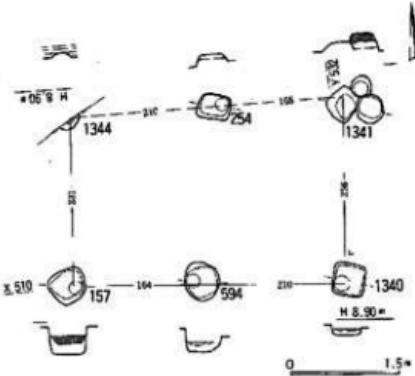


図 100 掘立柱建物610実測図 (1:80)

掘立柱建物 620 (図98・101)

I-24区に位置し、竪穴住居250、掘立柱建物640と重複している。前者との関係は調査中にはつかむことが出来なかった。後者については、掘立柱建物640の柱穴306と本住居の柱穴298が重複して、298が新しい。1間×2間の掘立柱建物であり、桁行を北よりやや西に振っている建物である。柱穴は、平面形が不整な隅丸の長方形状、または、不整な梢円形状を呈す。柱穴288が最も大きく、長さ0.7m、幅0.5mの隅丸の長方形状を呈す。柱穴底面は、標高8.2～8.3mの位置にある。柱穴覆土は黒褐色土が主で、土層断面に柱痕跡が観察されるものは少ない。

遺物は、覆土中から弥生土器の小破片が出土しているほかに、柱穴284から須恵器壺細片が出土しているが、他遺構との比較からすると、混じり込みと考える。

掘立柱建物 630 (図102・105)

I-25区に位置し、遺構53と重複して想定される柱穴の一つを欠く。それとの前後関係は、調査の過程では掴むことができなかつた。1間×2間と考えられる掘立柱建物であり、桁行を北よりやや西に振っている建物である。柱穴は、平面形が不整な隅丸の方形状または、不整な円形状を呈す。柱穴319が最も大きく、長さ0.7m、幅0.6mの梢円形状を呈す。柱穴底面は、標高8.0～8.2mの位置にある。柱

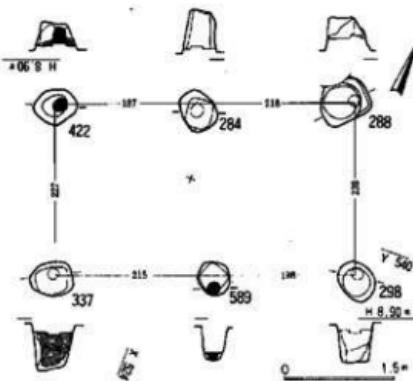


図 101 掘立柱建物620実測図 (1:80)

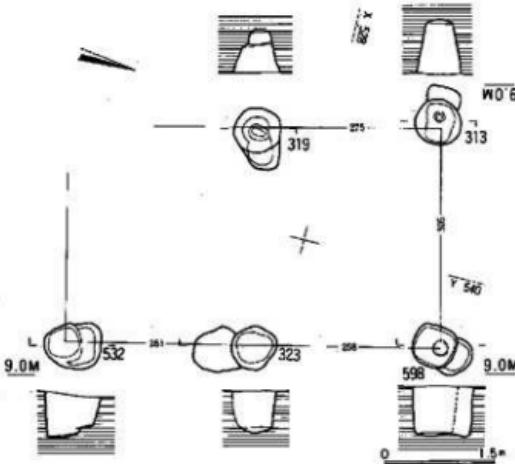


図 102 掘立柱建物630実測図 (1:80)

穴覆土は黒褐色土が主で、土層断面に柱痕跡が観察されるものは少ない。

遺物は、覆土中から散漫に出土した。柱穴319から、弥生時代中期の壺形土器、丹塗の土器片が出土している。他の柱穴からも丹塗の土器小片が出土している。

掘立柱建物 640 (図103・106)

I-25区に位置する。上記のとおり掘立柱建物620と重複している。北側が調査区外になり、確認した柱穴は隅柱から伸びる北への1間分と、西への2間分である。他との比較から、1間×2間の掘立柱建物と考えられ、桁行をほぼ東西方向にもつ建物である。柱穴は、平面形が不整な円形状を呈す。柱穴303が最も大きく、径0.7mを測る。柱穴底面は、596を除き標高8.2～8.3mの位置にある。柱穴596底面は標高8.5mの位置にある。

穴覆土は黒褐色土が主で、土層断面の半ばに柱痕跡がある。遺物は、覆土中から散漫に出土した。各柱穴から弥生時代中期の土器片が出土したほかに、柱穴306から須恵器細片が出土している。

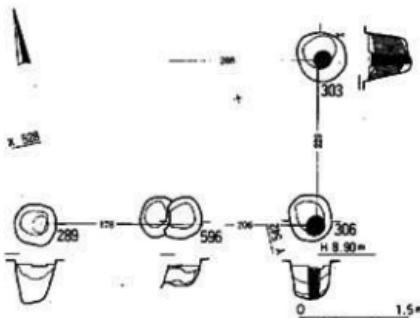


図 103 掘立柱建物640実測図 (1:80)

掘立柱建物 641 (図104・107)

掘立柱建物642とI-34区の同位置で検出した。想定される北半部は調査区外に位置する。確認した柱穴は隅柱から伸びる北への1間分と、西への2間分である。他との比較から、1間×2間の掘立柱建物と考えられ、桁行を西よりやや北に振る建物である。柱穴は、平面形が不整な方形状、長方形状を呈す。柱穴303が最も大きく、長さ0.6m、幅0.4mの長方形状である。柱穴底面は、標高8.1～8.4mの位置となり、上下の差が大きい。柱穴覆土は黒褐色土を主とする。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土したが、弥生土器とみられる体部の細片でそれ以上の詳細については不明である。

掘立柱建物 642 (図104・107)

上述のとおり、掘立柱建物641とI-34区の同位置で検出した。想定される北半部は調査区外に位置する。確認した柱穴は隅柱から延びる北と西への1間分である。柱筋をほぼ東西にとする建物である。柱穴は、平面形が不整な円形状、梢円形状を呈す。柱穴311が最も大きく、長さ0.6m、幅0.4mの長方形状である。柱穴底面は、標高8.2～8.5mの位置となり、上下の差が大きい。柱穴覆土は黒褐色土を主とする。

遺物は、柱穴597から、僅かに丸みをもった底部の弥生土器破片が出土したほかに、中期の弥生土器片が出土している。

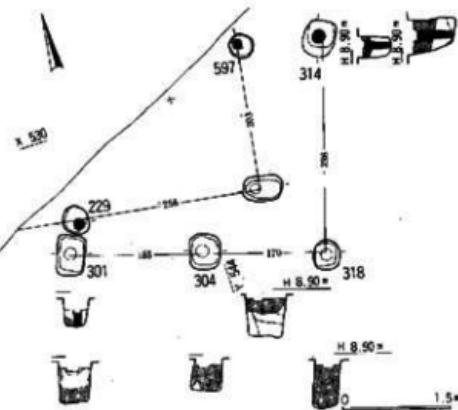


図 104 掘立柱建物641・642実測図 (1:80)

掘立柱建物 750 (図108・115)

掘立柱建物755とI-36区の同位置で検出した。溝380、木棺墓555、掘立柱建物625と重複して、いずれよりも古い。また、柱穴住居280と重複して、それよりも新しい可能性がある。1間×2間の掘立柱建物であり、桁行を東よりやや北に振っている建物である。北東部の隅柱は造構1249が該当するが、溝380との重複により削られて、底面近くが遺存するのみである。柱穴は、平面形が不整な隅丸の方形または、不整な円形状を呈す。柱穴537が最も大きく、径0.8mを測る円形状を呈す。柱穴底面は、標高8.0～8.3mの位置にあり、高低の差が顕著である。柱穴覆土は黒褐色土が主で、土層断面に柱痕跡が観察されるものが多い。

遺物は、覆土中から散漫に出土した。中期の弥生土器破片が殆どである。

掘立柱建物 755 (図108)

前述したとおり掘立柱建物750とI-36区の同位置で検出した。溝533と重複してそれよりも古い。1間×2間の掘立柱建物であると考えられる。桁行を掘立柱建物750よりやや南に振っている建物である。想定される柱穴のひとつは、溝380の位置に重なり、確認出来なかった。柱穴は、平面形が不整な円形状または、不整な梢円形状を呈す。柱穴537が最も大きく、平面形

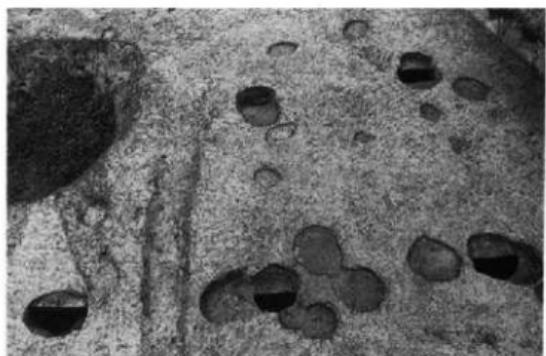


図 105 挖立柱建物630
(東から)



図 106 挖立柱建物640
(南から)



図 107 挖立柱建物641
・642 (南から)

が長さ0.8m、幅0.7mを測る橢円形状となる。また、柱穴943は、他より目立って小さく、平面形が径0.4mの円形状を呈する。柱穴底面は、標高8.0~8.2mの位置にある。柱穴覆土は黒褐色土が主で、土層断面に柱痕跡が観察されるものが多い。

遺物は、覆土中から散漫に出土した。中期の弥生土器破片が殆どである。

掘立柱建物 870

(図109)

I-16区に位置する。掘立柱建物770、竪穴住居370と重複し、いずれよりも古い。想定される南半部は調査区外に位置す

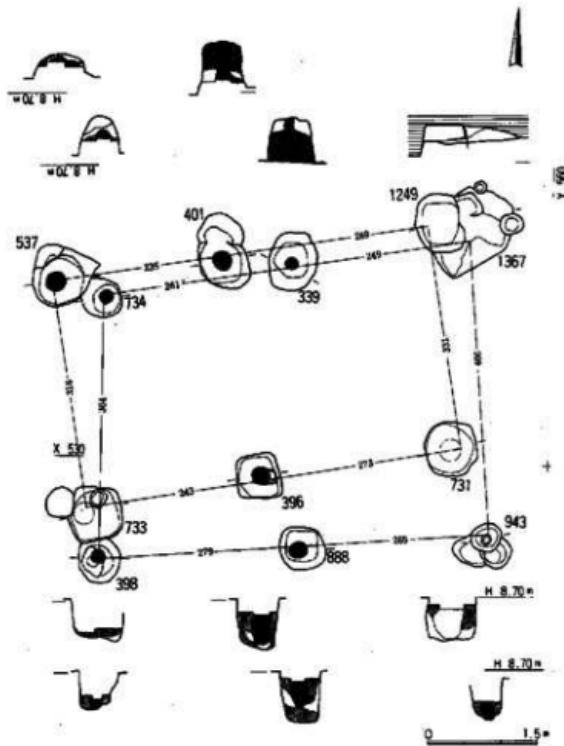


図 108 掘立柱建物750・755実測図 (1:80)

る。確認した柱穴は1間×1間分であるが、他との比較から、調査区外に延びる1間×2間の掘立柱建物の可能性も残る。1間×2間の建物であるとすれば、桁行を北よりやや西に振る建物である。柱穴は、平面形が不整な長方形、橢円形状、を呈す。柱穴746が最も大きく、長さ0.9m、幅0.6mの橢円形状である。柱穴底面は、標高8.0~8.3mの位置となり、高低の差が大きい。柱穴覆土は黒褐色土を主とする。土層断面での柱痕跡は不明瞭であった。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土した。弥生時代中期の菱形土器口縁部破片が出土している。

掘立柱建物 1090 (図110)

I-2区に位置する。整穴住居51と重複し、それより古い。1間×2間の建物である。桁行は北東の方向にとる。柱穴の平面形は不整な円形または橢円形でその径あるいは長さ0.6~0.9mを測る。柱穴底面の標高は、8.5~8.8mの位置にあり、高低の変化が著しい。遺物は、覆土中から散漫に出土した。中期の弥生土器小破片が出土している。

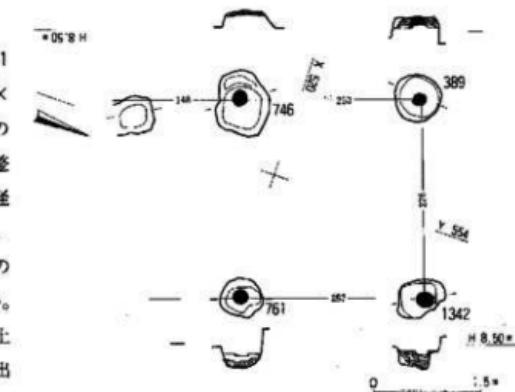


図 109 掘立柱建物870実測図 (1:80)

掘立柱建物 1100

(図111-116)

I-49区に位置する。擾乱により一部を欠く。想定される柱穴の一部が調査区外に位置する。1間×2間の掘立柱建物であることが推定できる。桁行をほほ東西方に向とする建物である。柱穴は、平面形が不整な長方形状、あるいは橢円

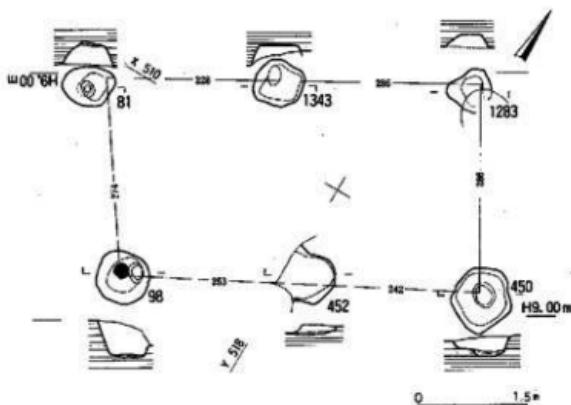


図 110 掘立柱建物1090実測図 (1:80)

形状を呈す。柱穴1158が最も大きく、長さ0.6m、幅0.5mの橢円形である。柱穴底面は、標高7.7~7.9mの位置となり、高低の差が大きい。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土した。弥生時代後期末の壺形土器頸部破片が出土している。

掘立柱建物 1110 (図112)

I-48区に位置する。溝940と重複し、それより古い。1間×2間の建物である。桁行東やや北に振れる。柱穴の平面形は不整な椭円形状あるいは隅丸の長方形状を呈し、長さが0.7~1.0mを測る。柱穴底面の標高は、8.2~8.3mの位置にある。

遺物は覆土柱から散漫に出土した。弥生時代中期の壺形土器小破片が含まれるものであろうか。

掘立柱建物 305 (図113)

I-4区に位置する。掘立柱建物320、400と重複し、いずれよりも古い。

2間×2間の掘立柱建物である。建物の規模は、東西軸方向に4.8m、南北軸方向に4.1mを測る。建物東西軸は東より北に振った方向にある。柱穴の平面形は隅丸の長方形または、不整な円形状を呈す。そのあるいは長さは、0.5~0.7mを測る。柱穴底面の標高は、8.4~8.9mまであり、高度差が大きい。遺物は造構確認時に須恵器坏等の小破

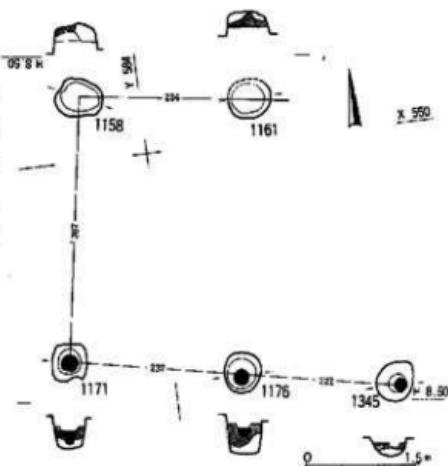


図 111 掘立柱建物1110実測図 (1:80)

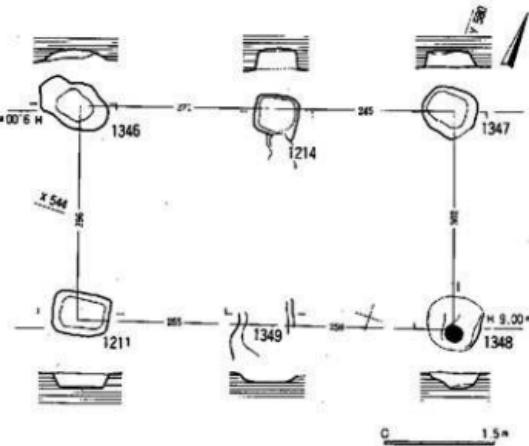


図 112 掘立柱建物1110実測図 (1:80)

片が出土しているが、表土からの混じりこみの可能性も考えられる。

掘立柱建物 850 (図114・118)

I-26区に位置する。竪穴住居280、290と重複する。前後関係は明確でない。2間×2間の掘立柱建物で、桁行を東よりやや北に振る建物である。柱穴は、平面形が不整な長方形あるいは、楕円形状を呈す。柱穴206が最も大きく、長さ0.5m、幅0.4mの楕円形状である。柱穴底面は、標高8.0~8.4mの位置となり、高低の差が大きい。柱穴覆土は板暗赤褐色土を主とする。土層断面での柱痕跡は半ばの柱穴で確認できた。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土した。弥生時代後期の坏形土器破片が出土している。

掘立柱建物 625 (図117・119)

I-26区に位置する。2間×3間の掘立柱建物である。桁行の方向を北よりやや西に振る建物である。平面上の規模は、桁行4.8m、梁行3.1mを測る。柱穴は、平面形が円形状を呈し、径0.2~0.3mほどの規模である。柱穴覆土は黒褐色土を主とし、柱痕跡の観察できるものは少ない。

遺物は、少量が覆土柱から出土した。いずれも弥生土器の小破片である。ここでは、柱穴の

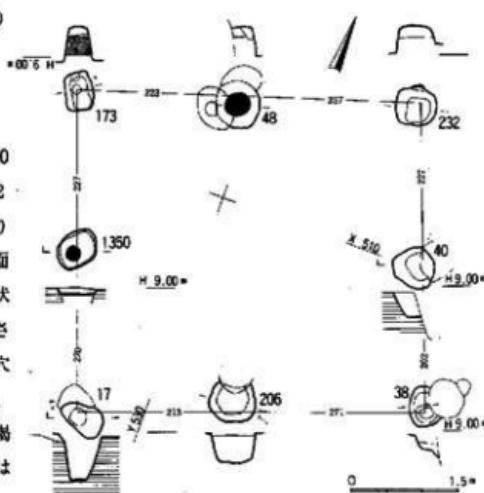


図 113 掘立柱建物305実測図 (1:80)

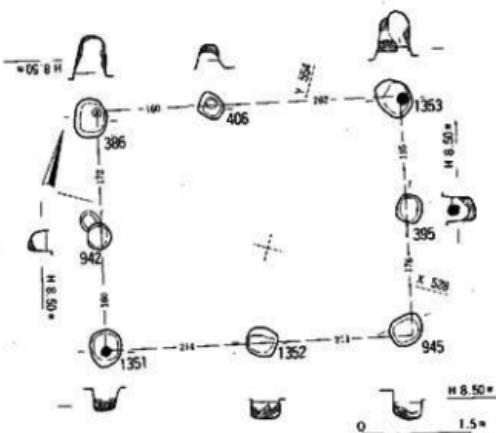


図 114 掘立柱建物850実測図 (1:80)

規模と構成、覆土が極柔らかいという調査時の所見により、後の時代に属する可能性もある。

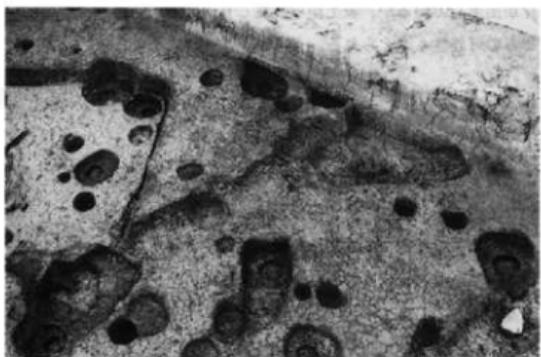


図 115 挖立柱建物750
(南から)

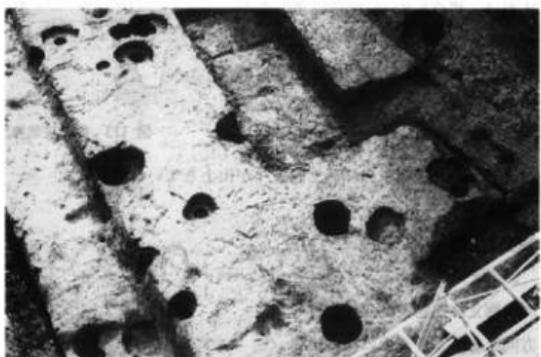


図 116 挖立柱建物1100
(東から)

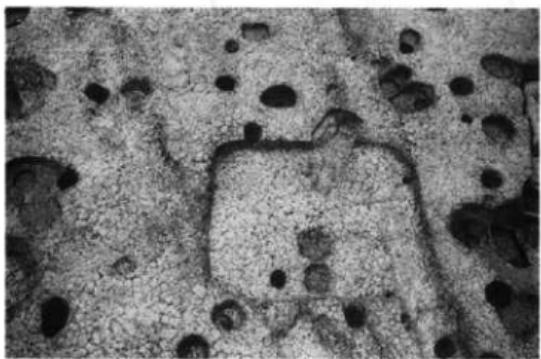


図 117 挖立柱建物625
(東から)

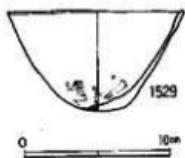


図 118 捜立柱建物
850出土遺物実測図
(1:4)

掘立柱建物 1120 (図120)

I-2 区に位置する。竪穴住居51、溝102と重複する。1間×2間の建物である。調査時の所見からすると後者よりは新しいが、前者との関係は判断できなかった。2間×5間の竪柱建物である。想定される柱穴位置が、竪穴住居51内炉113と重複するが、調査時それとわかる掘り込み等は確認することができなかった。桁行を北東方向にとる建物である。平面形は長方形を呈す。柱穴平面形は不整な円形状、あるいは梢円形状を呈し、径または長さが0.4~0.6mを測る。柱穴底面の標高は、8.3~8.7mの位置にある。

遺物は覆土柱から散漫に出土した。赤生土器の小破片が殆どで、時期の判別できる資料は中期に属するものである。

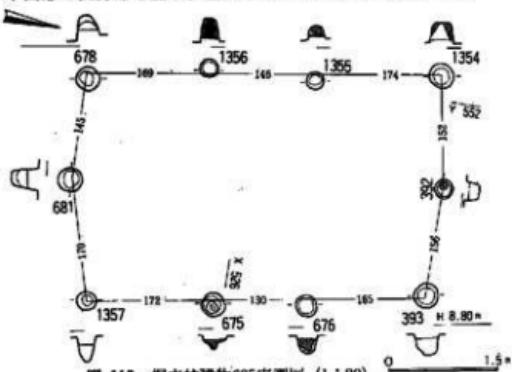


図 119 捜立柱建物625実測図 (1:80)

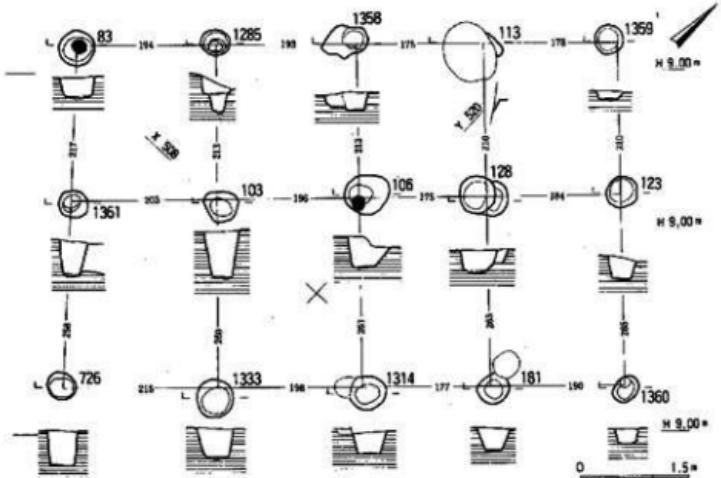


図 120 捜立柱建物1120実測図 (1:80)

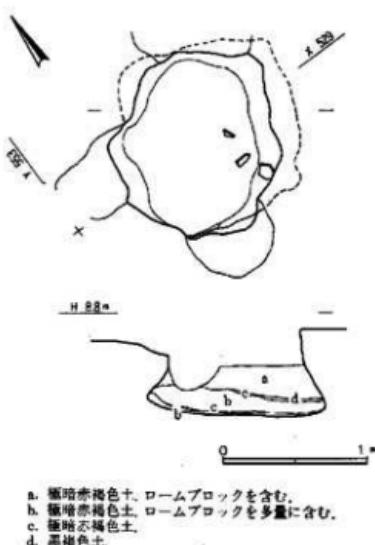
III-2-c 袋状竪穴

袋状竪穴 805 (図121・122)

I-26区に位置する。竪穴住居280、掘立柱建物750、755と重複しそのいずれよりも古い。開口部の平面形が不整な梢円形状を、底面は不整な方形状を呈す。後者の辺長1.1mを測る。断面形は台形状を呈し、その覆土はロームブロックを含んだ極暗赤褐色土で、黒色土の薄層が挟まれている。天井部の崩落した様子はなく、人為的な埋め立てが考えられる。

遺物は覆土中から散漫に出土した。大破片の弥生土器がある。

那珂13次地点遺跡においては、他に同種の遺構を検出できなかった。



- a. 極暗赤褐色土。ロームブロックを含む。
- b. 極暗赤褐色土。ロームブロックを多量に含む。
- c. 黒褐色土。
- d. 黑褐色土。

III-2-d 井戸

図121 袋状竪穴805 実測図 (1:40)

円筒状の掘型をもった井戸は、ここで報告する4基のみである。その位置は、I-14・24区の、径10mほどの範囲内に集中している。

井戸 228 (図123・125)

I-14区に位置する。一部を擾乱により削られている。平面形は不整な円形状を呈し、その径1.2mを測る。断面形は、底面が僅かに狭いが、ほとんど円筒状を呈す。底面の標高6.4mを測るが、それは確認面から2.7mの位置にある。地山八女粘土の上面は標高6.9mの位置にある。

覆土は、黒褐色粘質土である。

遺物は、覆土中から出土したほかに底面近くの覆土中から、一括投棄ものか土層の埋め立て時の土の傾斜に沿うようにして弥生土器が出土した。いくつかの大破片となっているが、いずれも完形に復原できる資料ではない。



図 122 袋状凹穴805
(西から)



図 123 井戸228
(西から)

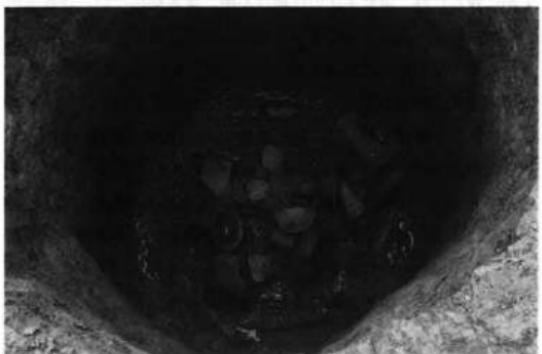


図 124 井戸255
(東から)

井戸228出土遺物（図126）

出土土器には、弥生土器の壺形土器・壺形土器・器台形土器などのほかに、須恵器の壺がある。

481は壺形土器で、ほぼ半裁された破片である。「く」字形に屈曲する口縁部に、肩が張った戴頭卵形の胴部がつき、底部は凸レンズ状の不安定な平底である。口縁部付近は刷毛目調整の後に横方向の撫で調整、胴部外面は刷毛目調整、内面は刷毛目調整の後に不定方向の撫で調整を施す。刷毛目には精粗があり、2種類以上の板状工具で刷毛目調整を行った可能性が考えられる。茶赤色を呈し、胴部下半の外面には不整形の黒変部がみられる。485と3110は、胴部下半のひらき具合から、壺形土器の底部破片と考えた。ともに、不安定な凸レンズ底である。外面は草本類植物の茎を束ねたような工具で搔き上げたような調整痕が残る。485は内面を鎧状の工具で削るように強く撫で調整し、3110はかなり乱雑な撫で調整を行う。485は淡黒灰色。3110は暗灰褐色ないし暗灰白色を呈し、外底近くには黒変部がみられる。

3109は高壺形土器の壺部の破片である。小破片のため、口径を復元することはできない。内外面ともに、器面が荒れ、

調整手法の仔細を観察することはできない。胎土には微細砂粒が多く含まれ、淡茶褐色を呈する。

3108は器台形土器の上半部1/5ほどの破片である。器面の荒れが進み、外面に指頭圧痕がわずかに残る以外、調整手法の仔細は不明。淡黄褐色ないし淡黄灰色を呈する。

482と483は、胴部下半の膨らみ具合から、壺形土器形土器の底部と考えた。ともに凸レンズ状の不安定な平底である。482は内外面ともに刷毛目調整の後に撫で調整で仕上げる。外面は暗褐色で、内面は黒変している。483は丸底に近い底部で、外面は丁寧な撫で調整、内面は鎧状の工具で搔搔したの後に撫で調整で仕上げる。外面は淡黄灰色、内面は淡黄褐色を呈する。

以上の土器は、井戸228に本来ともなうと考えられるもので、いずれも弥生時代後期後葉に比定できる。この他、3106は須恵器で、短頸壺の胴部の1/3ほどの破片である。肩が張り、最大径部に2条の凹線をめぐらす。外面は全面をカキメ調整し、内面は横方向の撫で調整で仕上げる。胎土は微細・細砂粒を少量含むのみである。灰色を呈し、焼成は良好である。また、図示していないが、須恵器の壺身の小破片が数点ある。これらは、後世、周辺から造構内に流れ込んだものと考えた。

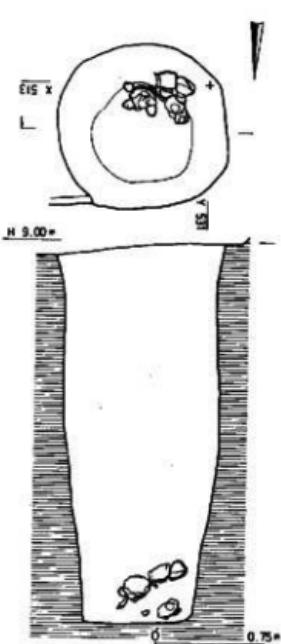


図 125 井戸228実測図 (1:40)

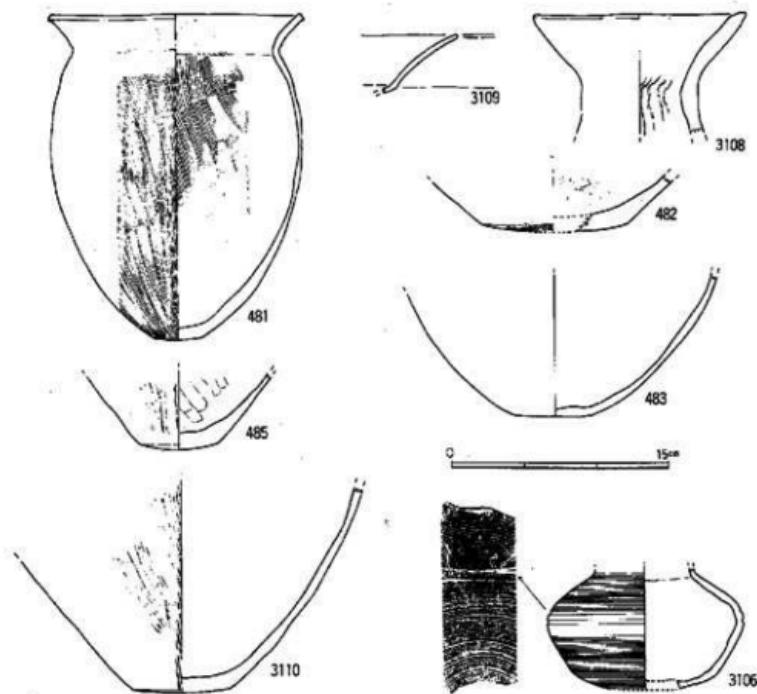


図 126 井戸228出土遺物実測図 (1:4)

井戸 255 (図124-127)

I-24区に位置する。溝245と重複してそれより古い。平面形は不整な円形状を呈し、その径1.0mを測る。底面が確認面の部分と同じ広さをもち、断面形は、何んだ円筒状をなす。底面の標高5.8mを測るが、それは確認面から3.0mの位置にある。地山八女粘土の上面は標高6.9mの位置にある。

覆土は、黒褐色粘土質である。

遺物は、覆土中から出土したほかに中位の覆土中から、平坦な面に一括投棄した状態で共生土器が出た。完形で完存する資料を含んでいる。地山が八女粘土になる高さ以下覆土は崩落したと思われる白色粘土に黒色土が混じる状態となり、遺物は殆ど含まれていない。

井戸255 出土遺物 (図128-135)

出土土器には、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器・器台形土器・ミニチュア土器などがある。

552は細長い頸部をもつ壺形土器で、口縁部周辺を欠損する。なで肩の胴部に、凸レンズ状の平底がつく。外面は、頸部が縱方向の範磨き調整、胴部も横あるいは斜方向の範磨き調整で仕上げる。また、肩部には暗文が施される。内面は撫で調整。淡橙褐色を呈し、肩部と胴部下半の対称的な位置に黒変部がみられる。

554は小型の鉢形土器で、口縁部の一部を欠く。器面は撫で調整が施されたとみられるが、荒れが著しく仔細は不明。内面に板状工具の小凹部による圧痕が残る。外面は黄灰色ないし褐灰色を呈し、内面は黒変している。3097は脚付き鉢形土器と思われる。脚部の裾を欠く。焼成前、脚裾近くの4カ所に小孔を穿孔する。外面は縱方向の範磨き調整を施す。内面は荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。胎土には微細砂粒がわずかに含まれるのみで、精良粘土を用いている。色調は淡茶赤色を呈する。

3100はミニチュア土器であるが、胴部上半を欠き、全体の形状は明かでない。蓋形のものとも考えられる。内外面ともに撫で調整で仕上げられる。胎土には細砂粒が多く含まれ、暗褐色を呈する。

3096・3102・561・566・548・564は高壺形土器である。3069は壺部の1/4ほどの破片である。膨らみのある壺部が中位で緩やかに反転する。器面はかなり荒れているが、外面に丁寧な撫で調整、内面に範磨き調整の痕跡が観察される。肌色に近い淡茶灰色を呈し、内面には黒変部がみられる。3102は壺部の1/10以下の破片で、口径は不確実。短い壺部上半が段をつけて反転する。壺部下半に暗文がわずかに残るが、器面の荒れが著しく、他の調整手法の仔細は明かでない。色調は淡橙茶色である。561も3102と同じく、壺部上半が中位で反転するが、反転度は弱く直線的に伸びる。色調は淡茶黄色であるが、壺部上半の器表面は淡茶赤色を呈し、表面の粘土の質も違うことから化粧掛けが施された可能性を考えた。566は脚柱部の破片である。内外面ともに器面の荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。淡黄茶色を呈する。548も脚柱部の破片で、外面に暗文を意識したような範磨き調整を施し、内面は撫で調整で仕上げる。焼成前に脚部近くの3カ所に小孔を穿孔する。胎土に粗・細砂粒を小量含むが、粘土自体は精良なものである。淡灰黄色を呈する。564はヒズミが著しい。外面は器面が荒れ、部分的に刷毛目調整の痕跡が残る。内面は刷毛目調整の後に撫

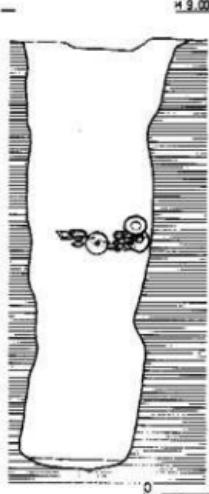
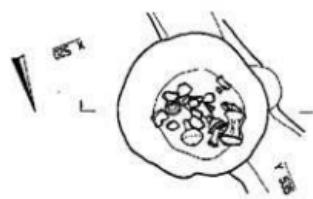


図 127 井戸255実測図 (1:40)

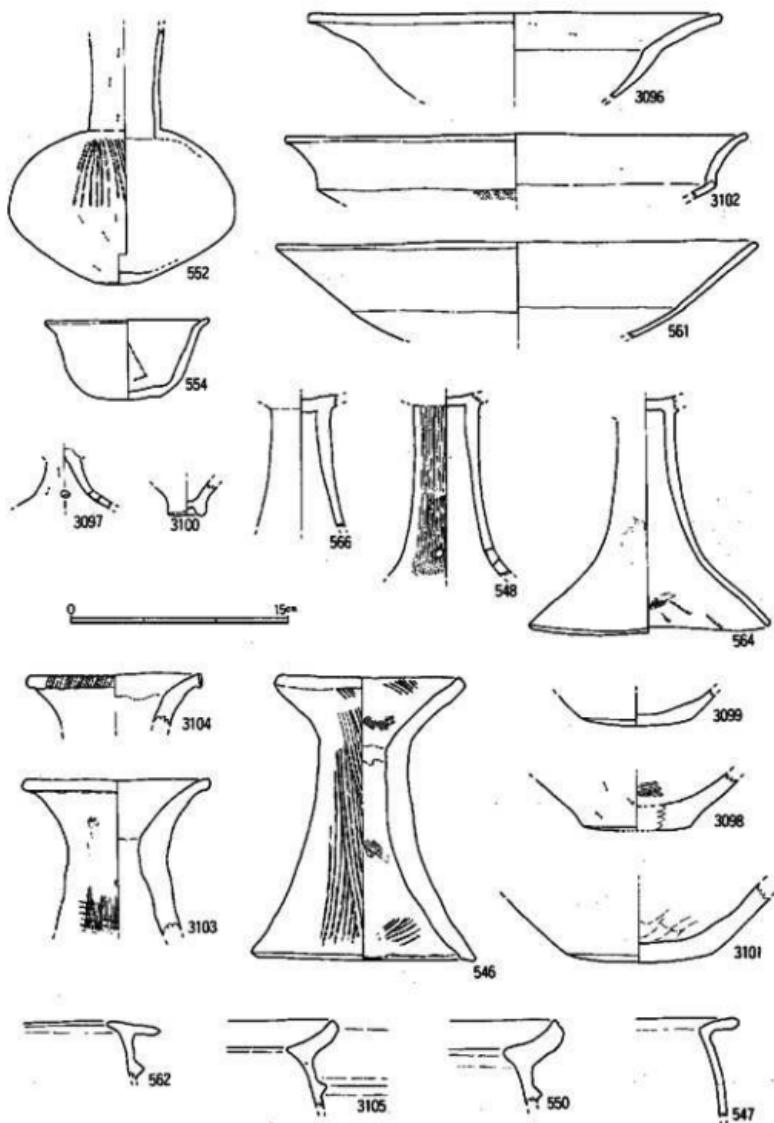


図 128 井戸255出土遺物実測図 (1:4)

で調整で仕上げる。色調は赤茶色で、脚端部は部分的に黒変する。

3104・3103・546は器台形土器である。3104は上端部付近の1/3ほどの破片である。端部には棒状工具を押捺して刻み目を施す。外面は撫で調整、内面は刷毛目調整の後に横方向の撫で調整を行う。淡黄土色を呈するが、端部は2次的な火を受けて赤変する。3103は下半部を欠損する2/3ほどの破片である。外面は叩き調整の後に刷毛目調整、内面は刷毛目調整の後に指頭による撫で調整を施す。やや赤味を帯びた淡黄褐色を呈する。546はほぼ完形である。外面は木目の荒い刷毛目調整、内面は刷毛目調整の後に撫で調整を施す。淡褐色を呈し、下端部付近は2次的な火を受けているために赤変する。

3099・3098・3101は凸レンズ状の底部の破片で、3098・3101は胴部下半のひらき具合から壺形土器と考えた。3099の外面は荒れが著しいが、内面は撫で調整が施される。3098は外面を乱雜に荒磨き調整し、内面には刷毛目調整を行う。3101の外面は丁寧な撫で調整、内面は坏状工具による強い撫で調整を施す。

以上の土器は、井戸255に本来ともなうと考えられる。3096や3102など若干古い要素をもつが、弥生時代後期後葉に比定できる。この他に、周辺から混入したと思われる562・3105・550・547など弥生時代中期後葉～末の壺形土器がある。ほとんど小破片で出土した。

井戸 465 (図129-134)

I-14区に位置する。竪穴住居215、480、掘立柱建物570と重複し、そのいずれよりも古い。平面形は不整な梢円形状を呈し、その長さ1.4m、幅1.1mを測る。底面の標高は5.6mを測るが、それは確認面から3.2mの位置にある。地山八女粘土の上面は標高6.7mの位置にある。側面形は、上部は円筒状を呈するが、八女粘土の上面から下の側壁は抉れ、最も広い位置では1.5m程の広がりとなる。その位置から下は次第にすばまり底面となる。

遺物は覆土中から出土したほかに、一括投棄したような状態で弥生土器が底面に横たわった状態で出土した。完形の資料が含まれる。

井戸465 出土遺物 (図130-135)

出土土器には壺形土器が多い。746は小型の無頸の壺

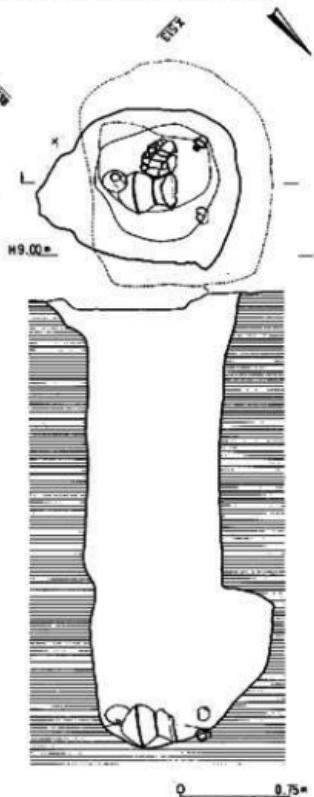


図 129 井戸465実測図 (1:40)

形土器で、口縁部の一部を欠く。直口縁で、ラグビーボール状の胴部に、上げ底状の小さな平底がつく。器壁はきわめて薄く、つくりは丁寧。外面は上半を木目の細かい刷毛目調整、下半を丁寧に砲削り調整する。内面は撫で調整で仕上げられ、内底付近に箒状工具の圧痕が残る。胎土には精良粘土が用いられ、砂粒をほとんど含まない。色調は肌色に近い淡褐色で、胴部外面上半に不整形の黒変部が2カ所みられる。743は細長い頭部をもつ壺形土器と考えられる。最大径が中位にある偏球形の胴部に、小さな凸レンズ状の不安定な平底がつく。外面は上半が斜方向、中位が横方向の研磨き調整。内面は撫で調整、肩部に部分的に指頭圧痕が残る。橙褐色を呈する。

745・3109・742は、頭部が朝顔状にひらく複合口縁の壺形土器である。745は小型品で、外面を刷毛目調整の後に縦方向の箒磨き調整、内面を横方向の撫で調整する。橙褐色を呈する。3109は口縁部の1/7ほどの破片である。やや不確実ではあるが、推定口径は24cm。口縁部は横方向の撫で調整、頭部は刷毛目調整が施される。淡褐色ないし淡黄茶色を呈する。742は口縁部から頸部の1/3ほどを欠く。球形に近い胴部に凸レンズ状の不安定な平底がつく。胴部にめぐる断面台形の凸帯には、板状工具の小口部を押捺して刻み目がつけられる。口縁部付近は横方向の撫で調整、頸胴部は木目の荒い刷毛目調整が施され、凸帯付近は指頭による撫で調整を行う。明褐色ないし橙褐色を呈する。3108も壺形土器形土器と思われる。

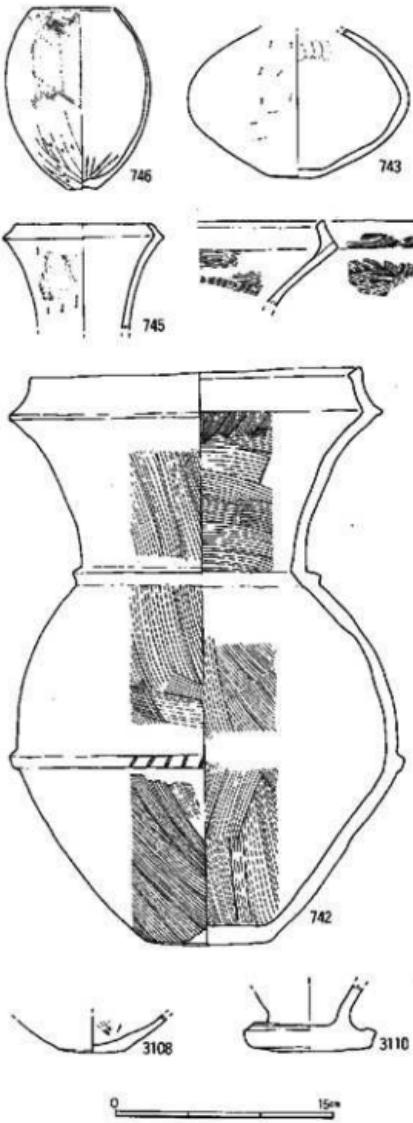


図 130 井戸A-465出土遺物実測図 (1:4)

れる底部の破片である。凸レンズ状の平底で、内外面は丁寧に撫で調整され、内底面には箆状工具痕が放射状に残る。淡茶赤色を呈する。

以上はいずれも弥生時代後期後葉に比定でき、井戸465に本来ともなうと考えられる。この他、周辺から混入したと思われる弥生時代中期後葉～末の壺形土器・高壺形土器や、古墳時代後期6世紀後半～7世紀前半の須恵器の小破片がある。その中で、堅穴住居480号住居から混じり込んだと思われる3110は、須恵器のすり鉢である。内外面ともに撫で調整で仕上げられる。細砂粒を多く含み、色調は黒灰色。

井戸 1080 (図131)

I-24区に位置する。溝260と重複しそれよりも古い。平面形は円形であり、その径0.8mを測る。底面も同様の形状、規模である。ために側面形は円筒状を呈す。底面の標高は6.8mを測るが、それは確認面から2.0mの位置にある。地山八女粘土には到っていない。

覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は、覆土中から出土したほかに底面近くの覆土中から、上半部を欠く弥生土器が置かれたような状態で出土している。

井戸1080 出土遺物 (図132-135)

出土遺物は他の井戸と比べ、破片のものがほとんどで、数量も少ない。3045は二重口縁部をもつ壺形土器である。1/2～2/3の口頸部の破片。3045は器面の荒れが進み、頸部外面に縱方向の荒磨き調整痕がみられるにすぎない。淡茶黄色を呈する。

2161・2112・3046は壺形土器で、胴部上半を欠く破片である。

2161は胴部下半を非常に丁寧な手持ち箆削り調整し、内面は撫で調整を施す。淡茶褐色ないし淡褐色を呈する。2112は最大径が中位以下にある下膨らみの胴部で、わずかに凹む平底がつく。外面は下半を斜方向、中位を横方向、上半を縱方向の荒磨き調整する。内面は丁寧な撫で調整で仕上げる。淡褐色。肩部の対象的な位置に小さな不整形の黒変部がみられる。ともに長頸をもつ壺形土器と考えられる。3047はわずかに凸レンズ状の平底が残る。

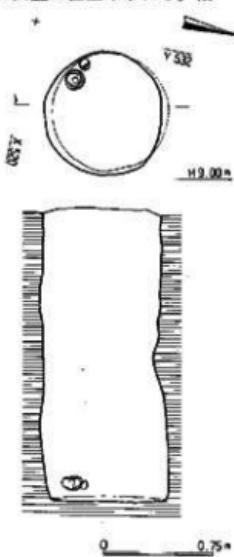


図 131 井戸1080実測図 (1:80)

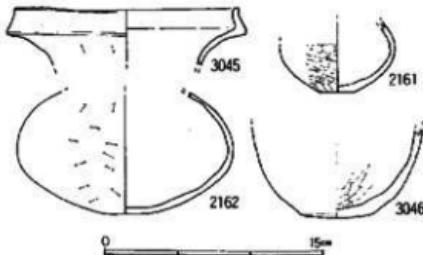


図 132 井戸1080出土遺物実測図 (1:4)

り、丸みをもつ脚部がつく。内外面ともに撫で調整が施され、内底面には鏝状工具痕が残る。淡黄褐色を呈する。

以上の土器は、弥生時代後葉に比定できる。この他に、弥生時代中期後葉～末の壺形土器の口縁部破片がある。しかし数は3～5点と少なく、混入したものと考えられる。井戸1080の時期は、後期後葉に比定できる。

III-2-e 小穴

以上掲載したほかに遺物、覆土の特徴から弥生時代に掘り込まれたと考えられる小穴があるが、どの様な施設を構成していたものか不明である。

小穴411 出土遺物 (図133-135)

1103は脚台付きの鉢形土器である。脚部と口縁部を欠くが、他はほぼ完全に残る。復元口径約18cmを測る。

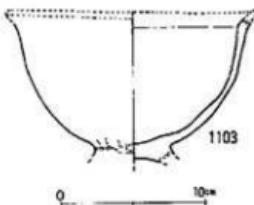


図 133 小穴411出土遺物実測図 (1:4)

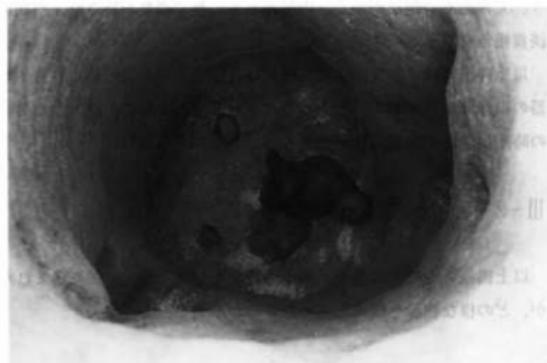


図 134 井戸465（南から）

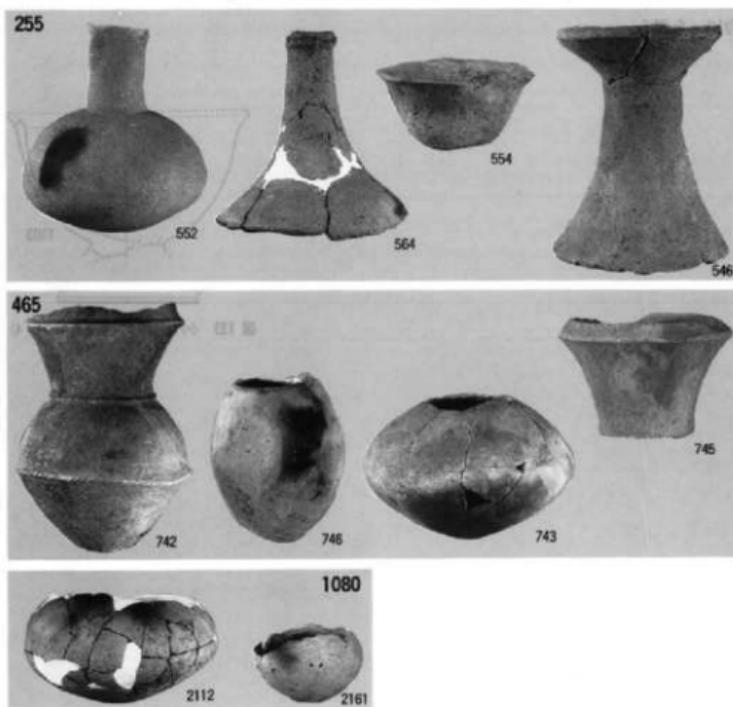


図 135 井戸(255・465・1080)出土遺物

III - 3 古墳時代前期の遺構と遺物

明らかに該期のものと考えられる遺構には、竪穴住居、石棺がある。

III - 3 - a 竪穴住居

遺構55、900、910、920が該当する。

竪穴住居 55 (図136・137・141・142)

G-92区に位置する。溝52と重複して、それより古い。平面形が南北方向に長軸をもつ長方形と思われる竪穴住居で、ベッド状遺構の痕跡と考えられる断続する小溝のはかは、床面部分の北半部が遺存する。そのため規模は、床の幅5.9mのはかは、計測不能である。ただ、住居長辺側の壁際中央に位置すると考えられる土壤62が一部遺存しており、これから、遺存する北半部を折り返して、長さ7.4mを求めることができる。中央の炉61を挟んで柱穴54・56が向かい合う。共に平面形は不整な楕円形状を呈するが、あるいは複数の掘り込みが重複した結果かも知れない。全体のわかる柱穴56で長さ1.1m、幅0.8mを測る。底面の標高は8.2~8.3mの位置にある。炉61は、平面形が不整な円形状を呈し、径0.6mを測る。断面形は逆台形状を呈し、床面からの深さ0.3mを測る。

掘型中位に、灰の混じったと思われる土層がある。

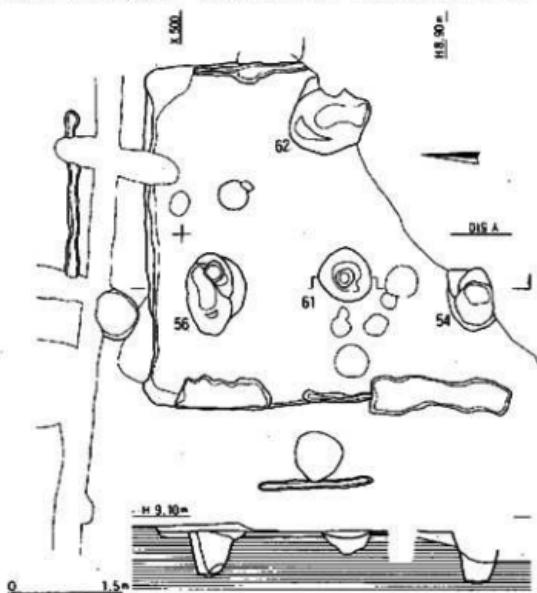


図 136 竪穴住居55実測図 (1:80)

それは暗赤褐色を呈し、柔らかい。以下はロームブロックで、粘土味が強く柔らかい。灰層より上位で土器片が多数出土している。

遺物は以上のほかに、東壁際の土壌62の底部から土器の小破片が多数出土した。床面近くの覆土中から磨石が出土している。またほかに覆土からは散漫に遺物が出土している。

竪穴住居55 出土遺物 (図138-144)

本遺構からは、少量の土器とともに石杵、砥石などの石器が出土した。

3244は小型の変形土器の口縁部である。約1/4残る。胴部内面は削り。3245は脚付き壺の脚部のみの破片である。内外面に刷毛目が顕著に残る。

図 137 炊61実測図 (1:40)

748は淡い緑灰色を呈する火山岩製の石杵である。長さ14.3cm、幅9.0cmを測る。この石器について本田光子氏より所見をいただいているので以下に記す。

「この石器は、以下に述べる事実に依り、赤色顔料のひとつである「朱(HgS)」の製造・調整作業に使われた、いわゆる石杵であると考える。① 逆勾玉とも言えるL字状 ② 上部に握りを持ち、下部に椭円形のカーブを有する使用面(磨り面)がある。③ 磨痕は主に長側辺に滑らかで非常によく使われている。④ 磨り面には朱が付着している。⑤ この石器に伴う白あるいは皿に相当する遺物の出土例はない。⑥について、本例は三輪町大竹遺跡出土

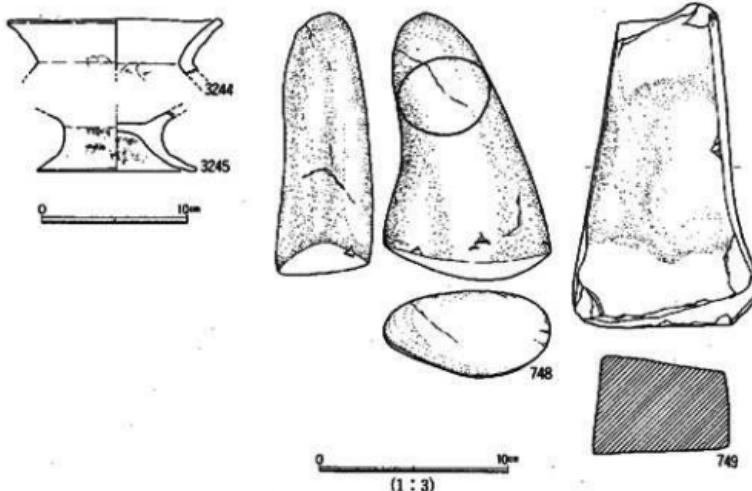


図 138 竪穴住居55 出土遺物実測図 (1:4)

例と同じく使用により磨り減ったもので、本来はし字状に近いと考えられる。④について、肉眼ではまったく認められないが、磨り痕の残っている使用面を実体顕微鏡で観察した所、磨り痕や亀裂の奥に微量の赤色顔料が残存していた。実体顕微鏡下で針によりサンプリングを行いプレパラートに封入した。光学顕微鏡により透過度・反射光40~400倍で検鏡した結果、赤色顔料として朱粒子のみを認めた。』

749は砂岩製の砥石である。両側縁と表裏面を使用している。表面は中央部が使用により僅かに窪む。長さ17.0cm、最大幅9.8cm、厚さ5.2cmを測る。

豊穴住居 900 (図130・143・145)

I-38区に位置する。溝795と重複し、それよりも古い。平面形が隅丸の豊穴住居である。規模は東西方向2.7m、南北方向2.5mをそれぞれ測る。床面からの壁の高さは0.1mを測る。床面には火災に遭ったものか、炭化した木材等が散在して出土した。これに混じり土器類が潰れた状態で出土している。

柱穴については、確認できなかった。周囲にも該当するような柱穴は確認できていない。床は地山ロームを用いた貼床になっており、それを除去した掘型は、住居南壁沿いに土壤状の掘り込みが

行われている。

遺物は上述の外に、覆土中から散漫に出土した。

豊穴住居900 出土遺物 (図140)

3248は壺形土器の口縁部付近の破片である。内外面ともに横方向の擦で調整が施される。1909も壺形土器である。脇部から口縁部にかけて1/3ほどの破片である。球形に近い脇部に、「く」字形の口縁部がつく。外面は器面の荒れが著しく、刷毛目調整の痕跡がわずかに残る。内面は擦で調整で仕上げられる。胎土には粗・細砂粒が非常に多く含まれ、色調はやや暗い淡黄褐色を呈する。

これらは古墳時代前期初頭に比定できる。しかし、出土土器の大半は弥生時代中期後葉~末のものであ

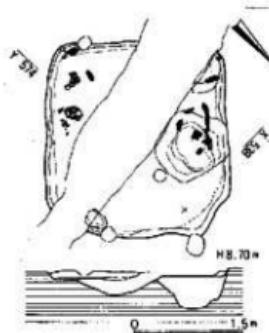


図 139 豊穴住居900実測図 (1:80)

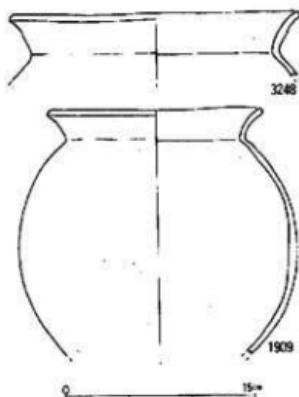


図 140 豊穴住居900出土遺物実測図 (1:4)



図 141 壁穴住居55
(南から)

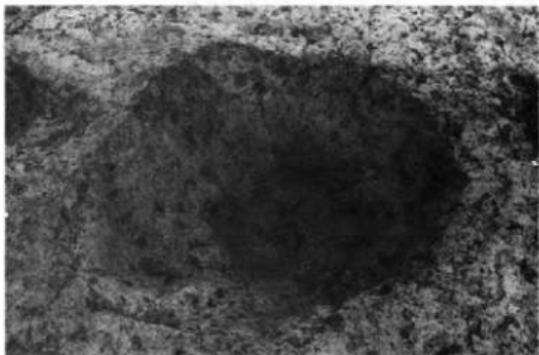


図 142 壁穴1
(西から)



図 143 壁穴住居900
(東から)

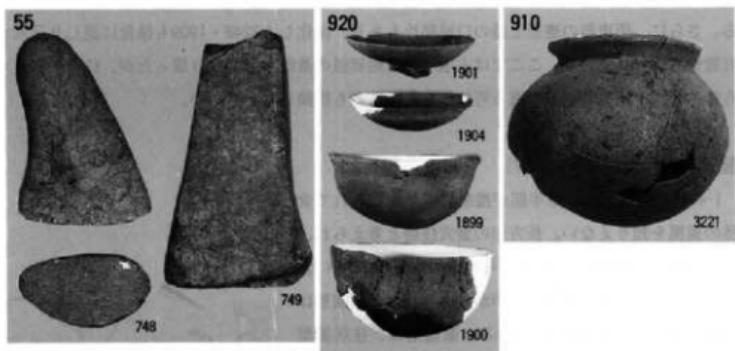


図 144 壁穴住居(55・910
・920)出土遺物

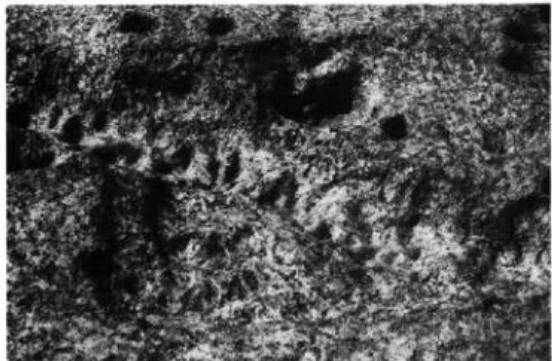


図 145 壁穴住居900
(南から)



図 146 壁穴住居910
(東から)

る。さらに、須恵器の壺形土器の口縁部片もあり、図化した3248・1909も後世に混じり込んだ可能性も残されている。ここでは古墳時代前期初頭の遺構として取り扱ったが、住居の規模から弥生時代中期後葉～末に遡る可能性もあることも指摘しておきたい。

竪穴住居 910 (図146・147)

I-49区に位置する。東半部が攪乱により削除されて全体の規模を知りえない。長方形の竪穴住居と考えられ、現状で幅3.4mを測る。床面からの壁の高さは0.1mに満たない。住居短辺側に寄って炉が検出された。平面形は卵形で長さ0.5m、幅0.4mを測る。断面形は、住居掘型と区別が付けにくいが、炉の部分が土壤状に一段深い。焼土の面は床面近くにあり、その部分だけでは浅い皿状の断面となる。床は貼床になっており、それを除去した掘型は、土壤状の掘り込みが2箇所に行われている。柱穴として、明確にできた遺構はない。

遺物は、床面の南部分に土器片が集中して出土したほかに、小穴1056から、全形を復原できる資料が出土している。

竪穴住居910 出土遺物 (図144・148)

3221は住居の北側の主柱穴より出土した。短頸の小型壺形土器で、半裁した状態である。調整は刷毛目のうえを丁寧に撫で消している。胴部の最大幅はほぼ中位にある。3222は壺形土器の底部の破片である。丸底に近い。3223は大型の壺形土器で、全周の約1/3の破片である。内外面に粗い刷毛目を残す。

これより、住居の時期は古墳時代前期初頭である。

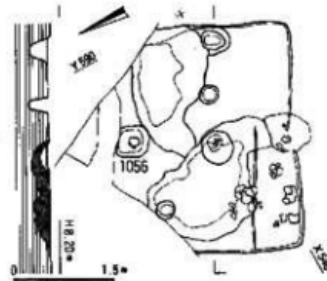


図 147 竪穴住居 910実測図 (1:80)

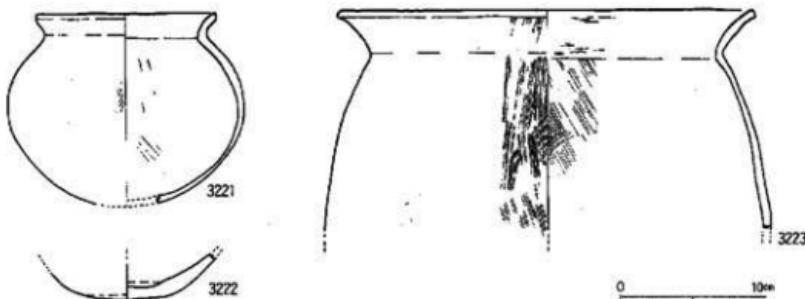


図 148 竪穴住居 910 出土遺物実測図 (1:4)

豊穴住居 920

(図149・151~153)

1-37区に位置し、豊穴住居930と重複してそれより新しい。平面形が方形の豊穴住居である。東西軸5.2m、南北軸5.0mを測る。覆土は暗黒褐色で全体に一様である。床面からの壁の高さ0.4mを測る。住居の壁際と、内側床面隅部のうちの3箇所、おそらくベッド状遺構かとおもわれる位置の縁の部分に、小溝が巡っている。ベッド状遺構そのものは、高まりとして捉えることは出来なかった。内側の溝は住居対角線との交点で屈曲し、そ

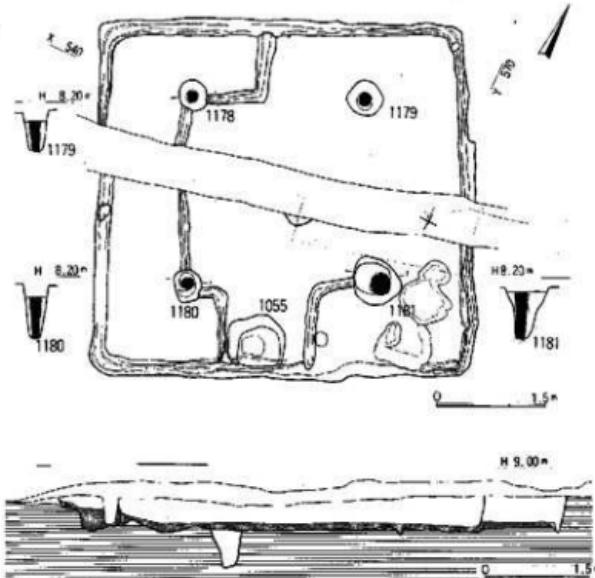


図 149 豊穴住居 920実測図 (1:80)

の部分に柱穴が検出された。柱穴は、そのために方形をなすように4本配置され、その平面形が不整な梢円形状を呈す。柱穴底面の標高は7.4mの位置にある。床中央よりやや東に寄り、炉が検出されたが、既設水道管の下になり、完掘することはできなかった。住居南壁中央部に接して土壤が設けられている。

住居内は貼床によっていたが、それを除去した掘型では、他の多くにみられるような、顕著な掘り込み等は検出されなかった。

遺物は、覆土中から顕著に出土したほかに、壁際の床面から完形の土器が出土している。

豊穴住居920 出土遺物 (図144-150)

出土土器には壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器・器台形土器・支脚形土器がある。在地系統のもの(1902・3135・3129)のはかに、近畿地方系統(1899・1900・1904・3113)・山陰地方系統のもの(3114)などや、それらと在地系統の折衷形式のもの(3118)がある。

1902は、「く」字形の折れ曲がる口縁部をもつ小型の壺形土器である。胴部上半の1/4ほどの破片。外面の調整は肩部に平行叩き調整を施した後、刷毛目調整し、さらに撫で調整で仕上げる。胴部中位は木目の細かい刷毛目調整を行う。内面は、指頭による丁寧な撫で調整が施され、指頭痕が残る。褐灰色を呈する。焼成は良好。3115は複合口縁の壺形土器である。口頸部の1/3の破片。口縁部の縫合部が下方に垂れる。外面は刷毛目調整の後に、口縁部と頸部上半部のみ、横方向の範磨き調整を施す。内面は、横方向あるいは斜方向に刷毛目調整を行い、複合口縁の接合部は、とくに指頭で押え、撫で調整を行う。淡赤褐色を呈する。内面には煤が付着し、コケ茶色に変色している。3114は二重口縁の壺形土器で、口頸部の1/3ほどの破片。内外面ともに横方向の撫で調整で仕上げる。灰褐色。3117も二重口縁の壺形土器と考えられる口頸部の破片である。内外面ともに器面の荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。灰黄色を呈する。

3118と3135は壺形土器の口縁部破片である。3118は小破片のため口径は不明である。器壁は薄く、口縁内面がわずかに内巻する。器面の荒れが著しく、調整手法の仔細はまったく不明。淡茶赤色を呈する。3135も小破片で、口径は明かではない。口縁部の屈曲部に断面三角形の突起がめぐり、範状工具で刻み目を施す。内外面ともに撫で調整で仕上げられるが、内面には先行する刷毛目調整の痕跡がわずかに残る。

1899と1900は小型の鉢形土器である。ともに器面があれ、調整手法の仔細は不明。胎土には微細・細砂粒を多く含むが、粘土自体は精良である。1899は淡黄茶色ないし淡茶赤色を呈する。

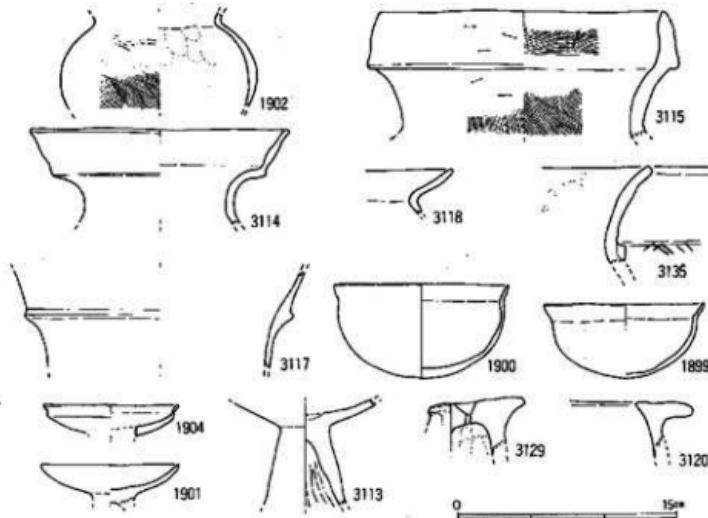


図 150 構造住居 920出土遺物実測図 (1:4)



図 151 壁穴住居920
(東から)



図 152 壁穴住居920
(北から)



図 153 壁穴住居920
・930土層断面
(南から)

1900は淡茶赤色を呈し、外底面付近に不整形の黒変部がみられる。1901は脚付きの鉢形土器で、脚部を欠く。内外面ともに器面が荒れ、調整手法の仔細は不明。胎土には砂粒をほとんど含まず、精選粘土が用いられている。茶黄色を呈する。部分的に2次的な火を受けた赤変部がみられる。

1904は小型の器台形土器で、脚部を欠く。器面の荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。胎土は微細砂粒を含む程度で、精良粘土を用いる。淡黄茶色を呈する。

3113は高環形土器で、脚の裾部と环部の大部分を欠く。脚部は短く、わずかに膨らみをもつ。内外面ともに器面の荒れが著しい。胎土には精選粘土を用い、色調は淡黄褐色である。

3129は凸形の器台形土器である。指頭により整形され、内外面の各所に指頭圧痕が残る。上面から焼成前に穿孔を施す。淡赤褐色を呈する。

以上は古墳時代前期初頭より若干下る時期のものである。この他、周辺から混入したと考えられる弥生時代中期の変形土器・高環形土器の破片がある。3120は、そうした変形土器の口縁部破片である。小片のために、口径は不明で、傾きも確かでない。色調は茶赤色を呈する。

III-3-b その他の遺構

石棺墓 422 (図154~156)

I-2区に位置する。

堅穴住居460、溝412と重複し、それよりも新しい。検出した時点では、石蓋状の施設と考え、調査を進めたが、結果として床部分が遺存するものと判断したものである。

遺構は、東端部を溝412により、中央部を最近の工事により削除されている。検出面で

は、遺存値で、長さ2.4m、幅1.6mの隅丸長方形状の掘型と、その中央に梢円形状に長さ2.1m、幅1.0mの白色粘土が観察された。粘土部分には、我々が玄武岩と呼ぶ石質の石材中央部が露出していった。遺構の横断面の観察によれば、掘型底面を掘りあげた地山の土で掘型中央部が凹

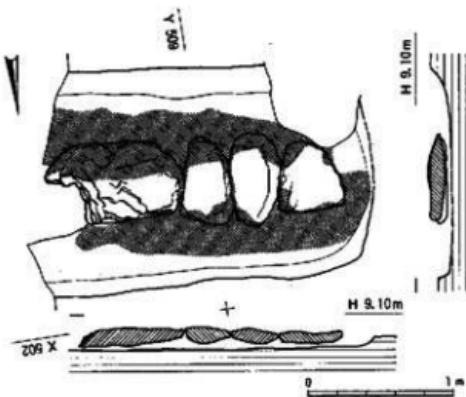


図 154 遺構 422実測図 (1:40)

むような状態に均したのち、厚さ10cm程度の板石4枚を縦に並べた脇を地山土で固め、更に粘土で覆っている。遺存したのはこの部位までで、これより上位の構造は遺存しない。ただ、石材の南側に沿い、粘土上に黒色土が線状に観察され、これを上部構造の痕跡と考えるならば、その位置から倒壁が立ち上がっていったことが考えられよう。この位置を粘土部の中心線で折り返すと幅0.6mが復原できる。

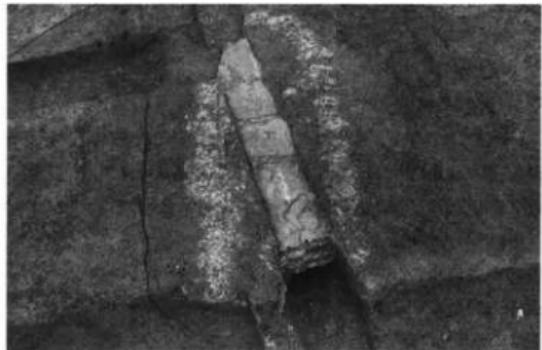


図 155 遺構 422
(東から)



図 156 遺構422
(北から)

III-4 古墳時代後期の遺構と遺物

古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構には、竪穴住居215、370、480、490、510、掘立柱建物470、570、720、770、溝785、795、940、井戸53のほかに小穴がある。

III-4-a 竪穴住居

大型の370と他の住居とに分けられる。後者は、前者とやや離れ調査区中央南壁寄りに密集重複している。

竪穴住居 215 (図157・158・164・165)

1-14区に位置する。弥生時代の遺構である竪穴住居240、井戸465のほか竪穴住居480、490、510、掘立柱建物570と重複する。弥生時代の遺構のほかに、竪穴住居480、490よりも新しい。掘立柱建物570との前後関係は遺構の重複関係からは判断できなかった。

平面形は方形状を成し、

南北軸方向に2.2m、東

西軸方向に2.1mの規模

をもつ。覆土は暗茶褐色

土で、床面からの住居壁

の高さは0.2mを測る。

住居壁はやや外方に向

かって立ち上がる。壁の

四周には幅広の小溝が断

続するが、土層断面の観

察ではそれから垂直に立

ち上がる土層の変化が観

察された。あるいは壁に

何らかの工作を施したもの

のかとも考えられるが、

広がりとして追うことは

できなかった。西壁中央

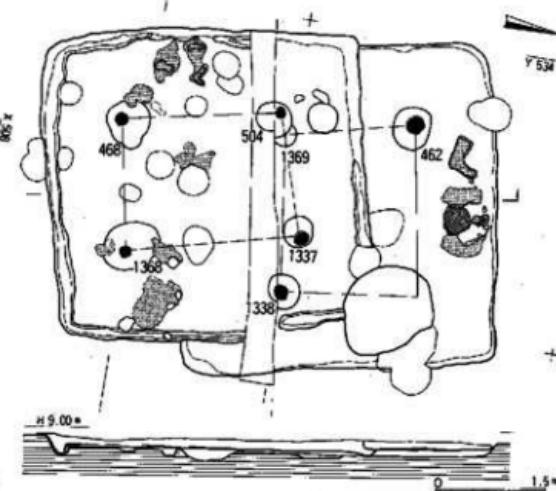


図 157 竪穴住居215・480 実測図 (1:80)

に竈の痕跡と思われる粘土と焼上が僅かに残っていた。対する東壁に近く、いわゆる「竈対面粘土」であろうか、粘土の集中する部分が何箇所か観察された。

柱穴は、ほぼ対角線上に設置され、その配置は正な四辺形を成す。柱穴の平面形は頗る橢円形状を呈す。底面の標高は7.8~8.2mの位置にある。断面形は円錐上に先細りになるものがある。1368を除きいずれにも土層断面で柱痕跡が観察された。住居内には貼床が行われており、それを除去した

掘型は壁に沿い一段帶状

に掘り下げられているようにみてとれた。竪穴住居480も同様な掘型をもつものと思われ、両者が切り合った部分は凹凸が著しい。竪穴住居215の南半部、480の北半部では床面下の掘り込みは顕著でない。

遺物は、覆土中から多量に出土した。

竪穴住居215 出土遺物 (図159~163)

出土遺物には須恵器・土師器・瓦・石製品などがある。

須恵器

3088・3087・3089・3092・3054・3091・3090・3057・3086・3085は壺蓋である。3088は外面天井部に沈線が1条めぐり、天井部と体部の境には明瞭な段をもつ。3087・3054・3091・3056には、そうした段はみられない。3089・3092・3090には、凹線状の段がめぐる。3091と3090は、他と比べ口径が小さく、口縁部は緩やかに屈曲する。3056は口縁部内面に凹線が1条めぐる。3057と3086は口縁部が強く屈曲するもので、天井部と体部の境に段はみられない。3085は壺蓋の中にいたが、他の器種の蓋の可能性も考えられる。いずれも天井部外面は輻輪回転を利用

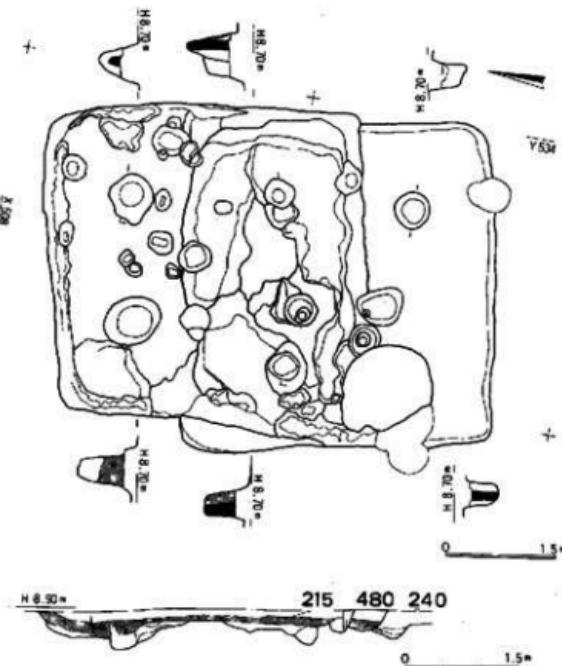


図 158 竪穴住居215・480掘型実測図 (1:80)

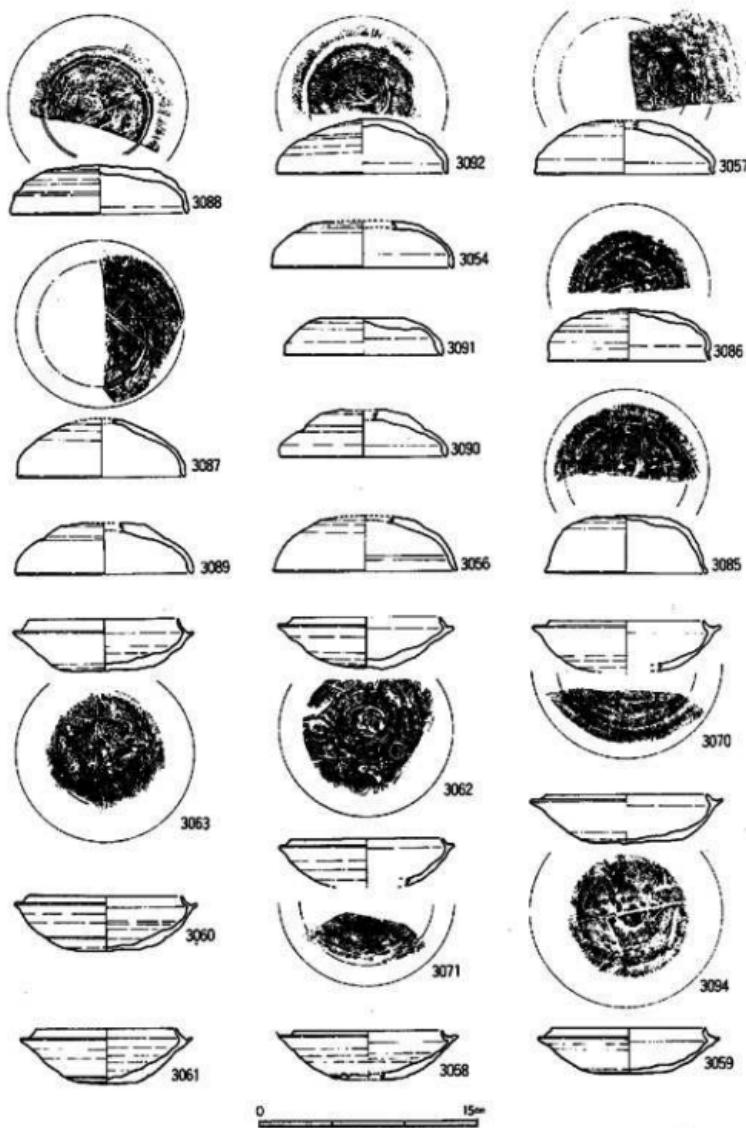


図 159 堅穴住居215出土遺物 実測図1 (1:4)

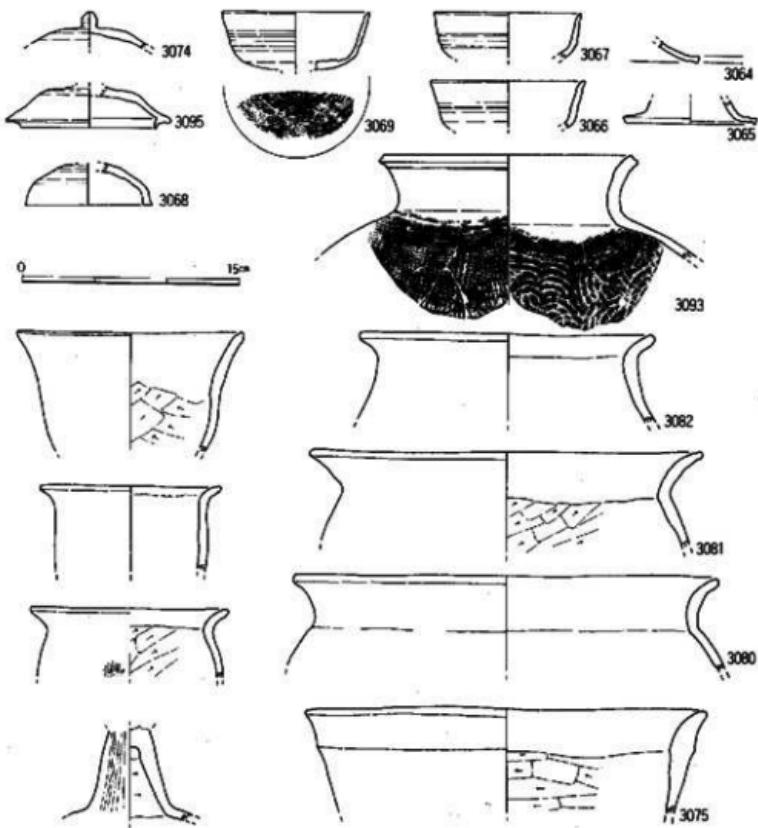


図 160 堪穴住居215出土遺物 実測図2 (1:4)

した鉈切り離し、あるいは回転鉈切り調整のままである。口縁部および内面は撫で調整が施される。3088・3087・3057・3086・3085の外面天井部には箒条工具、3092には竹管によると思われる鉈記号がみられる。3088・3087は灰黒色、3089・3092・3086は灰白色、3054・3090・3085は暗灰色、3091は灰褐色、3057は灰青色を呈し、焼成はいずれも良好である。

3074と3095も坯蓋であるが、前述のものと異なり、口縁部にかえり部をもち、宝珠形のつまみがつく。天井部外面は箒轆回転を利用した鉈切り離しの後に、かるく撫で調整を施す。他の部位は撫で調整である。3074は小豆色、3095は外面が暗灰色、内面が小豆色を呈する。胎土に粗砂粒を多く含む。

3063・3060・3061・3062・3071・3058・3070・3094・3059は坏身である。3063は口縁部のかえり部が立ち上がり、付け根に鉈状工具による沈線がめぐる。これと比べ、3060・3061・3062のかえり部はかなり傾き、さらに3071・3058・3070・3094・3059では小さくなる。3060と3061の天井部外面には箒条工具による沈線が1条めぐる。いずれも外底面は辘轳回転を利用した箒切り離し、あるいは回転箒削り調整のままで、他の部位は撫で調整を施す。3063・3071・3070・3094の外面天井部には箒条工具、3062には竹管によると思われる箒記号がみられる。3060・3058・3070・3094は灰白色、3063・3062・3071・3059は灰色、3061は淡茶褐色を呈し、焼成はいずれも良好。箒記号と同じであることから、3062は蓋の3092とセットをなすと考えられる。

3068は短頸壺の蓋であろうか。天井部外面は回転を利用した箒削り調整のままで、他の部位はやはり回転を利用した撫で調整である。胎土には粗・細砂粒が多く含み、灰色を呈する。

3069・3067・3066・3064・3065は坏部である。3069・3067・3066は、坏部の1/4~1/6ほどの破片である。3069と3066は坏部中位に2条のあまい凹線が、3067は凹線状の段がめぐる。坏部下半は回転を利用した箒削り調整、他は撫で調整を行う。3069には坏部外面に箒条工具による箒記号がみられる。胎土には微細・細砂粒を含み、色調は灰色ないし灰褐色である。3064・3065は脚部の小破片である。外面ともに回転を利用した撫で調整で仕上げられる。灰色ないし灰白色を呈し、胎土には微細・細砂粒を少量含む程度である。

3093小型壺で、口縁部の1/3ほどの破片である。口縁部付近は撫で調整、胴部外面には平行条線の叩き痕、内面には晴海波の叩き痕が残る。外面には叩き調整の後にカキメ調整を施す。微細砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。



図 161 積穴住居215出土遺物 実測図3 (1:4)

著しく、調整手法の仔細は不明。内面は口縁部付近を横方向の撫で調整、胴部を乱雜に箒削り調整する。胎土には微細・細砂粒を非常に多く含み、色調は淡黄褐色である。

3084・3083・3082・3081・3080は壺形土器で、口縁部の1/5~1/7ほどの破片である。小型品と大型品がある。3083・3081・3080のように、胴部上半をすばませ、やや外彎する「く」字形口縁部をもつものが、量的にもっとも多い。いずれも口縁部付近は横方向の撫で調整を施し、胴部内面は乱雜に箒削り調整する。外面は器面の荒れが進んでいるが、部分的に刷毛目調整の後に撫で調整が施された痕跡がみられる。胎土には粗・細砂粒が多く含まれ、黄褐色ないし茶黄色を呈する。3078は高壺形土器の脚部破片である。外面は箒状工具で面取りするように撫で調整され、内面は箒状工具を回転させて箒削り調整を施す。胎土には砂粒がわずかに含まれるのみで、精選された粘土を用いている。淡茶赤色を呈する。

3075は瓶と考えられ、口縁部の1/5ほどの破片である。口縁部は撫で調整、胴部外面は刷毛目調整、内面は箒削り調整される。粗・細砂粒を非常に多く含み、茶味をおびた黄褐色を呈する。この他、土師器には移動式の箒の小破片がある。

瓦

3224は土師質の軒丸瓦の瓦当部分である。およそ1/3を欠損する。沈線により花弁と中房を表現する。花弁は単弁8弁であるが、4カ所に間弁を意識したようなV字形が沈線で描かれており、複弁4弁とも考えられる。沈線を描いた工具は、先端がギザギザに割れ、草の茎のようなものを利用したと考えられる。裏面には指頭と爪の圧痕が明瞭に残り、異なる方向から指を揃えて押したことが伺える。色調は赤橙色で、焼きは軟質である。直径約10cm、厚さ1.2cmを測る。3225は土師質の丸瓦である。約1/2の破片で、頭の頭の部分であろうか。背には格子目の叩き調整痕が残り、内面には竹状模骨と布の圧痕が残る。模骨の先端を紐で縛った部分も、圧痕からはっきりと観察できる。頭の端部および背側、側辺は箒削り調整で仕上げている。高さは4cm未満であろう。焼成は良好で、堅緻に焼き上がっていいる。淡茶褐色を呈する。3226も土師質の丸瓦の破片である。器表面は荒れが著しく、成形や調整の手法は不明。黄橙色を呈し、焼きは脆弱である。

石製品

257は滑石製の紡錘車である。断面は角のとれたほぼ台形を呈する。直径42.6cm、厚さ10.8cmを測る。中央孔は回転軸によって穿孔される。孔径は5.6cmを測る。

これらの出土遺物の中で、須恵器と土師器から、住居の時期は6世紀末~7世紀初頭に比定できよう。

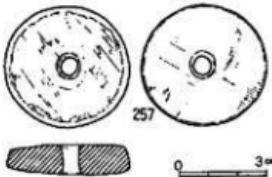


図 162 積穴住居215出土遺物
実測図4 (1:2)

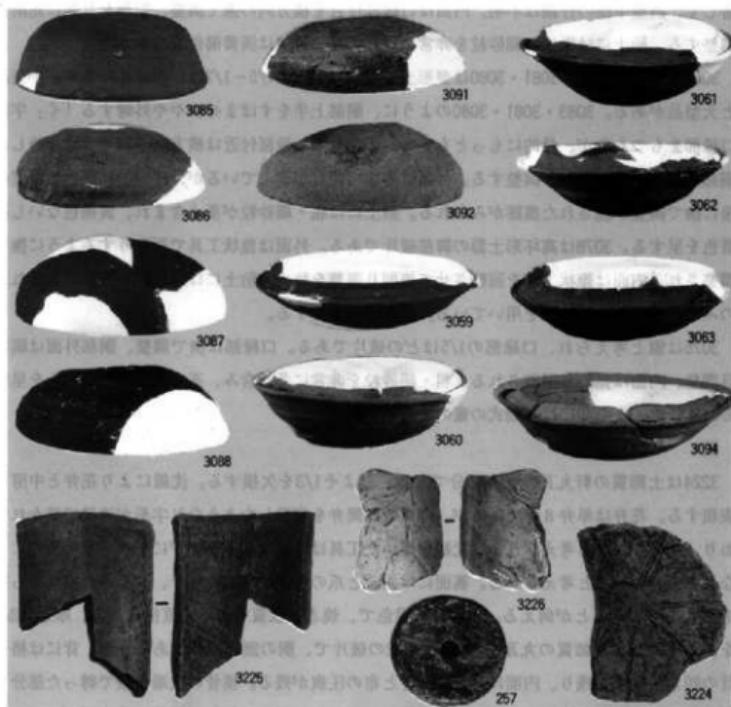


図 163 売穴住居215出土遺物



図 164 売穴住居215・480
(北から)



図 165 壺穴住居215掘型
(北から)



図 166 壺穴住居490掘型
(北から)



図 167 壺穴住居500掘型
(北から)

竪穴住居 480 (図157・158・164・168)

I-14区に位置する。重複関係は、上述の通りである。竪穴住居215と同一の形状を成すと思われる。掘型の様壁から規模を推定すると、東西南北の軸方向にそれぞれ4.4mを測る。覆土は明茶褐色土で、床からの壁の高さは0.1mを測る。北壁中央部に竈が設けられている。据部分のみが遺存して、火床部から土器師変体部破片がまとめて出土した。

柱穴も4基であると考えられるが、想定される1基は、井戸465と重複する位置にあたり確認することができなかった。各柱穴の平面形は、不整な梢円形状を呈す。その底面の標高は8.1m前後に集約する。また、柱穴000は、竪穴住居215の柱穴504と重複し古い。覆土中から遺物が出土した。

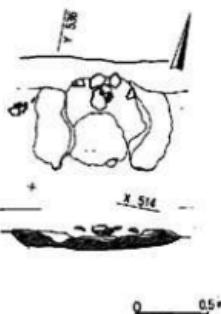


図 168 竈 実測図 (1:40)

竪穴住居 490 (図13・166)

I-4区に位置する。竪穴住居215と重複するほかに竪穴住居510と重複して、それより古い。方形又は長方形の竪穴住居の隅部のみが調査区内に位置する。調査時、重複する造構との区別が出来ず、掘型面まで掘り下げた時点で平面形を確認した。そのため、詳細については不明確である。

竪穴住居 500 (図167・169)

I-3区に位置する。方形又は長方形の竪穴住居の隅部のみが調査区内に位置する。竈材かと思われる粘土がブロック状に覆土中に混じっていた。壁は斜めに立ち上がる。その床面からの高さ0.4mを測る。詳細については、調査部分が僅かであるため不明である。

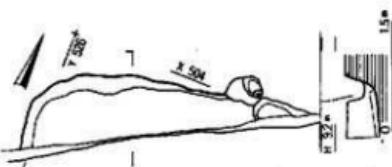


図 169 造構500 実測図 (1:80)

竪穴住居 510 (図13・173)

I-15区に位置する。竪穴住居240、490と重複して、いずれよりも新しい。方形又は長方形の

豊穴住居の隅部のみが調査区内に位置する。調査時、重複する遺構との区別が出来ず、掘型面まで掘り下げた時点で平面形を確認した。覆土は重複する遺構と似るが、竪材かと思われる粘土がブロック状に混じっていた。西壁部で竪を検出した。ただし調査時、重複する遺構との区別が出来ず、掘型面まで掘り下げた時点で平面形を確認した。そのため、詳細については不明確である。

豊穴住居 370 (図170-172・174・175)

I-16区に位置する。掘立柱建物870、770と重複し、いずれよりも新しい豊穴住居である。住居南半の一部は調査区外となる。現状からすると、平面形は隅丸の方形状を呈し、計測できる東西軸方向の長さ5.2mを測る。覆土は淡茶褐色土で、白色粘土の小粒を含む。覆土は全体に一様であるが、東壁面際では、壁溝から立ち上がるような変化がみられた。床面からの壁の高さ0.2mを測る。北壁中央には竪が設けられている。竪は白色粘土を用いて構築し、火床には、変形土器を倒立させて埋め込んでいる。

柱穴は、住居対角線上で平面上の位置が方形を成すように4本を配したものと考えられる。

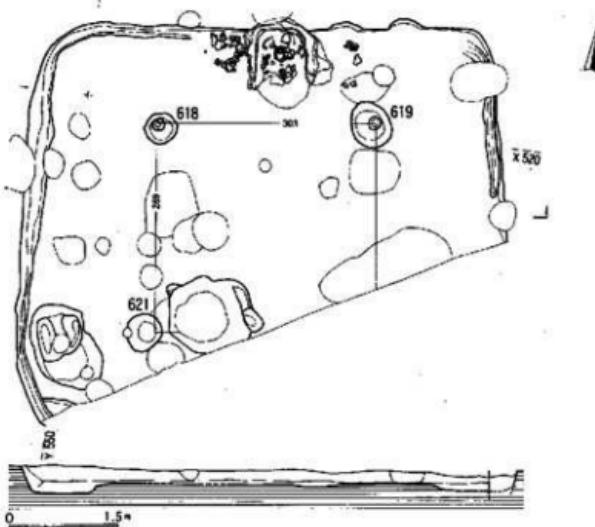


図 170 豊穴住居370 実測図 (1:80)

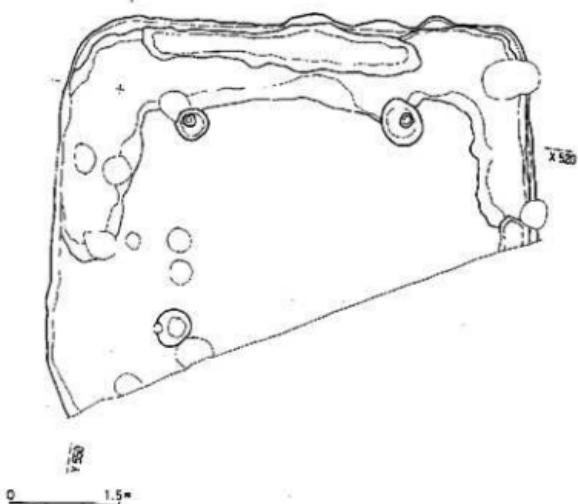


図 171 半穴住居370編型 実測図 (1:80)

想定される 1 本は調査区外に位置する。住居内は前面に貼床が行われている。それを除去した掘型は、住居北半の壁際を帯状に一段掘り廻めている。加えて北辺の壁際を、竈の位置を中心にもう一段帯状に掘り廻めている。

遺物は覆土中から出土したばかりに、竈を中心とした部分に集中して、完形或いはそれに近い土器が床面上から出土している。

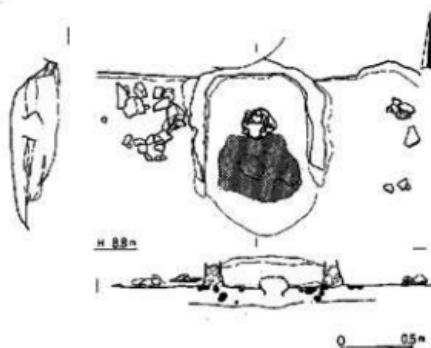


図 172 竈 実測図 (1:40)

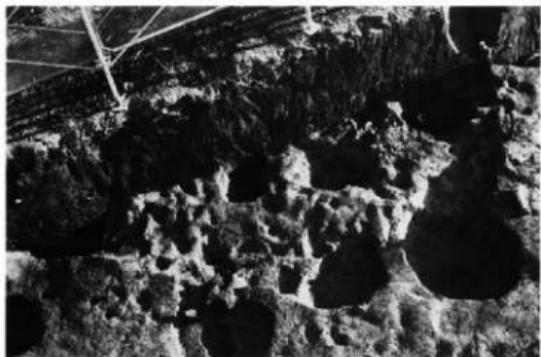


図 173 壘穴住居510掘型
(北から)



図 174 壘穴住居370
(北から)



図 175 窯 (南から)

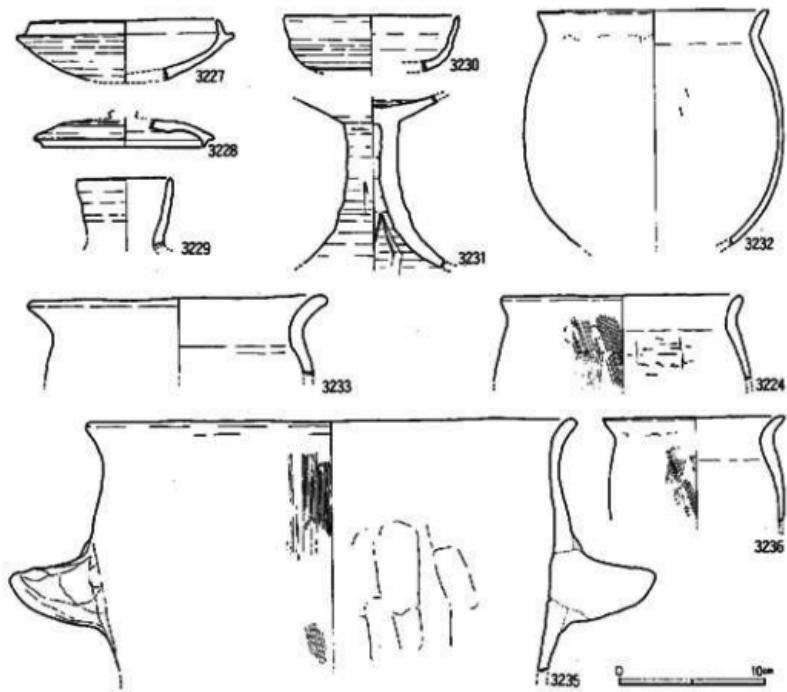


図 176 積穴住居370出土遺物 実測図 (1:4)

積穴住居370 出土遺物

(図176)

本遺構からは、壺、甕などの須恵器や土師器の壺、瓶などが出土した。

3227は須恵器の壺身の破片である。かえりの立ち上がりは高い。底部ヘラ削り。約1/2の破片である。受け部の外側半分と外面は、灰を被って灰緑色に変色している。蓋を被せて焼成した痕跡であろう。他の部分は灰紫色。3228は須恵器の壺蓋の破片である。かえりが低く、立ち上がりも弱い。外面の約半分はヘラ削り。軟質で、灰色を呈する。約1/8の破片。壺身の可能性もある。3229は須恵器の平瓶の口縁部の破片である。約1/2の破片。3230は須恵器の高壺の壺部の破片である。約1/3と底部を欠く。外側に開く口縁部と底部の境には丸みを帯びた沈線と凸帶状の高まりがある。外面暗灰色で、内面は灰を被った痕跡が認められる。3231は高壺の脚部である。脚部と壺部の上半部を欠く。中位に透かし状の切り込みがあるが、その部分を欠損しており形状は不明である。内面に3本の放射状の沈線(ヘラ記号)がある。灰青色を呈す

る。3232～3234、3236は土師器の壺形土器である。中位が肥厚し、先端がすぼまる口とあまりくびれない頸部が特徴である。腹部外面は刷毛目調整、内面は削りである。3232と3236は二次的な火による赤変が著しい。3233と3234は小片、3232と3236は胴部から底部を欠く。3235は土師器の壺形土器である。約2/5の破片である。外面刷毛目調整、内面は縦方向の削りである。

これにより、住居の時期は7世紀前半～中葉であろう。

III-4-b 堀立柱建物

構成、規模等で疑問なものも含んでいるが、主に出土遺物によって、この時期に含めたものもある。1間×2間の建物(320)、2間×2間総柱建物(470、570、720)、2間×3間総柱建物(770)を示すことができる。

堀立柱建物 320 (図177)

I-14区に位置する。掘立柱建物305と重複し、それより新しい。1間×2間の建物である。桁行はほぼ東西方向に沿う。柱穴の平面形は隅丸の長方形状あるいは不整な円形状を呈し、径又は長さが0.5mを前後する。その覆土は黒褐色土を主とする。柱痕跡が半数の柱穴で観察された。柱穴底面の標高は、8.1～8.6mと上下の差が大きい。これを柱の配置との関係でみると、東南隅柱から北西隅柱に向かって柱穴底面の高度が大きくなる。あるいは原地形を示すものであろうか。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土した。半数の柱穴から須恵器の出土があった。いずれも小破片で図示しないが、7世紀にかかる時期の資料も含まれる。

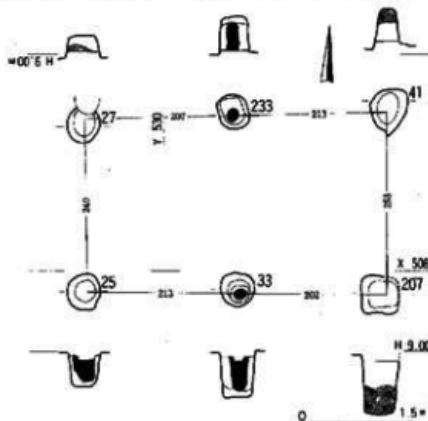


図 177 堀立柱建物320 実測図 (1:80)

掘立柱建物 470 (図178)

I-3区に位置する。堅穴住居1、掘立柱建物310と重複し、そのいずれより新しい。2間×2間純柱の建物である。建物の平面形は方形状となり、東西南北向方向ともに軸長3.0mを測る。柱筋をほぼ南北方向にとっている。柱穴は、平面形が不整な円形あるいは梢円形で、径、あるいは長径は0.4~0.5mを測る。柱穴底面は、標高8.3~8.6mの位置にあり、高低の差が著しい。柱穴覆土は暗褐色土が主で、土層断面に柱痕跡が観察されるものとそうでないものとは半々である。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土した。

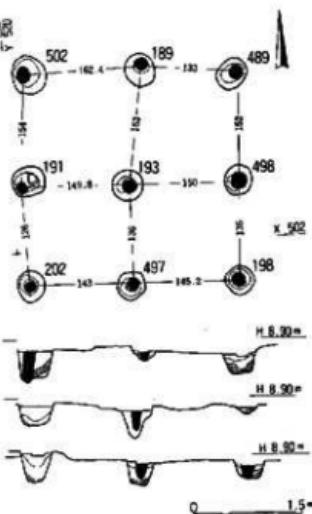


図 178 掘立柱建物470 実測図 (1:80)

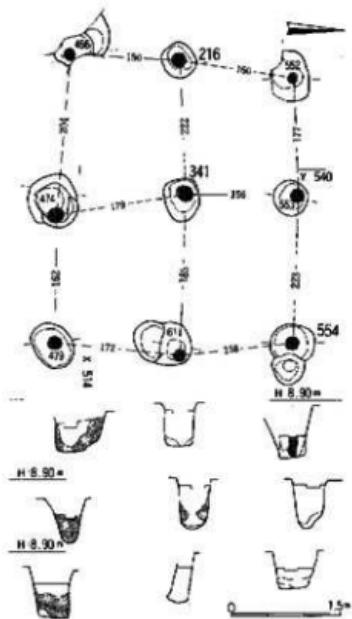


図 179 掘立柱建物570 実測図 (1:80)

掘立柱建物 570 (図179-181)

I-15区に位置する。堅穴住居240、井戸465と重複する。2間×2間純柱の建物である。建物の平面形は長方形となり、長軸をほぼ南北方向にとり、建物長軸4.1m、短軸長3.2mをはかる。柱穴の平面形は不整な円形あるいは梢円形で、径あるいは長径は0.5~0.6mを測る。穴底面は、標高8.0~8.4mの位置にあり、高低の差が著しい。柱穴覆土は黒褐色土が主で、土層ロームを層状に挟む柱穴もある。断面に柱痕跡が観察されるものは少ない。

遺物は、柱穴覆土中から散漫に出土した。須恵器が顕著である。

掘立柱建物 720 (図180)

I-26区に位置する。竪穴住居460、780、溝550と重複し、竪穴住居より新しく、溝より古い。

2間×2間総柱の建物である。建物の平面形は方形状というより歪んで、いわば菱形状を呈す。その東西軸・南北軸方向の長さはともに3.5mを測る。南北方向の柱筋は、北よりやや西に振れる。

柱穴の平面形は不整な円形または椭円形で、径あるいは長径は0.4~0.6mを測る。穴底面は、標高8.1~8.4mの位置にあり、高低の差が著しい。柱穴覆土は暗褐色土が主である。断面に柱痕跡が観察されるものとそうでないものとが半々である。

遺物は、柱穴覆土中から数点に出土した。弥生土器小破片である。

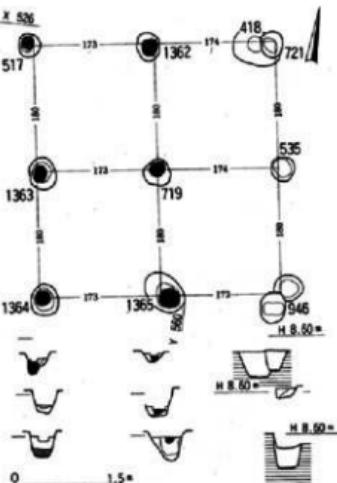


図 180 掘立柱建物720 実測図 (1:80)

掘立柱建物 770 (図182·183·185)

I-26区に位置する。竪穴住居370、掘立柱建物870と重複し、前者より古く、後者より新しい。



図 181 掘立柱建物570
(南から)

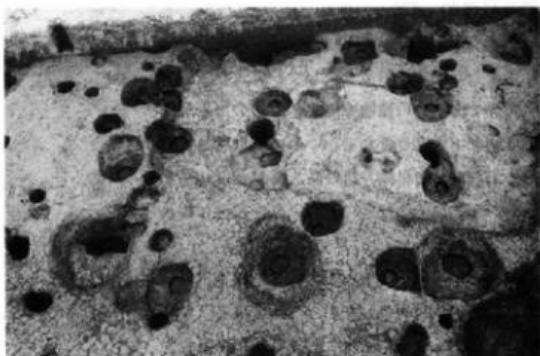


図 182 振立柱建物270
(北から)



図 183 振立柱建物270
(東から)



図 184 井戸53 (西から)

2間×3間総柱の建物であると考えられるが、南側辺の柱穴が調査区外にかかり不明確である。建物の平面形は正方形状を呈す。その東西軸方向5.2m、南北軸方向4.8mをそれぞれ測る。東西軸方向の柱筋は東よりやや北に振れる。

柱穴の平面形は不整な円形状または梢円形状で、径あるいは長径は0.7~1.36mを測る。南北辺の側柱は建物両側共に極く大きな平面規模をもつ。柱穴底面は、標高7.9~8.1mの位置にある。柱穴覆土は黒褐色土、暗赤色土が主である。また、ロームを層状に挟む柱穴もある。土層断面の観察できた柱穴にはすべて柱痕跡が観察された。

遺物は柱穴埋土中から、散漫に出土している。柱穴527から内面に同心円状の叩き目調整、外面に搔き目調整のおこなわれた須恵器壺小破片、767からは、須恵器壺蓋が出土している。

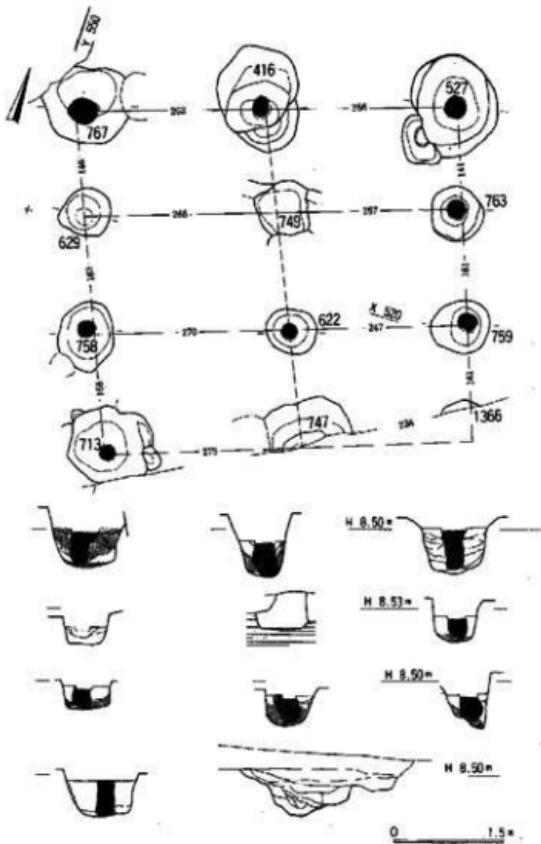


図185 捩立柱建物770 火薬図 (1:80)

III-4-c 溝

主に出土遺物によって、時期を決定した。調査時断続して個別の造構番号を付したものについて、平面上での位置完形なども加えて検討し、報告するような一連の造構と判断した。

溝 52 (図186)

G-92に位置する。溝412と重複し、それより古い。平面形は弧状を呈し調査区外に向かう、調査終了間に拡張し確認したところでは、西端が陸橋状に掘り残された溝は更に続いているのが確認できた。断面形は、皿状を呈し、幅は2.5mを測る。その覆土は中間に粗砂混じりの部分を挟んだ茶褐色土層である。

遺物は須恵器壺、坏蓋等の小片が出土している。分量からいえば、弥生土器が殆どである。

溝の形状から古墳の周濠の可能性も考えられる。拡張時の所見からすれば、内側に当たる面が一段高い。現状から復原した円弧は溝内法で径11mほどを測る。

溝 785 (図186)

I-27区に位置する。豎穴住居780と重複し、それより新しい。調査区南壁から伸び、調査区内で終わる。幅1.1mほどの溝である。断面形は台形状を呈し、深さ0.3mを測る。覆土は暗茶褐色上で、底面の傾斜は調査区内ではほとんど無い。

溝785 出土遺物 (図187)

須恵器の壺が2点と、土師器の椀が1点出土している。3112は須恵器の坏身で、口縁部受け部のかえり部分の1/3ほどを欠く。かえり部の付け根には竪状工具で段がつけられる。外底面には竪状工具による範記号がみられる。口縁部付近と内面は、輪轂回転を利用した横方向の撫で調整、外底面は回転範切り離しのままである。胎土には細砂

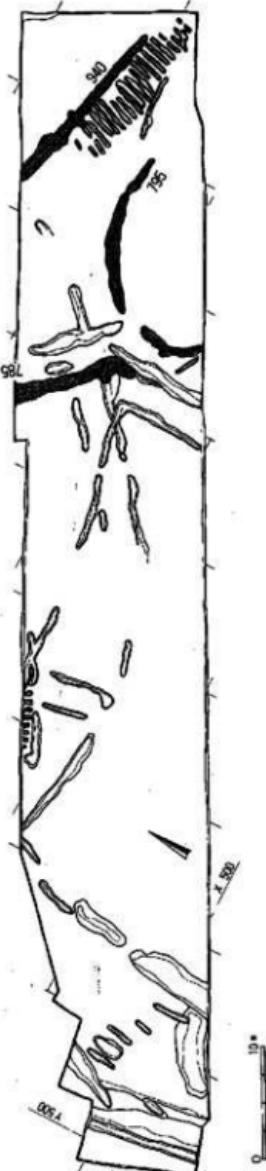


図 186 溝 (1:500)

粒が多く含まれ、暗灰色を呈する。3111は坏蓋で、淡茶赤色を呈するいわゆる「赤焼き須恵器」である。外底面に松葉に似た形の鉢記号が薄く残る。内外面ともに器面の荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。胎土には微細・細砂粒が多く含まれる。2088は口縁部から底部にかけての1/3ほどを欠損した上師器の碗である。外尚は器面の荒れが進み、調整手法の仔細は観察できない。内面は笠削り調整の後に丁寧な撫で調整で仕上げる。胎土は粗・細砂粒を非常に多く含み、色調は茶赤色である。

3112と3111から、785号溝は7世紀前半～中葉としておさえられよう。

溝 795 (図186)

I-27区に位置する。整穴住居780と重複し、それより新しい。調査区南壁から弧状に断続し延び、調査区外に向かう。幅は0.7～1.7mを測る。断面では、低い逆台形状を呈し、深い部分では0.4mの深さを測る。その覆土は茶褐色土を主とする。整穴住居780と重複する位置では、それとの区別がつかず、床面で確認することができた。底面には溝の走行に直交して工具痕かと思われる窪みが連続している。底面は西端の位置が最も低い。

遺物は覆土中から須恵器壺、坏蓋小破片が出土している。

特定の範囲を、円形状に区画したものであろうか。

溝 795 出土遺物 (図188)

出土遺物にはガラス小玉・土師器・須恵器がある。

1728はスカイブルーのガラス小玉である。やや歪んでおり、長径4.7cm、短径4.2cm、厚さ2.8cmを測る。

1817は上師器の脚付きの鉢形土器で、同一個体と考えられるが、接合部分の直径が違うため、個別に図示した。鉢部の内外面は荒れが著しく、調整の仔細は不明。脚部は笠状T.具で面取りされ、内面には笠状工具痕が残される。胎土には微細砂粒が多く含まれるが、器壁はきわめて薄く、つくりは丁寧である。色調は茶赤色である。1456は須恵器の高壺である。脚部の1/4ほどのが破片である。復元すると長三角形の透かし孔が四方にあったと考えられる。器面には灰を被り、黒灰色

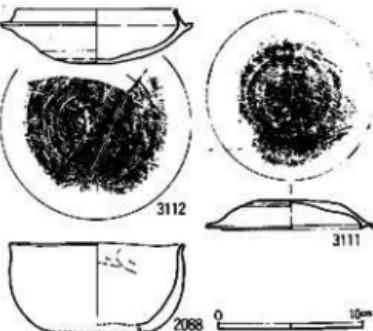


図 187 溝785出土遺物 実測図 (1:4)

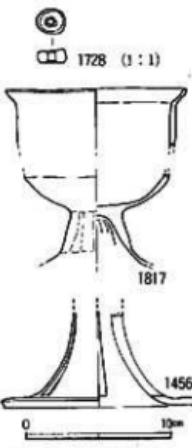


図 188 溝795出土遺物 実測図 (1:1)

を呈する。

これらから、795号溝は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

溝 940 (図186)

I-48～49区に位置する。調査区北壁から直線状に延び、調査区内で終わる。その走行は、西からやや北に振れている。幅は西端部で1.1mほどを測る。断面の形状は逆台形状で、覆土は茶褐色土である。深さは西端部で0.2mを測る。底面は東に向かい緩く傾斜する。

遺物は覆土中から少量出土している。須恵器小破片が含まれる。

溝940 出土遺物 (図186)

3250は須恵器の坏蓋である。約1/2の破片。天井部はヘラ削りで、単線のヘラ記号がある。灰色を呈する。3251は須恵器の坏身の破片である。約1/3の破片。底部ヘラ削り。灰白色を呈する。

これにより、本溝の時期は7世紀初頭であろう。

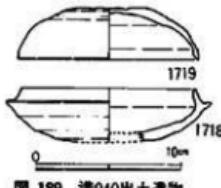


図 189 溝940出土遺物
実測図 (1:4)

III-4-d 井戸

ここで井戸とする遺構は、今回調査では1基のみを確認した。先述の井戸とは明らかに異なる。

井戸 53 (図184・190)

I-25区に位置する。掘立柱建物630と重複する。南半部は擾乱によって形状不明である。現状からすると、平面形は不整な円形状を呈し、その径3.8mを測る。覆土は、上部1/3程が暗赤色土で一様なのに対し、それ以下はロームブロックを含む部分との互層、更に八女粘土をまじえた黒色、灰色、白色の粘土の互層が堆積しているのが観察された。断面の形状は漏斗状をなす。底面は径1.0m程の円形状を呈する平坦面である。底面の標高5.8mで、確認面からの深さ3.0mを測る。壁面は凹凸が著しく、長期にわたり露出していたことを示すものかもしれない。また、土層断面では、井戸側等の施設、あるいはそれの抜き跡等の痕跡は観察することができなかった。

遺物は覆土中から多量に出土した。特に下半部では、一括投棄されたような状態での遺物の出土があった。

井戸53 出土遺物 (図191~197)

出土遺物には須恵器・土師器・瓦・石製品などがある。

須恵器

3033・3037・515・611・577は坏蓋である。3033は口縁部にかえり部をもたないので、外面天井部は回転窓切り離しのままで、他の部位は撫で調整を施す。3037・515・611は口縁端部に見受けられる小さなかえり部がつく。3037は口径が小さく、偏平な体部をもつ。611も偏平な体部で、つまみをもつ。577は口縁端部を小さく折り曲げるので、口唇部外面は沈線状に凹む。偏平なつまみがつく。これらは、いずれも外面天井部を回転窓切り離した後に、撫で調整で仕上げる。3037は小豆色、611は灰青色、577は灰白色を呈し、焼きは堅緻であるが、515は暗茶赤色を呈し、いわゆる「赤焼き須恵器」である。

3035・3036・3034・3039・3040は坏身で、蓋を受けるかえり部をもつ。3035・3036と比べ3034・3039・3040のかえり部は小さい。いずれも口縁部付近の破片である。体部中位まで回転を利用して窓切り調整が施される。灰色ないし暗灰色を呈し、焼成も良好である。

3019・3021・3020・3018・3015・3023・3016・3017は高台付き坏の高台部付近の破片である。高台部の形状から、いくつかに分類できる。3019・3021・3020・3018は高台脚部の端部が外方へ彎曲して跳ねる。3015・3023は外方に緩やかに彎曲する。3016は端部が両側に張り出す。3017は断面台形の高台部をもち、体部と高台部の境がなくなる。3019・3021・3020・3018・

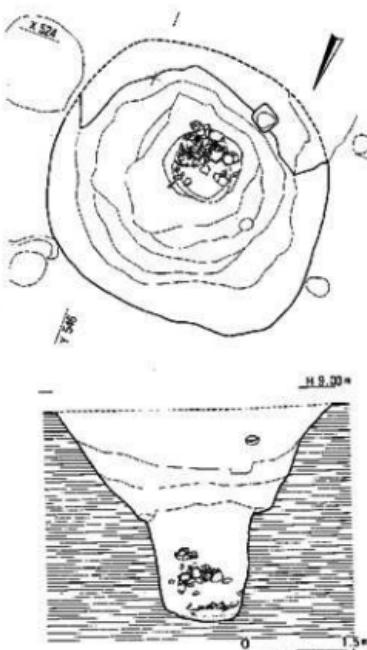


図 190 井戸53 実測図 (1:80)

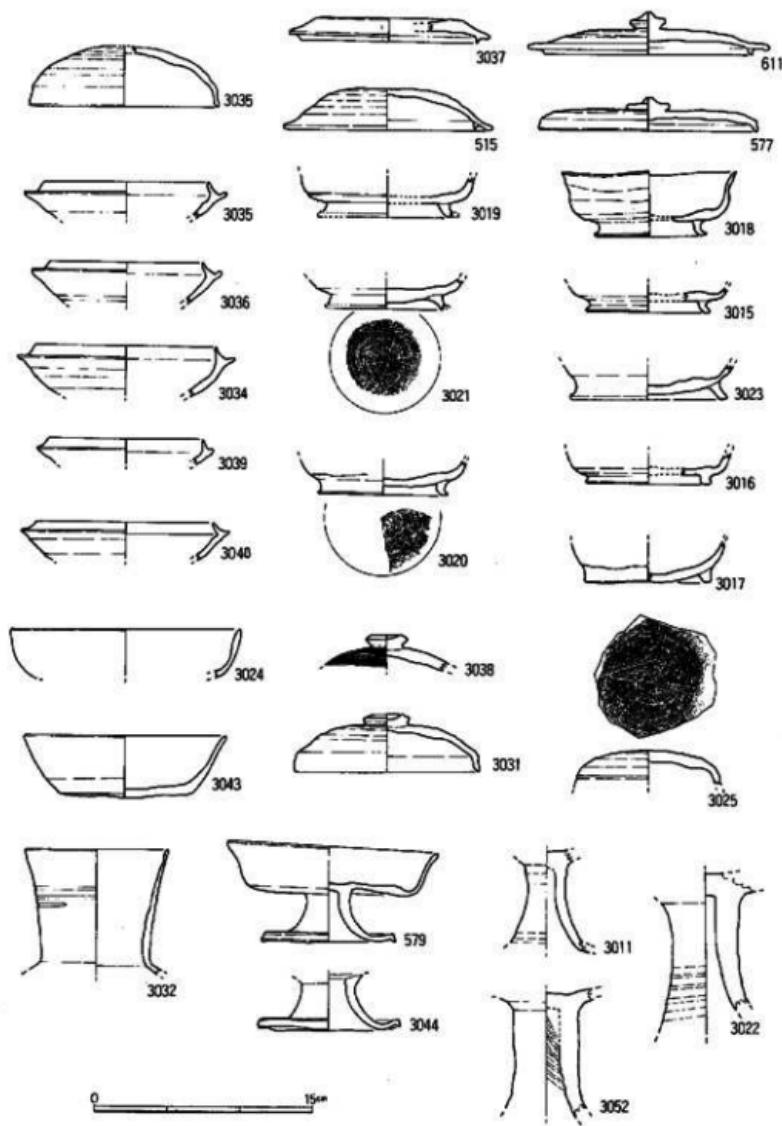


図 191 井戸53出土遺物 簡略図 1 (1:4)

3015は暗灰色、3023は淡灰色、3016・3017は灰白色を呈する。3021・3020は外底面に範記号がみられる。3024は高台付き壊の口縁部付近の破片である。小破片のため、口径は不確実。内外面ともに撫で調整を施す。暗灰色を呈する。3043は壊身で、茶赤色の「赤焼き須恵器」である。外底面は機械回転を利用した切り離しのままで、他は撫で調整を施す。

3032は壺の口頭部の破片で、頭の中ほどに螺旋状に2周半めぐる。外面とも撫で調整。灰白色を呈する。

3038・3031は有蓋高壊の蓋である。3038の外面はカキメ調整、内面は撫で調整。3031は外面ともに撫で調整が施される。579・3044・3011・3052・3022は高壊である。579・3044は短めの脚部をもち、脚端部を小さく折り曲げる。ともに器体の歪みが目立つ。壊部を回転観切り離し、脚部と接合させた後

に、全面を撫で調整して仕上げる。579は外面に灰を被り、脚端部には砂や粘土の小塊が付着する。

青灰色。3044は灰色を呈する。3011は脚部の破片で、細身の脚柱部に、緩やかに広がる裾部がつくと思われる。内外面ともに撫で調整する。暗灰色。3052・3022は長めの脚柱部で、偏平で口縁部を近く折り曲げる壊部がつくと思われる。脚柱部は絞り上げて成形する。灰色ないし灰白色を呈する。

3053と578は壺である。丸みをおびた胴部に緩やかに外反する口頭部がつく。3053の外面はカキメ調整の後に、波状文帯を頭部に1単位、棒部上半に3単位施す。内面には

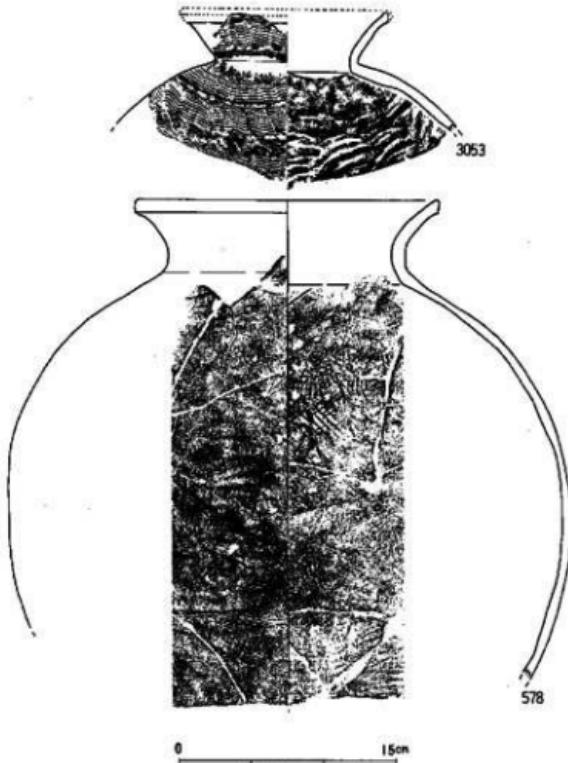


図 192 井戸53出土遺物実測図 2 (1:4)

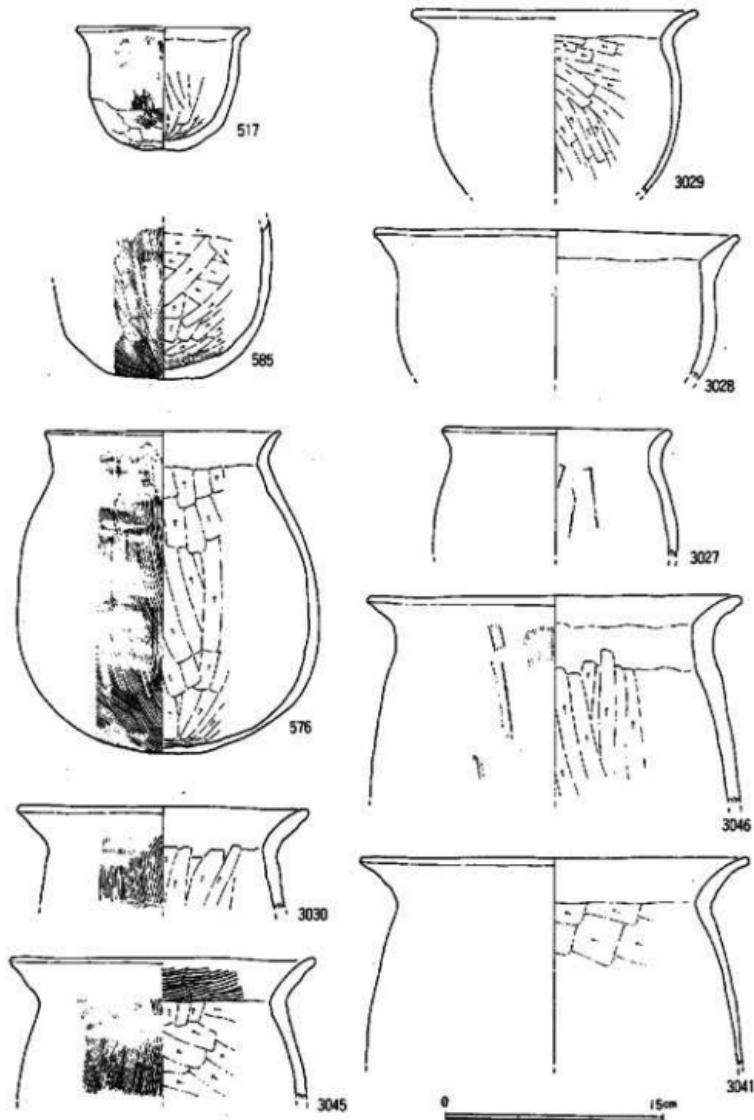


圖 193 井戸53出土遺物実測図 3 (1:4)

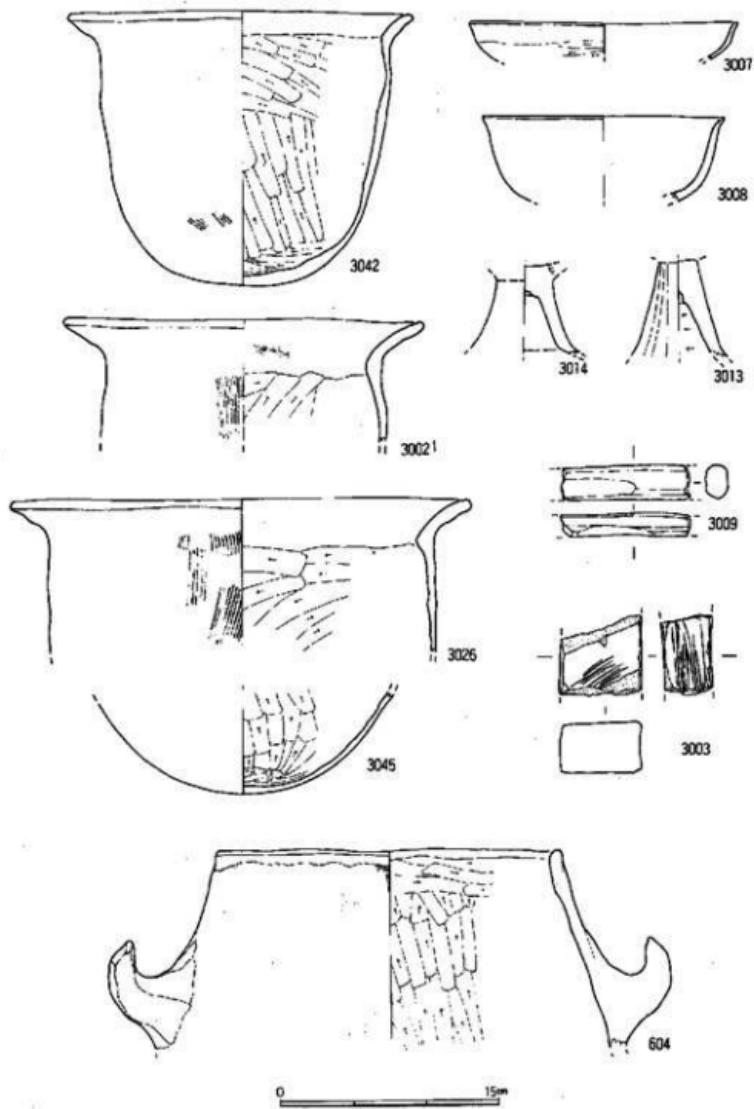


图 194 井戸53出土遺物実測図 4 (1:4)

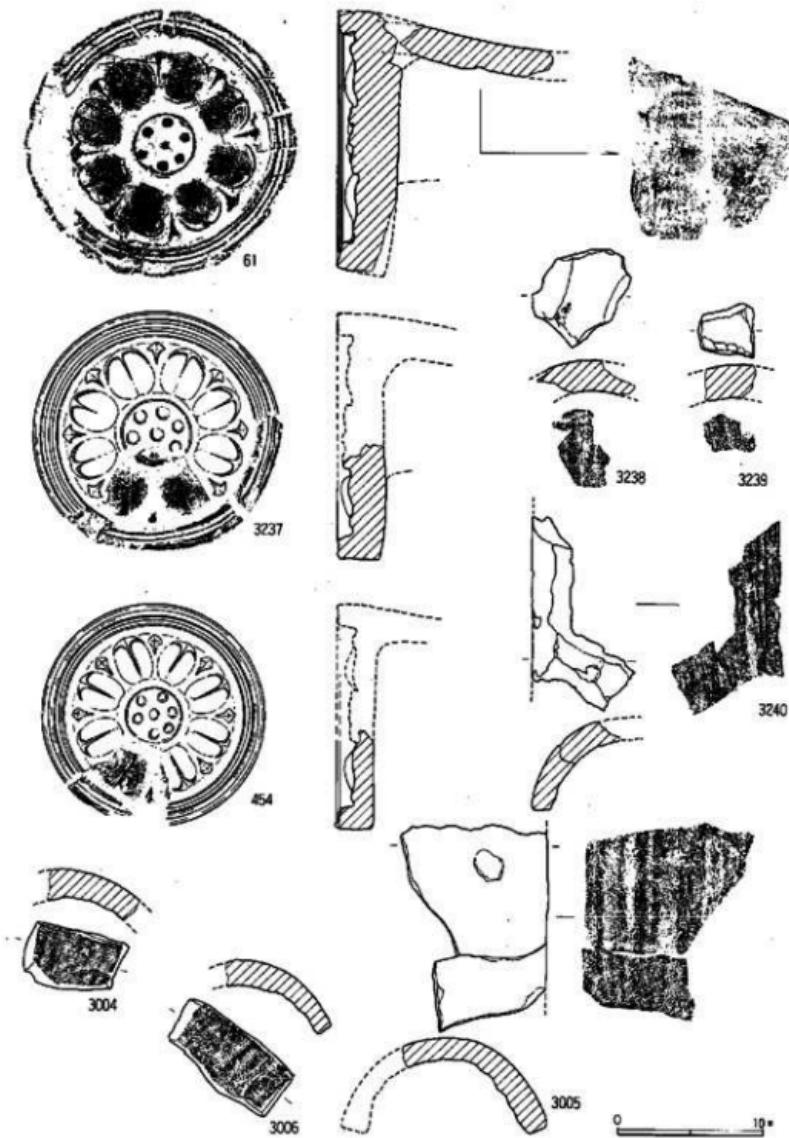


圖 195 井戸53出土遺物実測図 5 (1:4)

晴海波の叩き調整痕が残る。灰色を呈する。578は口頭部を撫で調整する。刷部外面は荒れが進んでいるが、部分的に格子目の叩き調整痕がみられ、内面には格子目と平行条線の当て具痕が残る。白灰色で、焼きはややあまい。

上部器

517は小型の壺形土器で捉えたが、鉢形土器に近い形状をもつ。ほぼ完形。口縁部付近は横方向の撫で調整、外面の胴部上半は刷毛目調整の後に撫で調整、下半は箆状工具で余分な粘土を搔き取り、刷毛目調整を部分的に施す。内面は指頭による撫で調整。

585・576・3030・3045・3029・3028・3027・3046・3041・3002・3026は、中～大型の壺形土器である。口縁部と胴部の形状から、いくつかに区分できる。576は短く「く」字形に外反する口縁部をもち、なで肩で下膨らみの胴部で、丸底がつく。3027と3046もほぼ同様な形状をとるが、口縁部は緩やかに外反する。3030・3045・3029・3041は口縁部は長めで、胴部内面の箆削り調整により口縁内面の稜線はシャープにつくり出される。最大径が中ほどにある丸みをおびた胴部をもち、丸底がつくと思われる。3042・3002・3026は、胴部がほとんど張らず、丸底がつくものである。こうした中～大型の壺形土器は外面を刷毛目調整、あるいはその後に撫で調整を施し、内面は乱雑に箆削り調整する。

3007は身が浅く、皿状の器形をもつ。口縁部の1/8ほどの破片のため口径は不確実。口縁部と内面は撫で調整、体部下半は手持ちの箆削り調整を施す。淡茶灰色。3008は鉢形土器で、口縁部をわずかに外反させる。約1/6の破片。内外面ともに丁寧な箆磨き調整を施す。

3014と3013は、高環形土器である。短い脚柱部の破片であり、3014は2次的な焼成を受け器面の荒れが著しく、調整手法の仔細は不明。赤茶色。3014は外面を箆状工具で面取りするよう撫で調整し、内面は箆状工具を回転させて削り調整する。明黄灰色を呈する。

604と3001は移動式の壺である。外面は刷毛目調整の後に撫で調整、内面は乱雑に箆削り調整する。604は1/6ほどの破片で、上縁部内面に帯状に黒変部がめぐる。外面は暗茶褐色、内面は明黄茶色を呈する。3001は色調と質から同一個体と思われる3片を図面上で復元してみた。付け底系統のものであるが、底部はすべて剥げ落ちている。淡茶赤色を呈する。

3009は棒状の破片である。全面指頭による撫で調整が施される。把手と考えたが、何かしらの土製品の一部の可能性も考えられる。

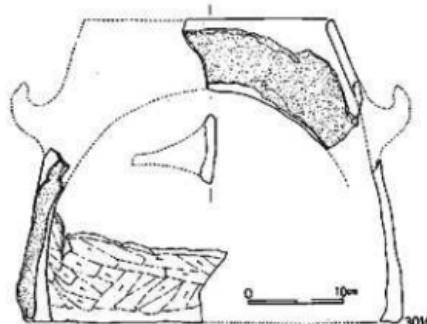


図 196 井戸53出土遺物尖測図 6 (1:6)

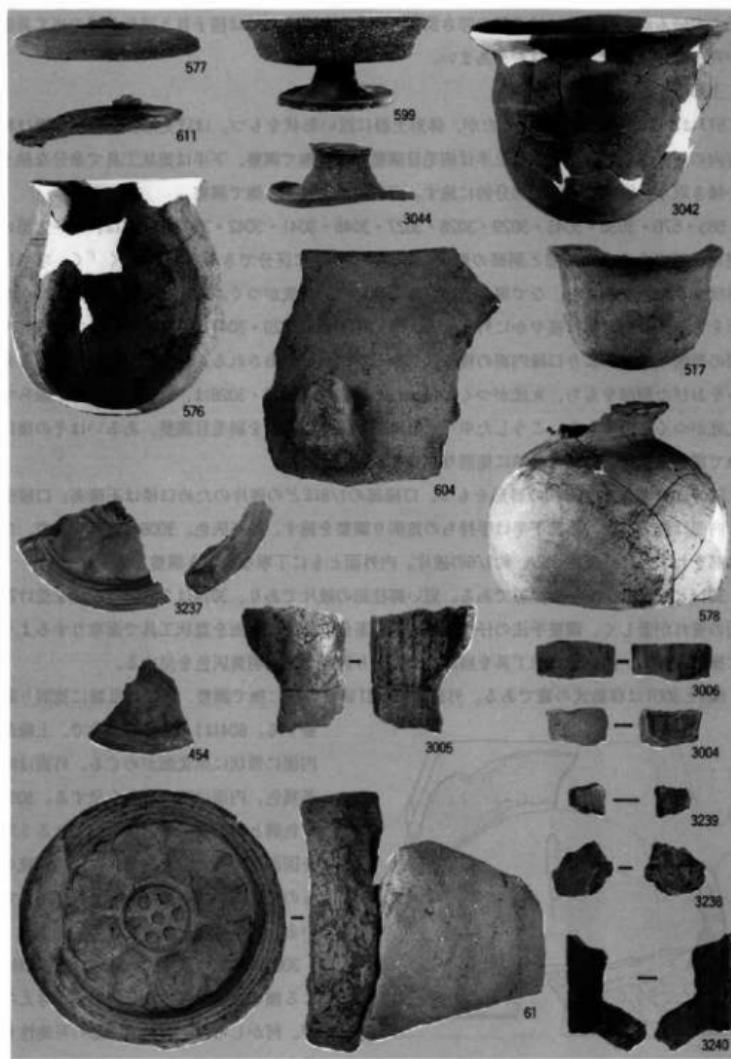


図 197 井戸53出土遺物

瓦

合計12点が出土した。接合作業をへた結果、10点になったが、個体数自体は4点ほどであろう。61は単弁8弁の軒丸瓦である。赤茶色を呈する。中房には1+6の蓮子を配する。花弁はふくよかで、端部も細くシャープな隆線で縁取りされている。周弁もシャープな稜をもつ。周縁は重圓文がめぐり、圓線数は4本である。外側の1本がめぐる部分と周縁は、内側より一段高い。版ずれが認められる。周縁は直立の高縁である。約1/4を欠損している。瓦当径17.7cm、厚さ4.3cmを測る。丸瓦のとりつけは比較的高い位置にある。内面に模骨と布目の圧痕がみられる。竹状模骨であろう。接合した丸瓦は509である。

3237も軒丸瓦の瓦当部分の破片である。焼きはあまく、表面は灰白色を呈するが、胎土は赤橙色である。中房部分は破損し失われているが、61と同型式のものであろう。花弁と周弁のつくりはシャープさを欠く。重圓文の圓線は2本で、やや版ずれが生じている。瓦当の径を復元すると17cm。厚さは3.3cmを測る。61と比べ小振りである。

3238と3239は内面に布目の圧痕をもつ丸瓦の破片であるが、色調と質から3237の丸瓦部分の可能性がつよい。

454も単弁8弁の軒丸瓦の破片である。3点の瓦当の中でもっとも堅緻に焼き上げられている。灰色を呈する。中房部分を欠損するが、61と同型式と考えられる。ただし、圓線数は3237と同じく2本である。推定径は15.5cm、厚さ2.7cmである。3240は色調や質が類似することから、454の丸瓦部分である可能性がつよい。内面には布目圧痕が残る。

3004と3006は同一個体で、橙色を呈する丸瓦の破片である。61と色調や質がきわめてよく似ている。61と同一個体である可能性をもつ。内面に布目圧痕がある。3005は丸瓦の破片である。赤茶色を呈する。61とは別個体であろう。内面には布目圧痕が残り、竹状模骨であろう。

このように53号井戸からは4個体分の瓦が出土している。しかし、いずれも軒丸瓦・丸瓦であり、軒平瓦や平瓦がともなっていないことは、何らかの意味があるのではないかろうか。

石製品

砥石の破片が3点出土している。3003はその1点で、両端を欠損する。上面と両側の3面を使用しており、細かな条線が集中してみられる。肌理の細かな砂岩を使用している。

以上の53号井戸から出土した遺物の中で、3033・3034・3036・3039・3040・3011・576などは7世紀でも中頃まで遡ると考えられ、577・3016・3017・3022・3052・3042・3002・3026などは8世紀前半まで下る遺物である。かなりの時間幅がある。

III-5 中世の遺構と遺物

中世の物とした遺構には、掘立柱建物625、溝245、413、土壙基555、がある。別に小穴多数があるが、関連遺物を示すのみに止める。

III-5-a 溝

出土遺物により、中世としたのは、溝245、413である。

溝 245 (図198)

I-14区に位置する。井戸255と重複しそれよりも新しい。幅0.4mを測り、深さは0.1mに満たない。両端が調査区内にある。覆土中から遺物が少量出土した。

溝245 出土遺物 (図199)

3257は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部を欠く。内面見込みには片切彫りのキノコ状文を描いている。器底は厚く、疊付きから露胎である。釉は深いオリーブ色。3258は須恵質のこね鉢の破片である。

これにより、溝の時期は12世紀後半と考えられる。

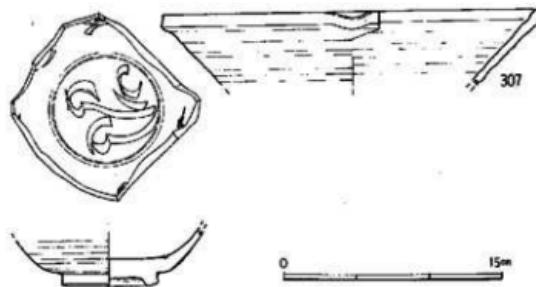


図 199 溝245出土遺物実測図 (1:4)

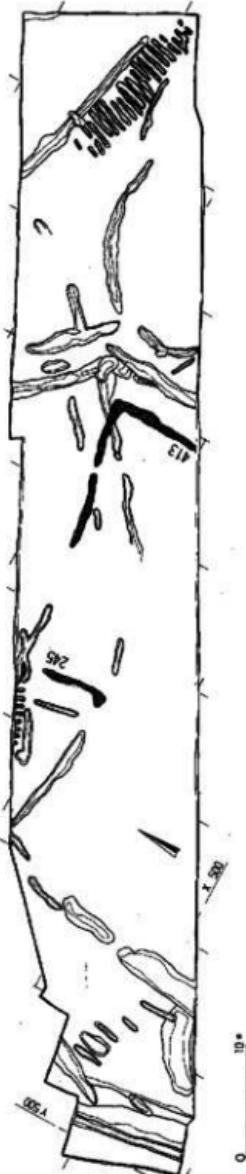


図 198 溝 (1:500)

溝 413 (図198)

I-24~26区と断続して検出された溝である。I-26区で最も幅が広く、幅0.8mを測り、この位置で大きく屈曲する。この位置より西は、溝の走行は東より僅かに北に振れ、その先はほぼ南へ向く。断面形状は逆台形状を呈し、底面の標高は8.6mを前後する。底面の傾斜はみてとれない。調査面からの深さは0.2m足らずである。

遺物が覆土中から検出された。

溝413 出土遺物 (図200)

437は白磁の碗である。折り返し口縁で三角形の正縁を作る。半軸。高台は幅広で、臺付きはわずかに残る。見込みに沈匿線がある。口縁部を2/3ほど欠いている。淡黄色に変色している。3252は須恵器の壺蓋の破片である。約1/4ほど残る。灰色を呈する。3253は須恵器の彫形土器の肩部の破片である。外面には自然釉がかかり光沢のある緑色を呈する。内面は青海波文のタタキ痕が残る。

これにより、この溝の時期は12世紀前半頃であろうか。方向からみて245溝と同時期であろう。

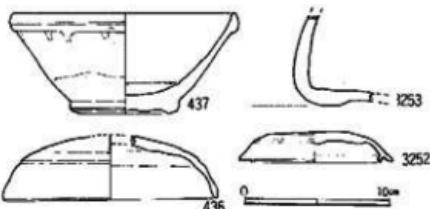


図 200 溝413出土遺物実測図 (1:4)

III - 5 - b 土壙墓

木棺墓 555 (図201・204)

I-36区に位置する。溝533に平行する北側の溝に切られる。主軸はほぼ頭の方向が西北より東に20度ほどずれる。掘り方は長さ1.75m、幅1.25m、深さ0.35mを測る。釘の位置から推定して、長さ1m以上、幅60cmの木棺が埋葬されていたと考えられる。棺釘は25本検出した。棺外に土師皿1枚と棺内に上師皿5枚と青磁碗1個、短刀1本が副葬されていた。棺外は黄色のロームのブロックを含む黒褐色土で満たされていた。棺内の土は暗茶褐色土である。

木棺墓555 出土遺物 (図202・203・205)

本遺構から出土したものは、副葬品の青磁碗、土師皿、短刀の他、棺材に使用された鉄釘がある。

1785は龍泉窯系の青磁碗である。内面には蓮華折枝文を描いている。見込みは無文である。底部は臺付きから露胎である。釉は深いオリーブ色を呈する。1786~1789、1790、1791、1802

$9.0 \times 1.0\text{cm}$, $9.0 \times 1.4\text{cm}$, $9.3 \times 1.2\text{cm}$,
 $9.5 \times 1.4\text{cm}$ である。

1792は短刀である。
刃渡り23cm、刃幅3cm、
厚さ6mmを測る。中子
の長さは8cmである。
840～1864は木棺の釘
である。27点出土して
いるが、折れて細片に
なったものも含まれる。
断面形は方形である。

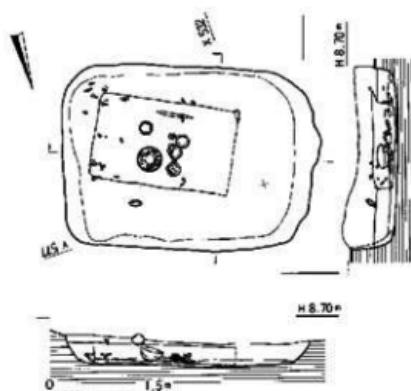


図 201 木棺蓋555 実測図 (1:4)

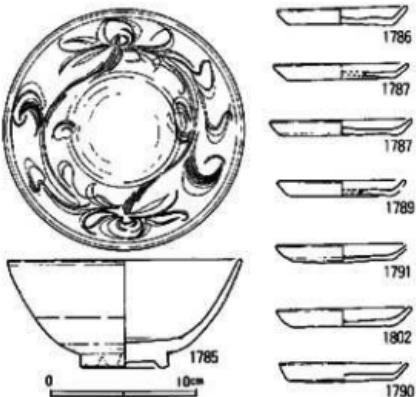


図 202 木棺蓋555出土遺物 実測図 I (1:40)

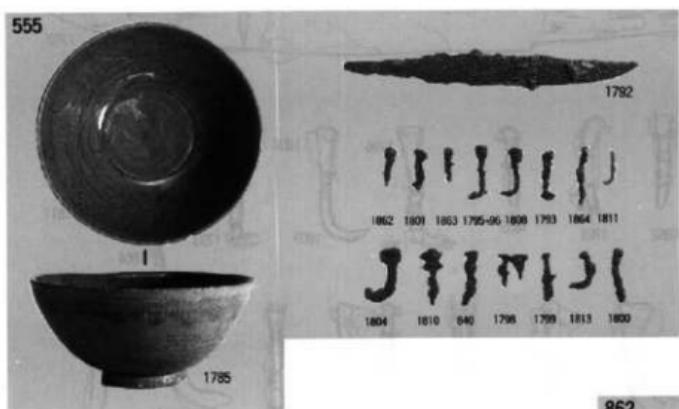


図 203 木棺墓・小穴出土遺物



図 204 木棺墓555（北から）

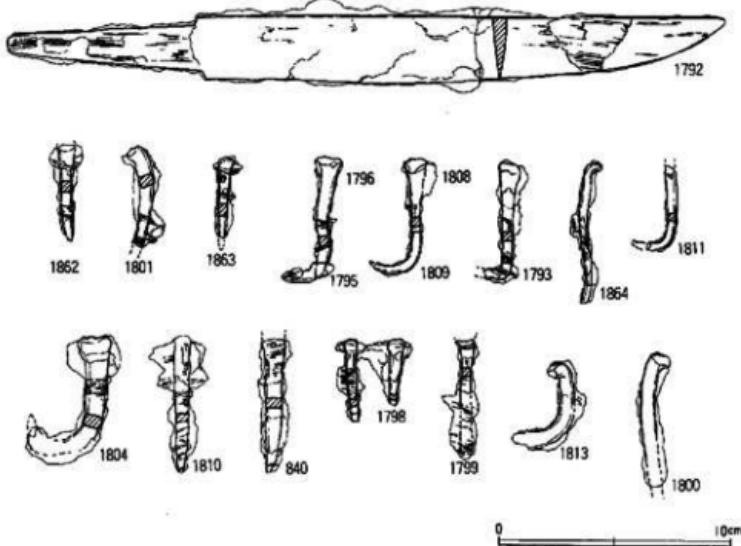


図 205 木棺墓555出土遺物 実測図 2 (2:5)

III-5-c 小穴出土遺物

小穴出土遺物 (図203-206)

1330は方形の棒状の土製品である。両面の中央部がわずかに窪む。長さ23.5cm、幅4.4cm、厚さ3.2cmを測る。小穴862より出土した。442は玉縁口縁の白磁碗である。完形品。内面見込みに沈圈線がある。また、製品か窓工具の目跡が内面にある。小穴415より出土した。989は同安窯系青磁の平底皿である。外面下半は露胎。見込みに沈線によるX字文と構描きによる粗い雷光文を描く。釉は青みがかった淡いオリーブ色である。完形品。小穴616より出土した。2184糸切底の土簡皿である。口径14cm、器高2.4cmを測る。ほぼ完形。小穴501より出土した。

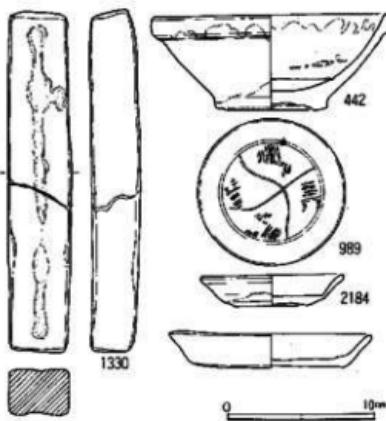


図 206 小穴出土遺物 実測図 (1:4)

III-6 その他の遺物

(図207)

2315は黒色の石材で作られた勾玉である。端部を欠損している。穴は鳥の管骨による物であろうか、筒状である。現存長29.5cmを測る。小穴2315より出土した。1727は滑石製の白玉である。下半を欠損している。7.5×7.7×3.5mmである。小穴1001より出土した。2319はナイフ形石器である。先細りの擬長刺片の打面側を表裏面から加工し、基部を作り出している。先端裏面に加工痕があり、先端もファシット状の剥離痕が認められる。黒曜石製。40.7×18.5×8.4mmを測る。一区の地山から出土した。59は黒曜石製の石刃状の刺片である。30.7×20.2×5.8mmを測る。バティナの程度から旧石器時代のものと思われる。堅穴住居51より出土した。

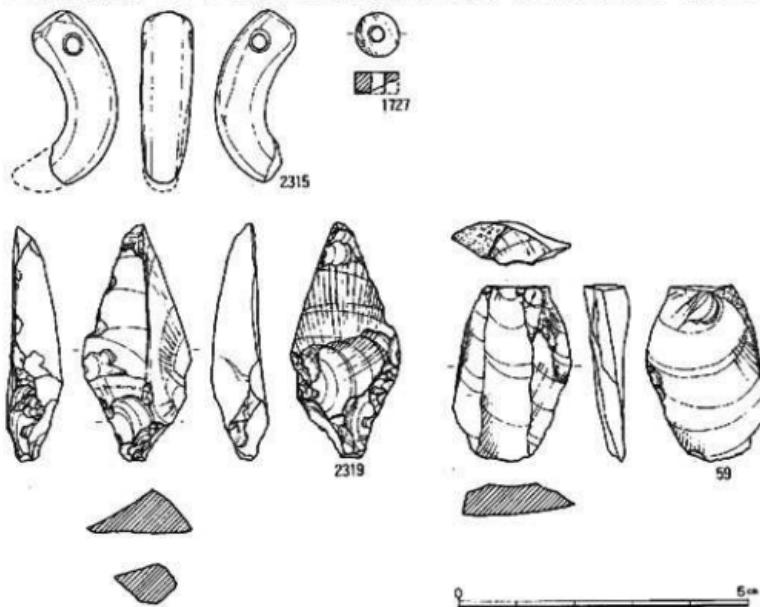


図 207 その他の遺物 実測図 (1:1)

IV. まとめ

ここでは、調査のまとめとして、1.各遺構の時期別変遷とその問題点、2.瓦についての二点について述べてみたい。

IV-1 各遺構の時期別変遷とその問題点

今回の調査で検出した遺構は、おおまかな時期としてⅠ期 弥生時代中期、Ⅱ期 弥生時代後期から古墳時代初頭、Ⅲ期 古墳時代終末から飛鳥時代、Ⅳ期 中世の四時期に分離出来るよう。遺構の種類としては、竪穴住居、掘立柱建物（住居・倉庫）、溝、井戸、墓などなどがある。ここでは、遺物を紹介できなかった掘立柱建物や溝についても時期別に分離出来る可能性のあるものを分離し、各時期毎の遺構配置とその変遷について考えてみたい。

① Ⅰ期（図210-a）

弥生時代中期の後半を中心とした時期で、Ⅰa期（中期後葉）とⅠb期（中期末）の二時期に分離可能である。上器編年でいえば須玖Ⅱ式の古段階と新段階に相当する。竪穴住居はⅠa期に240、300、790が、Ⅰb期に121、290、460がある。860は両期にまたがるが、790に近接することから、Ⅰb期に入るものであろう。280はⅠa期の可能性が高い。土器から時期を確定できない152、142については遺構の切り合い関係から推定して、152がⅠa期に、142はそれ以前に属する可能性がある。また、古墳時代初頭に位置づけられる900もその形状や規模、弥生中期の土器の豊富さなどからⅠ期に属する可能性がある。これより判断すれば、各住居は二軒ずつのまとまりを想定できよう。西から121と460、152と240、280と300、790もしくは860と900（？）の4グループである。

次に掘立柱建物について検討してみよう。今回の調査で、多数の柱穴と思われる小穴を検出しているが、建物として確認できたのは26棟とわずかである。このなかで最も多く検出したのは1間×2間の掘立柱建物である。これは方形の掘り方をもち、桁行2.5～3m前後、梁行3m前後と柱間が広いのが特徴である。この1間×2間の倉庫と思われる建物は、周辺の比恵6次調査や那珂8・23次調査や春日市の赤井手遺跡、須玖唐梨遺跡など各地の諸遺跡で検出されている。那珂遺跡では中期後半、比恵遺跡や唐梨遺跡では弥生時代後期に属する。ほぼ後期を中心とした時期に類例が多い。今回の調査で検出したこの建物は、16棟であるが、その特徴から他の掘立柱建物に比べると柱穴をひろいやすく、調査区外へ延びるものを除いてほぼ遺漏なく検出できたと考える。よってこの数字は実数に近いものであろう。これらを構成する柱穴には若干の例外はあるが、大部分が須恵器を含んでおらず、竪穴住居の時期幅にあわせ本遺跡でもⅠ期（弥生時代中期後半）かⅡ期（弥生時代後期～古墳時代初頭）に属するものと考えて良さうである。このなかで、Ⅱ期の遺物を含む建物は、600、642、1100などがある。この他に

構造は違うが、850(2間×2間)と1040(1間×1間)からもこの時期の遺物が出土している。ほかの掘立柱建物は遺物から判断しにくく、建物の配置や切り合い関係から推定する。この1間×2間の建物の方向にはある程度のまとまりがあることがわかる(図208)。建物の主軸が、北から20~25度東に振るAグループと70~105度東に振るBグループ、ほぼ110~120度振るCグループの3つに分かれる。AとCはほぼ90度のずれがある。II期の遺物を出土した建物はBグループに属する。また、遺構の切り合いをみると、AとCグループはII期の竪穴住居との切り合いが多く、逆にBグループの建物はI期の竪穴住居との切り合いが多い。また、建物の方向性と竪穴住居の方向は、AとCグループがI期に、BグループがII期に一致する。とくにこの傾向はII期が強いようである。これらを考え合わせて、I期にはA・Cグループの620、630、870、1090、1110が相当しよう。方向性からみてCグループに近い750、755は竪穴住居280との切り合いからII期に属する可能性が高い。構造の異なる305、290、1120などは、弥生時代中期の土器を含み、後期の土器を含まないが、これはこの遺構の上限を示すのみであるが、方向や切り合い関係からI期に属するものと考えたい。

この掘立柱建物と上で検討した竪穴住居との関係をみると、竪穴住居のAグループに一棟の倉庫が伴う可能性が高い。狭い調査区の限られた情報のなかでの検討であるので、歪曲した結果を招いている可能性も否定出来ないが、周辺の那珂8次調査でも方向の一一致する1間×2間の倉庫が2軒ほどの竪穴住居群に伴うという現象が認められる(図209)。またこの倉庫の方向は本調査区のCグループとはほぼ一致している。集落の形成にあたって建物の方向になんらかの規制が働いていた可能性もある。今後の検討課題であろう。

② II期(図210-b)

本時期は4つの小期に分離される。IIa期(弥生時代後期中頃)、IIb期(弥生時代後期後葉)、IIc期(弥生時代後期末)、IId期(古墳時代初頭)である。土器編年でいえば、西新式の占段階~布留1式段階に相当する。

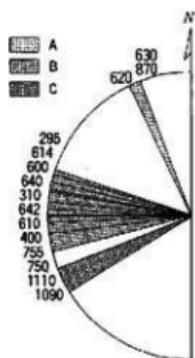


図 208 1×2間掘立柱建物の主軸方向

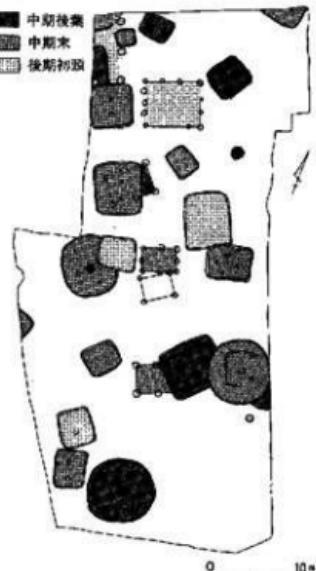
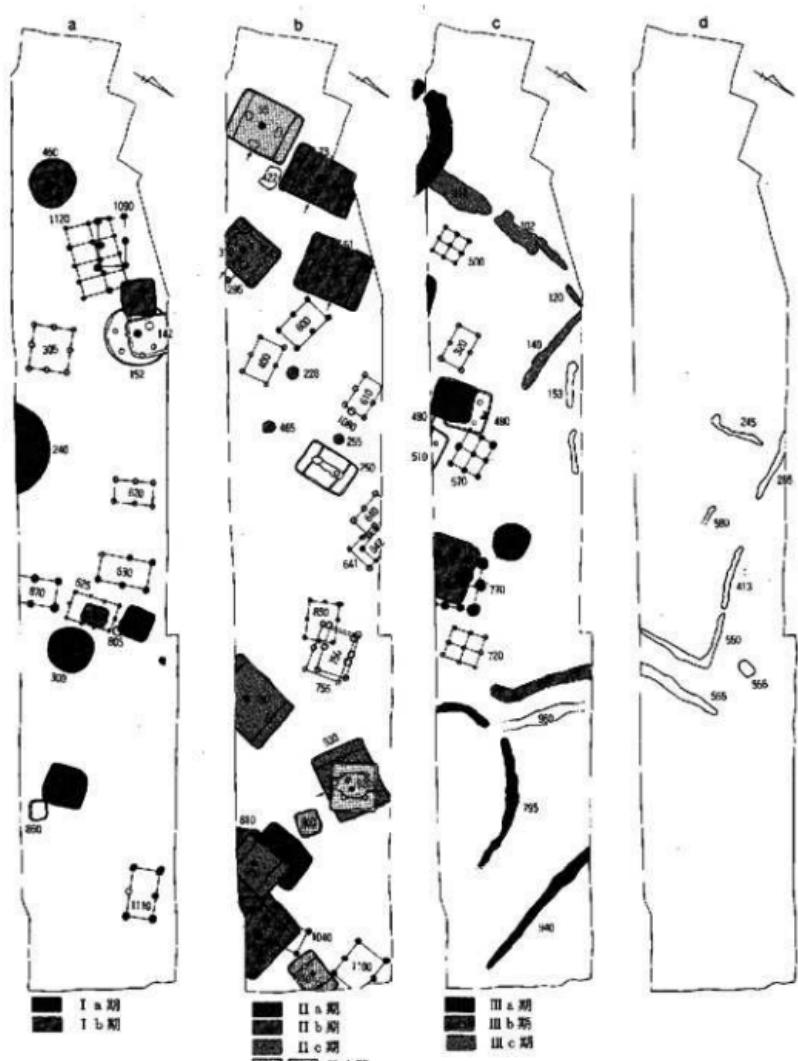


図 209 那珂遺跡第8次調査の弥生時代遺構(1:625)
(地図由来より作成一部改変)



図中に白抜きの遺構は遺物より時期を判定できないものをさす。
なお、据立柱建物の黒塗りの柱をもつものは、それぞれの時期での上限を示す。

0 10m

図 210 那珂造跡第13次調査造構変遷図 (1:625)

堅穴住居は出土した土器から検討して、Ⅱa期に820が、Ⅱb期に51、73、810、840が、Ⅱc期に1、780、800、930が、Ⅱd期に900、910、55、920が属する。井戸はすべてⅡb期に属する。井戸228は新しい高壙の小片もあり、Ⅱc期まで下る可能性もある。逆に井戸1080は平底があるので、時期的に遡る可能性もある。Ⅱc期の堅穴住居800は土器からみて、Ⅱd期までの時期幅を考えた方がよいかも知れない。また、Ⅱd期は古墳時代初頭(900、910)と初頭をやや下る時期(55、920)に分けられる。ただし先にも述べたように、900についてはⅠ期に入る可能性もある。

掘立柱建物は、Ⅰ期の項で述べたように1間×2間を中心としたもので、これに850(2間×2間)、1040(1間×1間)などが加わる。小期ごとの分離は不可能であるが、641と642、295と310、750と755のように方向と位置が重複したものもあることから、小期の時間幅での立替えを想定できる。

出土遺物がなく、明確な時期を決められない墓422はⅢa期まで下る可能性は少なく、この地点が住居地として利用されなくなるⅡd期からこのⅢa期の間に位置づけられる可能性が高い。各遺構の分布をみると、堅穴住居は東と西の二群に分かれ、その間の空間に井戸や倉庫群が設けられている。これはⅠ期でみられたような個別単位での倉庫の所有を示すものではなく、集落内で倉庫や井戸の占地空間を共用したものと考えられる。このような集落内で建て分けは、比恵6次調査でも確認されている。なお、住居の入口の方向はほぼ東から南東に収まる。

③ Ⅲ期(図210-c)

古墳時代から飛鳥時代にかけての遺構は、3つの小期に分けられる。Ⅲa期(6世紀末から7世紀初頭)、Ⅲb期(7世紀前半から中葉)、Ⅲc期(7世紀後半から8世紀初頭)である。堅穴住居920より出土した土師器の甕は、Ⅲd期かややそれを下る時期のものであろうⅢa期には堅穴住居215、480と溝65、795、940が、Ⅲb期には堅穴住居370、溝785が、Ⅲc期には井戸53が相当しよう。遺物から判断できない480は甕を北方向にもち370と同じである。480は、切り合いからみれば215より古く位置づけられるが、215と同じⅢa期の範疇で捉えておく。370は215に比べてやや新しい時期にあたり、北方向の甕をもつ住居が新しい可能性もある。510も西方向に甕をもち、215と同じである。500はすぐなくとも北には甕をもたず、このグループに属する可能性が高い。これにより、215と510、500はⅢa期のなかでも新しく、370がこれに次ぐものと考えられる。

掘立柱建物は2間×2間の純柱建物470、570、720と2間×3間の純柱建物770がある。遺構間の切り合いがあるのは480と570、370と770である。770は370より古く、Ⅲa期に属する可能性がある。出土した須恵器は小片ながらⅢa期のものである。570は切り合いから480より新しくⅢb期に属しよう。堅穴住居や掘立柱建物は調査区の南側に分布し、調査区外へ広く展開しそうである。このため住居と倉庫群の関わりについては、検討に耐えない。ただし、住居、倉

庫ともに北もしくはそれより90度振れた方向をもち、集落の構成にあたり一定の規制が働いていたことを窺い知る事ができる。

溝については、形状や方向に秩序は認められない。溝52や795は円形の周溝で、陸橋部も存在する。その方向はどちらも西側で、主体部は未検出であるが墳墓の周溝の可能性も否定出来ない。溝940はほぼ一直線に延びる溝で、居住空間を区画する溝の可能性がある。溝140と方向がほぼ同じで、412、102、112、120などと90度方向を違える。これらと一連のものであれば、ほぼ南北方向の区画が想定できよう。那珂8次の調査で検出されたSD04、SD08、SD09は、これらの溝と同じく、不連続で不整形である点や方向がほぼ北をとるという点で共通している。時期的にもほぼ一致する。ただし、溝140などは堅穴住居や掘立柱建物の方向とはややことなり、一部重なる部分もあることから、時期的に下るかもしくは性格の異なる溝である可能性もある。次の段階の溝785はその方向などから溝960と一連のものであろう。これは北から45度ほど振れた方向をとる。道路にともなう側溝の可能性がある。

これに次ぐⅢd期には井戸53が属する。この井戸からは单弁八弁の軒丸瓦が出土したが、この時期に属する建物は検出できなかった。

④ IV期（図210-d）

この時期の遺構はきわめて少ない。これは柱穴をすべて建物として復元できていないためで、覆土や出土遺物からこの時期に属すると考えられる柱穴は多数存在した。とくに溝795の東側はこのような柱穴が多数密集し、溝550の方向に一致するまとまりもみとめられたが、ついに復元できなかった。よって、本時期に属する遺構は、溝245、413、土壙墓555などである。

今回小穴出土遺物として報告した1330や989はいずれも穴のなかから出土し、1330は折れた状態で、989は完形で出土した。鎮壇の行為の結果であろうか、興味深い。

IV-2 瓦について

今回の調査では堅穴住居215と井戸53より瓦が検出された。また、小穴からも3点の瓦が出されている。いずれも7世紀前半から8世紀前半にかかるもので、いわゆる初期瓦と呼ばれる一群の瓦である。

堅穴住居215は時期的には6世紀末から7世紀初頭に属するもので、2点の丸瓦と1点の軒丸瓦の瓦当が出土した。丸瓦は2点とも特徴が異なる。1つは3225で、外面に叩きの痕跡をもち、内面に竹状の模骨と布の痕跡ともつ。内面は模骨に巻いた布の痕跡と重ね部分が明瞭に分かる。布は左巻き上げである。型より外した後、削りを加えている。外面は削りおよび撫で調整が施される。もう1点は3226で軟質の丸瓦である。器表面は荒れて、調整は不明であるが、外面に削りの痕跡がわずかにみとめられる。模骨は不明である。ただし、これと同質の丸瓦片が小穴から出土しており黄橙色で軟質の点も3226ときわめて類似する。この瓦の調整をみると

削りや撫で調整がみとめられ、内面には竹状の模様と布痕が認められる。九州において同じ時期の瓦を出土した遺跡に神ノ前窯跡があるが、本遺跡出土例とその特徴が異なる。調整の手法は同じ撫でや叩きを使用しているが、丸瓦に模様を用いない点や酸化還元で焼成する点などが異なる。また、沈線による瓦当文を描いた軒丸瓦の瓦当部は天台寺や杉坂廃寺より出土している松葉状の間弁をもつ軒丸瓦の瓦当と類似点が多い。この瓦は百濟系の単弁瓦とともに出土し、時期がやや下る。この瓦を意識し、製作されたものであれば、このような様式の瓦の初現の時期が問題となろう。いずれにせよ堅穴住居215出土上の瓦は、後世の飛鳥時代の瓦の特徴を備えており、出土土器との時間的な間隔がある。

井戸53から出土した瓦はすべて百濟系の単弁八葉の軒丸瓦である。周縁に2~3本の圓線による重複文をもち、中房には1+5の蓮子を配する。花弁は外端を反転し鋭く隆起させ、その間に楔形の間弁を配する。このような瓦は、豊前地方を中心に北部九州に濃密に分布している。周辺の春日丘陵では須恵岡本遺跡、赤井手遺跡などから出土している。また最新の情報では、那珂23次調査でも破片が出土している。赤井手遺跡は土壤から出土しているが、本遺跡の井戸の上半部を削られた形状によく似た土壤であることは興味深い。小田富士雄氏はこの瓦の型式分類と変遷についてまとめられている。この分類に従えば本遺跡出土品はⅢ-CとⅣ-B式に相当し、その年代は8世紀の前半から中葉である。井戸53は出土遺物から7世紀後半から8世紀前半と時間幅がある。瓦の構成も他の太宰府系や新羅系瓦などとの共通もなく、単純な構成である。型式的な矛盾はあるが、最も多く出土した須恵器の年代から、7世紀の後半の年代を与えておこう。今回はこの井戸に伴う掘立柱建物などは検出されていないが、周辺の発掘調査の成果からこの那珂台地に該期から奈良時代にかけての守か官衙的色彩の強い施設の存在が有力視されており、今回出土の瓦もそれを裏付ける貴重な資料と言えよう。

最後に、本報告を作成するにあたり、田崎博之、本田光子、柳沢一男諸氏には多大な御協力を頂いたことを記して、感謝の意を表します。とくに、本報告の時期区分や集落変遷の考察に関しては田崎氏の考えに負うところが大きい。

注)

- 1) 福岡市教育委員会 1983 「比恵遺跡 第6次調査・遺構図」福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集
- 2) 福岡市教育委員会 1987 「那珂遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集
- 3) 福岡市教育委員会 平成元年度調査
- 4) 春日市教育委員会 1980 「赤井手遺跡」春日市文化財調査報告書第6集
- 5) 春日市教育委員会 1989 「須恵店榮遺跡」春日市文化財調査報告書第1集
- 6) 太宰府町教育委員会 1979 「神ノ前窯跡」太宰府町文化財調査報告書第2集
- 7) 九州歴史資料館編 198 「九州古瓦図録」
- 8) 下村・悟氏教による
- 9) 小田富士雄 1964 「百濟系単弁軒丸瓦考・その一」『九州考古学研究』歴史時代編所収

那珂 2

那珂遺跡群第13次調査報告書 第222集

1990年（平成2年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 同盟印刷株式会社